昭南島

少國民
小説

昭南島

土家由岐雄著
山崎醇之助畫

昭南島

土家由岐雄

著者紹介

明治三十七年、東京に生る

東京工科學校卒業後、獨學

童話文學の執筆約二十年

曾つて昭南島に住す

現在、日本少國民文化協會囑託

主なる著書、長篇童話「虹の出帆」童話集「風鈴」長篇童話「ドイツ人形」童話集「朝やけ空」童話集「夢を賣る店」童話集「東京を買つたくづ屋さん」

昭南島が、まだイギリス領のシンガポールといはれてゐた時代から、この物がたりははじまります。

1

シンガポールといふところはまことに流星の多いところで、イギリスの編隊機が、ごうごうと一日ぢゆう炎天を飛びまはつて、やうやくその影を消す頃になると、あざやかな流星の下に、南國の夜をむかへる島であります。

海からのそよ風は、日盛りの暑さを吹きはらふやうに、さやさやと椰子の葉をひるがへして流れこむ二階の窓で、正夫は、算數の宿題をといてゐますと、窓下の廣い庭園で、親友のインド人、レイの呼聲がきこえてきたのでした。

『おーい。正夫。』

正夫は、よろひ戸が大きくひらかれた窓から首をつきだして下をのぞくと、バナナの木

かげに、白いパンツとシヤツを着たレイが、星かげに照らし出されてゐるのでした。
『レイかい。』
『ああ僕だ。何してゐるの。』
『いま勉強してゐるんだ。あがりたまへ。』
『じやまにならないかい。』
『大丈夫だよ。もうこの問題一つですむところだ。』
『ようし。』
レイは、病院を經營してゐる正夫の家の玄關にまはると、日本文字で同仁病院と書かれた白い門をくぐつて、長いろうかをすたすたと正夫の部屋にあがつてきました。
『算數かい。』
『ああ、さうだ。』
『すんだら、市役所の少年會館へ行つてみないか。』

『ああ行かう。僕もこれから聞きに行かうと思つてゐたところだ。』

『日本から、イギリスへ歸國する少年たちの演説會つて、一たいどんなことを、しやべるのだらうね。』

『さあ、僕にもわからないけれど、もしかしたら、日本の悪口でもいふのかも知れないぞ。』

『もしもさうだつたら、君はおこるだらう。』

『怒るとも、日本人だもの。』

『僕だつて、話によつては、東洋人の一人として承知しないぞ。』

『どんな演説會か、すこし氣になるなあ。』

『さあ、すぐに出かけようよ。』

『八時からだもの、まだ早いよ。』

シンガポールは生き生きとした、夜の國であります。

赤道直下の燒けつく太陽が、マラッカ海峽の大海原に沈むと、晝寢の夢をけりすてて、

この國の人達の、あわただしい生活がはじまります。したがつて、映畫も、演說會も、何もかも開催されるものは、夜の八時ごろからの習慣になつてゐるのでありました。

『レイさん、こんばんは。』

と、このとき、正夫の家の若い日本の看護婦が、食後のあつい紅茶と、輪切りにしたパイナップルを五つ六つ果實皿に入れて、さあ、めしあがれと、二人の前にそれをならべたのでした。そして、窓からの風に、白衣のえりを少しひらいて、「おお涼しい晩」といつてろうかにまぎれ込んで來た一匹の螢を追ひながら、階段を下りて行つてしまひました。

『正夫。君はイギリスをどう思ふ。』

『イギリスは、恩知らずの國だよ。』

『どうして。』

『お父さんの話によると、今から四十年も昔、イギリスは日本と同盟を結んで、いろいろ日本の世話になつたくせに、今では　蔣介石のしりおしをして、日本に立ちむかつて來る

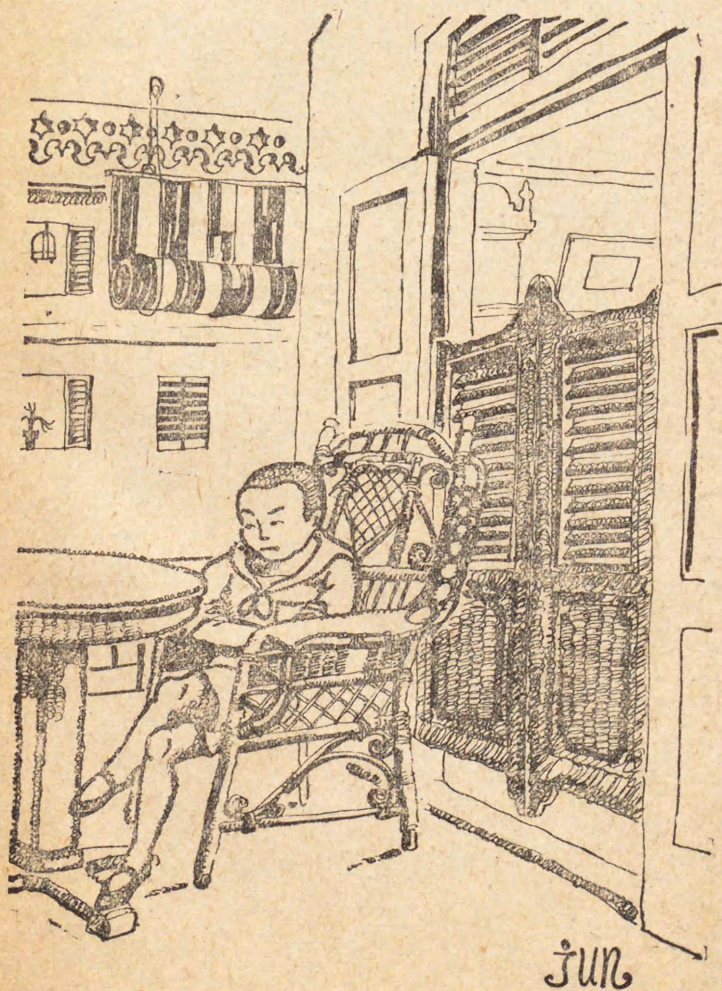
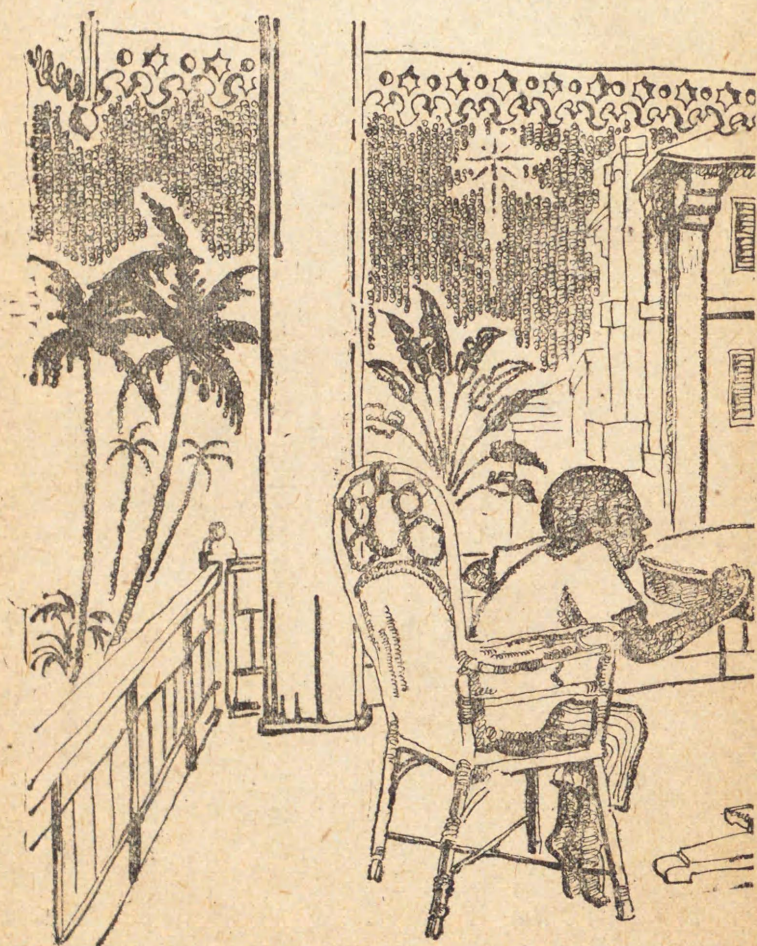
し、このシンガポールにだつて、ざんごうを掘つたり、砲臺をきづいたり、飛行機を朝から晩まで飛ばして、日本と戰ふじゆんびに一日ぢゆう馳けまはつてゐるぢやないか。何が紳士國だ。無禮きはまる國はイギリスだよ。』

『正夫、聲が高いよ。もしもスパイにきかれたら、引つぱられてしまふぢやないか。』

『君たちインド人は、イギリスをどう思つてゐる。』

レイはその問ひに、いきなり黑い顏をきんちようさせて、小さなこぶしを自分の鼻の先につくりあげると、眼をかがやかしていひました。

『君つ、インドは、じつに古い古い國だよ。イギリスが宣傳するやうな、そんなやばん國でもなければ、熱帶地にこのまま亡びてしまふ、けちな國でもないよ。インドは、ヨーロツパの國々の文化が、まだ今のやうに發達しない時代にもう最高の文明に達してゐて、その光りをこうむらなかつた國は、地上に一つもなかつたといふほどだよ。一例をあげてみても、その頃の寺院のすばらしい建築は、今なほ世界の驚異のまとになつてゐるし、また

君がいま勉强して
ゐるその算數だつ
て、十の數に達す
れば、一けた上へ
進む十進法といふ
ものを發明して、
近代科學のきそを
つくつて世界文明
の道をきりひらい
たのも、インド人
なのだよ。また、
おしやか樣を產ん

だのもインドだしタゴール、ガンヂーを產んだのも、僕の國インドなのだ。これらの人を聖人、偉人として數へあげない歐米人が、一人でもあるだらうか。そのインドが、イギリスのために、富をうばはれ、自由を

うばはれ、國をうばはれて、どれいのやうな生活をこのまま續けなければならないのだらうか。日本の正夫、僕たちインドの全少年は、この胸の中に、今こそ愛國の血をもやして勉強し、たくましい力を養つてゐるんだよ。わかつてくれるかい。』

『わかるとも。レイ、こんどは君の聲が高いよ。』

はつと、レイは黑い指先をひろげて口をおさへると、正夫と眼を見合せて、につこりとしたのでした。

『正夫、東洋人は、りつぱな東洋を、團結の力でつくりあげような。』

『僕の國日本では、全國民がいまその仕事にとりかかつてゐるのだ。』

『ほんとだ、ありがたう。僕らは期待してゐるんだよ。』

『よし時間だ、さあ行かう。』

『行かう。』

二人は紅茶をぐつとのみほして表通りへ出ると、正面の海にいびつ形の大きな月がのぼ

二人は紅茶をぐつとのみほして表通りへ出ると、正面の海にいびつ形の大きな月がのぼつて、海も人家も、おひしげる木々も、ことごとく、その白銀（しろがね）の色にぬられてゐるのでありました。

2

少年會館には、シンガポールに住む各國の少年たちが、もう、ぎつしりとおしよせてゐて、開會前の一ときを、そこに一團、ここに一かたまりとなつて、親しい者同志語りあつてゐるのでありました。

露臺（バルコニー）の月光の中に、にぎりこぶしを力強くつき示して、はげみ合ふドイツ少年と、イタリー少年らしい一團。

廣間の籐椅子（とういす）を引きよせて、日本人の正夫をすばやく見つけてまねく、インド、マライ、タイ少年たちの一群。

中庭のぼだい樹（じゆ）の茂みの下で、すつきりとした白い腕をのばして、手のひらをにぎり合

ひながら、胸を張り、肩をたたき合つて談笑してゐるアメリカと、イギリスの少年少女たち。

やがて、それらの少年たちに、りんりんとベルが鳴りひびくと、黒い顔、黄色い顔、白い顔が會場の座席を、たちまちうづめつくしてしまつたのでありました。

まもなく、盛んな拍手のなかに、日本からイギリスへ歸る十四五歳の少年が、頬にりんごのやうな色を浮かべて、波をうたせた金髪と、白い半ズボンに背廣服で、正面の高い席に上ると、頭上の飾電燈は一段とあざやかに少年の姿を照らし出したのであります。

しつかりと、左手でテーブルの端をつかむと、右手を空中にふつて、彼は、イギリスを代表して立つ少年のやうな態度で、演説をはじめたのでした。

『滿場の少年少女諸君。私は榮譽あるイギリス大帝國の一少年であります。今回、はからずも卷きおこつた、第二次ヨーロッパ戰爭に際して、祖國のために銃をとつて立つた父につれられて、ただいま、日本からイギリスへ歸國するその途中であります。日本に住んだ

過去五年間の、日本の印象について、これからお話をいたしたいと思ひます。』

場内、千餘名の各國少年たちは、一樣に上半身をぐつとのり出して、今こそ全世界に輝く日本を、しつかりとつかみ知らうと身がまへて、つぎの言葉を待ちかまへたのであります。

『諸君、御承知のとほり、日本は、いま支那と戰ひ、連戰連勝をほこつてをります。また、新しい東亞建設のために、國をあげての、くわつぱつな働きをも見せてをります。しかしながら、これからの日本は、もはや、なんら恐れるには及ばないのであります。』

この一言に、物音一つしない會場は、さらに密林のやうな不氣味さを加へて、しんと靜まりかへつたのであります。

イギリス少年は、さらに熱をもつて、演說をつづけるのでありました。

『現在の日本の強みといふのは、どこから來てゐるかと考へますに、それは過去の、日本の大戰によつて得た、一つの信念にもとづくものであります。卽ち、日清、日露の、あの

國難を體驗して來た父母の敎養のもとに育てられた少年たちが、現在の日本に成長して、活躍してゐるからであります。しかしながら、今後の日本は、斷じて恐れるには及びません。なぜならば、日本は今、かいびやく以來の大きな國難に直面してゐるにもかかはらず、祖國の隆々たる國運に安心しきつた青少年たちは、未だに自らの危機を知らずに、生かせば國力となる貴重の時間を、ただうかうかといたづらに過してゐるのであります。彼等には恐らく何の覺悟も決意もないのでありませう。苦勞知らずの家に育つたお坊ちやんと同じであります。』

少年は、テーブルの水さしから、コップに水をついで、おもむろに飲みほすと、大英國にうまれた幸福を示すかのやうに、ひとわたり場内を、いういうと、見まはしたのであります。

正夫は、初めて聞く祖國の人の態度に、きりきりと痛んでくる胸を力強く腕ぐみでおさへて、冷靜に考へたのであります。

嘘だ、祖國の姿は絶對にそんなものではない。我々海外に住む同胞でさへも、朝に夕べに波濤のかなた、東方を遙拜して、質素、儉約をむねとして、しかも精神、體力を充分に養ひ、銃後國民としての御奉公に努めてゐるではないか。祖國の少年少女たちが、靴もなく、下駄もなく、すで足でたくましく通學してゐるといつぞや聞いたとき、我々在留邦人はことごとく日本人クラブに集まつて、そのいぢらしさに、一晩聲をあげて抱きあつて泣いたではないか。三度の食事を二度にして、獻金をかさね、慰問品を送り、わが大日本帝國をはるかに思ひわづらつてゐるではないか。海外においてさへもこのやうな心がまへであるのに、まして日本に住む者が、なんでこの際、むだな生活が出來るものであらうか。たとへそのやうな人が二三あつたとしても、自分が、いつぞや、この國に日本の朝顔のたねをまいて失敗したやうに、土地に合はないものは、芽も出なければ葉も出ないで自然のうちにほろびてしまふ。その人達の生活も、日本の土地においては、自然にほろびてしまふ生活だ。このイギリス少年め、何をいふか。

正夫は、腕ぐみをほどいて、うなだれた首を、きりりつと正面に立てなほすと、再びすきとほる聲が、壇上(だんじやう)から耳を打つて來たのであります。

『――それでありますから、我がイギリス、及びアメリカが愛する支那は、たえず、ひるまず、長期抗戰をつづけてをれば、最後の勝利を、その頭上に、輝き得ることは明かなことであります。この會場にをられる、約半數以上の支那少年諸君、覺悟は充分に出來てをりますか。日本などは恐れるに及びません。なほこの會場に日本の少年諸君がをられるなら、その言ひ分をききませう。』

先刻からこぶしをにぎつてゐた正夫は、千餘人の視線(しせん)をあびて、靜かに立ちあがると、正面に叫んだのであります。

『私は日本人であります。我が大日本帝國は、君らイギリスなどがいふやうな、隣邦(りんぱう)支那と戰つてゐるのではありません。支那とともに、共存共榮の大東亞を今こそつくるために、支那の害蟲、蔣介石と戰つてゐるのであります。これは、世界を一つの家とする日本の大

支那の害蟲、蔣介石と戰つてゐるのであります。これは、世界を一つの家とする日本の大理想を實現しようとするもので、東洋人には理解が出來ても、アメリカ及びイギリス人にはたうてい理解することの出來ない大精神であります。』

わつといふ大勢の叫び聲が、場内にばくはつしました。マライ、インド、タイ國の少年たちが、そこここに立ちあがつて、しきりに手を打ちはやしたのであります。

ややあわてたイギリス少年は、前方の席にゐる一少年支那人を指すと、やさしい聲を出して救ひを求めようとしたのでした。

『では、支那のお方。あなた方は、どうお考へになります。』

白いつめえりの服をきちんと着た、眼元(めもと)のすずしいその少年は、かすかに笑みをふくんで立ち上りました。

『支那は、いま新しくうまれかはりつつあります。我々支那人は、東洋平和のために、また東洋が共に榮えるために、大きな希望をもつて、いま、大日本と手をくんで、共に足なみをそろへて進みつつあります。イギリスこそは、東洋から一刻もはやく、手を引くべき

であります。東洋の天地は、わが東洋人が住むために、神からあたへられたものであります。』

きつぱりと言ひきつたその聲に、床板をふみ鳴らして手をたたく者。かん聲をあげて壁を打つ者。その中に叫び合ふ數十ケ國の言葉が、圓天井にごうごうとひびきわたつて、會場は大こんらんにおちいつてしまつたのでした。

その頭上を、どこからか羽蟻の群れが次ぎ次ぎに飛びまはつて來たかと見るまに、少年たちがたたきはやす四方の壁のわれめから、ふみならす床板のくされめから、續々と數萬の羽蟻が舞ひあがつて、たちまち、場内を濃霧のやうに閉ざしてしまつたのであります。

『正夫、逃げよう。』

『これは、たまらない。』

二人は頭をかかへて、白服の地をうづめつくした羽蟻をはたきながら、他の少年たちとなだれを打つて、少年會館を飛び出したのでありました。

なだれを打つて、少年會館を飛び出したのでありました。

3

演說會場を飛び出した少年たちの群れを追つて、羽蟻の大群は、窓から、玄關から、なほもうもうと煙のやうにおしよせて來るのでした。

『レイ、いそげ、いそげ。』

『とても、すごいや。正夫どこへ逃げよう。』

『テニスコートへ、走れ走れ。』

『さうだ、よし。』

二人は、眼ばかり出した羽蟻のマスクをかけたやうな顏を、右手でぴしやぴしやとたたきながら、全身をまつ黑くうづめたものを、左手ではらひながら、少年會館橫の、綠の運動場まで走つて來たのでありました。

『正夫、まだ君の背中に一ぱいゐるよ。はたいてやらう。』

『ありがたう。なあんだ、君の頭にも一ぱいだよ。レイ。』
『驚いたなあ、どこから飛び出して來たのだらう。』
『みんなが、どんどんたたいたり、踏みならしたりした壁と、床板のくされめから出て來たのだよ。』
『これぢや、イギリスの演說會も目茶目茶だな。ごらんよ、まだあんなに出て來る。』
外は、明るい月夜であります。
すみきはまつた南國の月光に、靑々と染まつた少年會館の窓からは、なほも、絹織物を引き出すやうな輝きを見せた羽蟻の大群が、八方へひろがつて行くのでありました。
『歸らう。』
『うん、歸らう。』
朝と、午後のひとときを、テニスや、ラグビーでにぎはふ廣い綠の大運動場を右にして左側に海を眺めながら、二人は、ほつと一息ついて步きはじめたのでした。
海と陸との境には、見あげるほど高い鐵條網が、えんえんと、どこまでも遠く、海岸に

左側に海を眺めながら、二人は、ほつと一息ついて歩きはじめたのでした。

海と陸との境には、見あげるほど高い鐵條網が、えんえんと、どこまでも遠く、海岸にそつてのびてゐます。

その向かふに、白銀の波をひるがへして沖までも輝く海は、その波濤の下に日本をおそれる數千の敷設水雷をかくしながら、海面を月夜の美しさで飾つてゐるのでした。

『正夫、あれ、なんだらう。』

レイが指さす、はるかな、ぼだい樹の並木の下に、一群の人だかりが明々とはだか電燈に照らし出されてゐるのが見えるのでした。

『なんだらう、行つて見よう。』

二人は、中途はんぱな演說會に滿たされなかつた心ををどらして、海からの風を受けながら走りよつて、その人だかりの輪に加はつたのでありました。

見ると、海を背景にして、白い軍服に似た國民防空群の服を着た、背の高い、鼻めがねをかけた一人のイギリス人と、頭の毛を眞ん中から、ぴかぴかと油で分けた色の白い支那

人とが、木製のもけい爆彈をアスフワルトの路上にならべて、シンガポールの人々に、爆彈の恐ろしさを說明してゐる最中でありました。

汗を流して說明するイギリス人の前には、自分の背くらゐもある五〇〇キロ爆彈と、また腰のあたりまでとどく二五〇キロ爆彈と、もう一つ小さな、一〇〇キロ爆彈の三個がならべられて、二百人近くの群集は、路上に足をなげ出し、或ひはあぐらをかき、はだし、はだかで、支那人、マライ人などが眼を光らせて、それを見つめながら、說明をきいてゐるのでありました。

鼻めがねをうごかしながら、イギリス人の演說は、さらにつづくのでした。

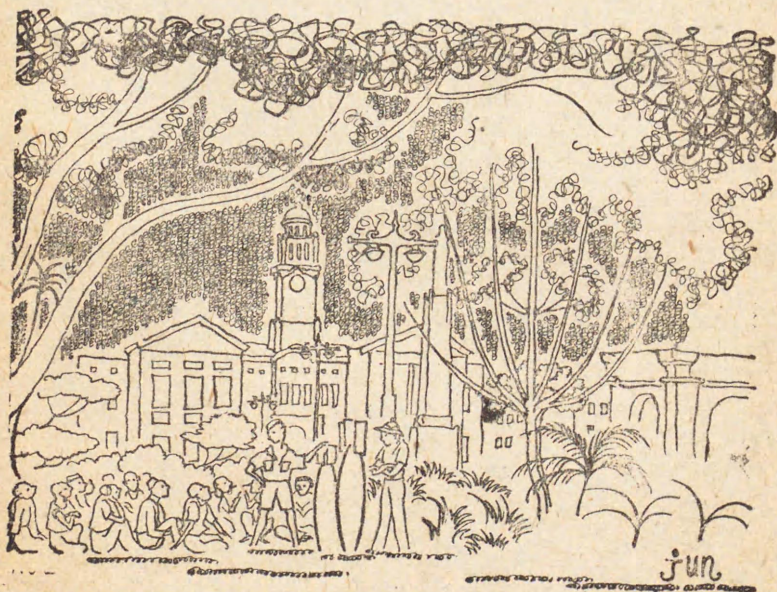
『――空襲とは、このやうに恐ろしいものでありますが、しかしながら、備へさへ充分に出來てゐれば、なんらの憂ひはないのであります。

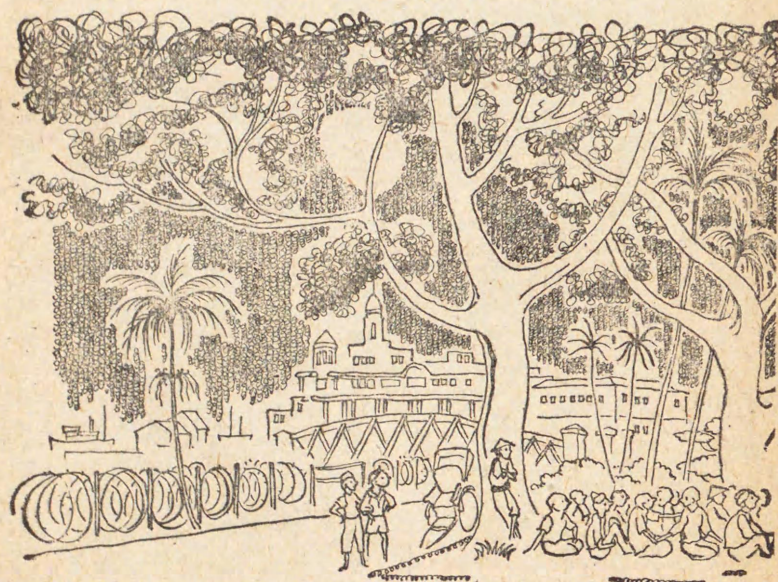
平時から、空襲のあることを豫期して、このシンガポール全島民が、防備の手配と、萬一の場合の覺悟さへしつかりと肚にこしらへておけば、どんな空襲にあはうとも、怖れる

一の場合の覺悟さへしつかりと肚にこしらへておけば、どんな空襲にあはうとも、怖れることはないのであります。
恐怖感におそはれるやうな精神では、だめです。いたづらに、敵を恐れ、敵の力を過大に見つもるやうな態度では、たうてい戰ひに勝つことは出來ません。
今や、防空は、シンガポール島民の義務といふよりも、もはや、あなた方の生活の一部になつてゐるのであります。しかも、家を守るといふやうな、そんな小さなことではなく日夜、榮えに榮えて來た、この、諸君の、シンガポールを護るといふ、すぐれた精神を持たなければなりません。それと同時に、わが大英帝國をぜつたいに信頼して、官民一致、以て、シンガポールの防衛にあたらなければなりません。
ではこれから、爆彈の威力について、御説明を申しあげます。』
上衣の背中まで汗をとほして、イギリス人はうしろへ引きさがると、それまで二五〇キロと書かれた爆彈をなでながら待つてゐた支那人が、今度は一禮して説明をはじめたので

した。

『敵の飛行機は、かならず、重要建築物の破壞を計畫して、おしよせて來ることは明かなことであります。又それと同時に、爆彈の威力によつて、銃後を恐怖、こんらんにおとしいれて、戰ふ意志を失はす效果をも、ねらつてゐるのであります。この場合、私たちは、只今もお話がありましたとほり、いつ、いかなる場合にも、しつかりとした準備と、心構へとをつくつておかなければなりません。

では、これから、爆彈について御說明をいたします。

爆彈の大きさといふものは、だいたい五〇キロから一トン程度までありますが、ふつう三〇〇キロぐらゐまでのものが多く用ひられてをります。

この爆彈の體內には、およそ、全重量の四〇パーセントから、六〇パーセントの爆藥が裝置されてゐます。また今回の歐洲大戰では落下してから一定の時間が來ると、爆發する時計爆彈、或は、音響爆彈といつて、飛行機をはなれると、百雷がとどろくやうな大音響を發しながら落下して、恐怖感をおこさせる爆彈なども使用されてゐます。

これら爆彈の威力は、投下される爆彈の大きさと、目標によつて相違しますが、投下された爆彈が、目標物に命中した場合には、落下して來た勢ひで、屋上をつらぬいて爆發すると、その强烈な衝動で、破壞がおこなはれると同時に、爆發によつて、周圍の空氣中には、さらに壓縮された空氣の波、これを爆風といひますが、この爆風の壓力で、附近の物を破壞する一方　居合せた大半の人間を死亡させてしまふ場合があります。また、さらに爆彈の破片が、非常な力で飛び散りますか、らこれによつて、人間はもちろん、家畜の水牛　羊をも殺傷する恐ろしい威力を發揮するわけであります。

その威力を、今ここにある二五〇キロ爆彈について説明いたしますと、まづ爆發點から三十メートル以內の路上にゐた者は、爆風のために全部即死して、四十五メートル以內にゐた者は、この破片のために、これも全部死亡いたすのであります。

では、皆さんが、いま盛んに造つてをられる防空壕にはいつてゐればどうかといひますと、これなら、落下場所から、約十二メートルもはなれてゐれば、まづ安全なのでありま

す。』

このとき、レイが、かたづをのんできいてゐる正夫の腕を引きました。

『正夫、歸らうよ。もうおそいから。』

『ああ歸らう、何時頃だらう。』

『九時半か、十時頃だらう。』

『車に乘つて歸らうか。』

『ああ、さうしよう。』

シンガポールの町には、支那人力車が、日本の自轉車よりもたくさん、大通り小通りをうづめてをります。車は、たいがい大人二人がならんで腰をかけられるほどの、大きさに出來上つてゐて、一人乘つても、二人乘つても、その値段に變りはなく、一キロほど走らせて十錢ぐらゐですむのでありました。

二人は、群集のうしろに車をおいて、そこに腰をかけながら、はだかの腕をくんで月を

眺めてゐた車夫を呼んで、その汗くさい車に乘りました。
車は、たちまち人だかりを後にして、海岸通りを明るい町に向かつて走り出したのであります。
『正夫。いま聞いてゐた人たちの中に、白人は一人もゐなかつたね。』
『ああ、ゐなかつた。支那、マライ、インドの人たちが多かつたね。』
『みんな東洋人だつたね。』
『ああ、東洋人ばかりだつた。』
『東洋の港々を、イギリスにうばはれた國の人たちは、誰も本氣で、あんなことなんか聞いてゐるものか。』
『君も、さうだつたのか。』
『さうだとも。インドは、イギリスに對して深い深い恨みを、骨のずゐまで持つてゐるからなあ。』

車は、月光にかがやくなめらかな道路を、すべるやうに風を切つてゐるのでした。

『レイ。今夜の演說會の話ね。あんなことは、みんな、イギリス人のつくり話なんだぞ。日本人は、大人も子供も、商人もお百姓も、今みんなひとかたまりとなつて、國のために働いてゐるのだぞ。あんな話のやうな者は、一人だつてゐないことを僕は君にちかふよ。それとも、君は、あの話を信じてゐるのかい。』

『ばかだなあ正夫は。僕たちが大さわぎしたので、羽蟻が飛び出すほどの大こんらんになつてしまつたぢやないか。』

『あの話は、うそとわかつてゐても、僕はくやしくつてしやうがないのだ。日本は、君、僕の國なんだよ。お父さんお母さんを生んでくれた國なのだよ。そして、お祖父さん、お祖母さんが今住んでゐる國なのだよ。萬世一系の天子樣を、二千六百年もいただいて來た世界にほこることの出來る大和民族が、大東亞建設に、今、力を合せて進んでゐる國なのだよ。あんなこと、あるものか。』

『さうだとも、うそつきイギリスめ。』

『こらつ、お前たち、聲が高いわい。』

と、このとき、いきなり車夫が、走りながらどなつたので、二人は腰が飛び上るほどびつくりしたのでありました。

しばらくだまつて走らせて行くと、前方から寄港客らしい日本人が一人、左右の店舗をのぞきながら、人力車に、ゆられて來るのを、正夫はふと見つけて、聲をかけたのでありました。

『をぢさん、何かさがしてゐるのですか。』

白いヘルメツト帽子の下に、チヨビひげをはやした四十ぐらゐの人は、白麻の服からハンケチをとり出して、ひたいの汗をふいてゐましたが、いきなり日本語で呼びかけられたので、驚いた眼を正夫に見はりました。

『おお、あなたは、日本人ですね。』

『さうです、をぢさん。』

たがひに車上から聲をかけあつたので、兩方の車はならんで停められました。

その人は、まつ黑い印度少年とならんでゐる日本少年の姿を、なつかしさうに眺めて微笑んでゐましたが、やがて、

『ここにゐる日本人は、みんな元氣ですか。』

と、たづねました。

『はい、とても元氣です。』

『いぢめられてゐるやうな者は、一人もありませんか。』

『いぢめられても、僕たちは、がんばつてゐます。』

『ありがたう。その元氣でどうぞ暮らしてゐて下さい。お父さんは、なんの御商賣をしてゐるのですか。』

『病院を開いてゐます。』

『お醫者さんですね。』
『さうです。』
『どんなに苦しいことが起つても、お醫者さんは、ここにゐる同胞(どうはう)のために、一番あとまで殘つてゐて下さいと、お父さんに傳へて下さい。』
『はい。をぢさんは、どこから來たのですか。』
『をぢさんはね、ロンドンから、日本へ歸るところです。』
『何か、さがしものでもしてゐるのですか。』
『いや、あんまり暑いので、もし、扇子(せんす)でも賣つてる店があつたら、買はうと思つてゐたのですよ。』
『シンガポールに、扇子を賣つてゐる店は一軒もありませんよ、をぢさん。』
『ほほう、この赤道直下の暑い國で、扇子を賣つてゐる家がないのですか。』
『さうです。扇子なんかいくら使つたつて、ここでは、ちつとも役にたちません。なほ汗

が出て、なほ暑くなるばかりです。』

『では、涼しくする方法は、まづないわけですな。』

『はい。毎日の驟雨で、暑さを自然にはらつてくれますし、日が暮れれば、ひとりでに涼しくなるのを待つてゐるばかりです。』

『なーるほど。さうとは知らなかつた。これはどうもありがたう。では、君もしつかりがんばつて、お父さんにもよろしく傳へて下さい。』

『はい、をぢさんも氣をつけて、日本へお歸りなさい。』

『ありがたう。さよなら、さよなら。』

『さよなら。をぢさん、さよなら。』

ふたたび勢ひを增して遠ざかる車から、おたがひに手を振つて別れて行く指先に、さつと一陣の冷い風が渡つたかと見るまに、ぴたり、ぴたりと、夜の驟雨がおそつて來たのでありました。

『レイ、雨だよ。』
と、正夫が仰ぐ空に、にはかに月を閉ざした黒雲が、頭上に渦をまいてせまつてゐるのでした。
ぴたり……ぴたり……ぴたり……
丸いガラス玉をたたきつけるやうな雨粒が、二人の肩やアスファルトの路に、もう音をたててつのつて來ました。
『レイ、下りよう。』
『よし。』
正夫は、車夫の手に十錢玉を渡すと、かたはらの人道に逃げこんだのでした。
シンガポールの町の人道は、車道よりも五十センチほど高くなつてゐて、家々の二階の下に遠くつづいてゐます。ちやうど、二階が日よけのやうに人道の上まで乗り出して、下から柱で支へてあるので、燒けつく太陽も、いきなりおそふ驟雨も、この人道にさけなが

から柱で支へてあるので、焼けつく太陽も、いきなりおそふ驟雨も、この人道にさけながら歩けるやうに建築されてゐるのであります。

大つぶの雨は、たちまち、夜の路上に銀の花を咲かせるやうなしぶきをあげて落ちて來ました。

ダンス歸りのイギリス兵と濠洲兵が四五人、口紅のまつかな婦人を一人づつめいめいに連れて、手をくみながら、よせばよいのに雨の車道を、醉つた足どりと軍歌をうたひながら、向かふから歩いて來たかと見る間に、たちまち、ごうごうと落ちて來た物すごい驟雨に、白い軍服も、百合の花のやうな夜會服も、一瞬のうちに、その中へ閉ざされてしまひました。

レイが、何か大聲でいつたやうですが、天の底がぬけ落ちたやうな豪雨は、とても人の言葉などを傳へさせません。

正夫は耳をかたむけて、レイの口元へおしあてようとしたとき、紫ゑのぐを投げつけるやうな稲妻がぱつと眼の前にひろがると、ぐわら、ぐわら、ぐわらつと、耳をさくやうな

雷鳴がとどろいたのでありました。

4

シンガポールは、まことに驟雨の多い島で、日中は、人通りの絶えた炎天に、夜は滿天の星かげに、黒雲がいきなり亂れよるかと見るまに、たちまち天の一角がくづれおちるほどのすさまじさで、ガラス管ほどの雨が、地ひびきをたてて落ちかかつて來るのであります。

そのはげしさは、あらゆる物音をたたきつぶして、天地の間にがうがうととどろきわたりながら、縱横むじんに稻妻と雷鳴を投げつけて、赤道直下の氣象のすさまじさを示すのであります。

正夫とレイは、その豪雨のしぶきをあびたまま、しばらく、人道になつた軒下に、小さくしやがんでゐましたが、やがて驟雨は、夜目にも白くかがやきながら、波止場の方へ銀

くしやがんでゐましたが、やがて驟雨は、夜目にも白くかがやきながら、波止場の方へ銀板をひくやうに去つて行くと、再びこうこうとした、月夜の街になつたのであります。

『レイ、やつと晴れたよ。』

『すごかつたなあ。やむのを待つてゐるうちに、僕、ねむくなつてしまつたよ。』

『僕もだ。おそいので、家の人たち、心配してゐるぞ。』

『ほんとだ、早く歸らう。』

『走らう。』

空は、すつかりと豪雨に洗はれて、すみきはまつた大氣のなかに、南國の月光が眞晝のやうに滿ちあふれてをります。

二人は手をつないで、人道を十メートルも走つたかと思ふとき、いきなり、何かにけつまづいて、恐ろしいほどの勢ひで前のめりになつたまま、胸と手足を打ちつけて倒れたのでした。

しゆんかん、正夫もレイも、あまりの痛さに聲も出せないで顔をしかめたとき、二人の

耳元へ、太いどなり聲がたたきつけられたのでありました。
『誰だっ、けとばす奴は。氣をつけろ。』
びつくりしてはね起きると、うす暗い軒下の人道には、家を持たない支那人苦力（クリー）たちが夜露（よつゆ）をさけて、そこに四五人、ここにひとかたまりとなつて、はだかのまま、路上に寝ころがつてゐるのでありました。しかも、その中の大男が一人、汗くさい半身を持ちあげて脛（すね）をさすりながら、白い眼をむいてにらんでゐるのでした。
『逃げろ。』
とつぜん、レイが叫んだ聲に正夫も驚いて、車道にとびおりるが早いか、二人は月光の照りかへすアスフワルトの路を、まつしぐらに走つたのであります。
走りながら、正夫は、右腕に何かなまぬるいものを感じたので、街角の電燈の光にすかして見ると、ひぢの皮はすりむけて、ぬらぬらと指先にまで、血が流れてゐるのでありました。

した。

『ああ驚いた。レイ、僕こんなになつちやつたよ。君は大丈夫かい。』

『あつ、血がたれてゐる。君、痛いだらう。』

『少し痛いよ。』

『僕はひざをぶつけたので痛いよ。あれえ、やつぱり血が出てゐる。』

『人道のあんな暗いところに寝てゐるんだもの、誰だつて踏みつけてしまふよ。』

『さうだとも、あぶないぢやないか。』

『家でみんなが心配するといけないから、血をふいてから歸らうよ。』

『ああ、さうしよう。』

二人は、車道から一段高くなつた人道に腰をかけて、ひりひりと痛むところをハンケチでふいてゐますと、何かひそひそとささやき合ふ人の聲をうしろに聞いたので、正夫とレイは、一樣に振りかへつたのであります。

そこは、ちやうど、大きな食料品店の軒下になつてゐて、すでに扉をおろした暗い店先

に、やはり四五人の苦力が寝ころんだまま、やせた唇に、短いタバコをくはへながら、話し合つてゐるのでありました。

二人は、聞くともなく、耳をすませたのであります。

『とにかく、攻めて來るか、來ないかが問題だよ。』

『たとへ攻めて來たところで、絶對にシンガポールは、陷落するものぢやないよ。』

『いや、さうとはいへない。何しろ日本軍の強さは世界一といふうはさもあるし、それに神わざに近いからな。』

『いかに神わざであらうが、強からうが、全島ことごとく今は要塞化したこの島を、おとすといふことは、とても出來るわざではない。』

『いや出來る。日本軍には、誰もかなはない。』

『君は、何も知らないからそんな無暴なことをいふのだらうが、この島に、現在ある要塞の數を、いつたい知つてゐるのか。』

『いや、そんなことは知らない。要塞の數なんていふことは、日本軍にとつては問題ぢやないのだ。攻めればとる、必ずとる。死ぬまでとる。死か、とるかといふことが日本軍隊の精神なんだ。こんなシンガポールぐらゐを攻めおとすことは、わづか十日もあればたくさんだと思ふ。』

『何も、君は、橫濱にこの間まで暮らしてゐたからといつて、さう日本の肩を持つには及ぶまい。今のシンガポールは、君がゐた五六年前のシンガポールとは、天地の差が出來てゐるのだ。あらゆる要塞には、遠距離砲が物すごい砲口をそろへて、海上をにらみつけてゐるし、無數の高射砲はことごとく空に向けられてゐるのだ。しかもその上、この間は、香港用の火砲をこつそりとここにうつして、とりつけたことを知つてゐまい。』

『なかなかくはしいが、いつたいそんな話を、どこから聞いて來たのだ。』

『聞いて來たのではない。その大砲をとりつけたり、要塞を築いたり、トーチカをつくるために、二年間も私はこき使はれて來たのだ。』

『どうりでよく知つてゐると思つた。では全部軍事仕事だつたのかね。』

『さうさ。もうこの土地は、昔の貿易港ではないぜ、世界第一の軍港だよ。東洋のジブラルタルだといつて、イギリスの兵隊が盛んにいばつてゐるが、その重砲陣は、難攻不落のパナマ防禦線にも負けないといふ世界的な評判にもなつてゐるんだ。それに、海岸一帶の椰子樹だつて、すつかり伐りはらつてしまつたし、じやまになる土人家屋はたたきこはすし、どこから敵兵が上陸しても、トーチカからは見とほしがきく備へだけは、もう充分に出來上つてゐるんだ。そのほか、まだまだ私は飛行場の仕事だつてして來たんだぞ。どうだ驚いたらう。』

『ほう、すつかり軍事專門家になつてしまつたな。』

正夫は、いつの間にか耳をそば立ててゐて、ふとレイを見ると、レイも先刻まで細くしてゐた睡い眼を今はしつかりと見開いて、耳をかたむけてゐるのでありました。

『では、飛行機の數は、相當あるのかね。』

『では、飛行機の數は、相當あるのかね。』

『あるとも、うんとある。爆擊機が一番多いらしいが、まづ三百機はくだるまい。』

『ほほう。』

『それに、兵隊の數がまた大變だ。イギリス兵はもちろんだが、そのほかに、インド兵、アフリカ兵、それから、支那から引きあげて來た駐屯兵、汽船で應援に來た濠洲兵、そのほか、世界のイギリス領地から駈けつけた色とりどりの服裝をした兵隊が、飛行場にも、要塞にも、密林地帶にも、うようよしてゐるんだ。』

『さういへば、街にも兵隊だらけだが、これで、どのくらゐ來てゐるものだらうな。』

『實は、この場だけのないしよ話だが、こんな小さな島に、各地から集つた兵隊だけでも三萬五千人だとよ。』

『三萬五千人。ほほう、それで海軍の方は、どうなつてゐるんだい。』

『さあ、海の方の仕事はいつからにしなかつたが、誰か軍港の仕事をした者はゐないかい。』

『セレター軍港の仕事か。あれには全く恐ろしかつたよ。』

と、とつぜん、かはつた聲がふえたのでありました。
『おや、ぢいさん、おまへ港の仕事をしたのか。』
『さうだよ。ずゐぶん仲間も死んだよ。』
『どうして。』
『第一、仕事がむづかしいや。世界第二の乾船渠もつくつたし、二千二百フイートもある大埠頭の仕事もしたし、それにまた、アメリカから技師や土人が三千人もその仕事に入りこんで來ていばり散らすので、土地のわれわれと始終けんくわが絶えなかつた。』
『さういへば、昨夜も濠洲兵とインド兵が、そこの四つ角で劍を拔きあつたが、どうもこの頃、みんな血走つてゐて　物騷な世の中になつたものだな。』
『しかし、いつ見ても氣持ちがいいのは、まづ軍艦だね。』
『たくさんゐるか。』
『ゐるとも。ドイツと戰ひに本國へあわてて歸つたのもあるが、とにかく、巡洋艦が二隻

『ゐるとも、ドイツと戰ひに本國へあわてて歸つたのもあるが、とにかく、巡洋艦が二隻驅逐艦が六隻、そのほか海防艦、小艦艇などあはせて四十餘隻がずらりつとひそんでゐるぜ。全くここも、たいした軍港になつたものだ。』

『空、陸、海と、シンガポールの護りは固いや。どれ、安心して睡るとしようか。』

正夫は、引きあげどきだと思つたので、腰をあげてレイに呼びかけたのであります。

『レイ、足の痛み、なほつたかい。』

『ああなほつた。君は。』

『なほつた。さあ行かう。』

『よし、歸らう。』

5

レイと別れて、正夫は家の前までもどつて來ると、病院の白い門はすでに閉ざされて、椰子の大葉が、がさがさと夜更けの音をたてて、頭上にゆれてゐるばかりでありました。

『ただいま――。』

と、門をたたくと、門番のインド人が、籐(とう)の寢椅子(ねいす)をぎしぎしと鳴らして立ちあがるらしく、内側から聲がきこえて來たのであります。

『坊ちやんか。』

『はい、おそくなりました。』

『どうしたことかと、心配してゐましたよ。』

ギーイッと門が開かれると、頭に白布(ターバン)を巻きつけた、白い頬(ほほ)ひげをりつぱにたらした、たくましいはだかの番人がにこにこしながら、相變らず右手にしつかりと、金太郎が持つやうなまさかりを握(にぎ)つてあらはれたのであります。

『お父さんも、お母さんも、お待ちかねですよ。』

『どうもおそくなつてすみませんでした。おやすみなさい。』

『はい、おやすみ。』

『はい、おやすみ。』

　正夫の家の門番は、どこから來るのか正夫は知りませんでしたが、灯(ひ)ともし時になるとぴかぴかと光るまさかりをかかへて姿をあらはすと、露臺(ベランダ)の下に籐椅子をおいて、そこで夜どほし月を眺めたり、ときどき家の周圍を、えへん、えへん、とせき拂(ばら)ひをさせながらまさかりをかついで歩きまはつてゐるのであります。そして、すつかり太陽がのぼりきると、小さな金盥(かなだらひ)で顏を洗つて、またどこともなく歸つてしまふ體格のよい夜警の老人でありました。

　夜警の門番のことについては、こんなこともありました。

　それは或夜のこと、父につれられて、町からはなれた丘にある三菱(みつびし)會社の社宅へ、とまりがけで月見の宴(えん)に行つたときのことであります。

　眞夜中に、ふと眼をさました正夫は、どこからか勇壯な、そして美しい唄聲がきこえて來るので、開けつぱなしにした二階の窓から下をのぞくと、風もない滿月の庭園(ていえん)で、詩を吟(ぎん)じながら、社宅の門番が腰の山刀を引きぬいて、ただ一人、深夜の影法師(かげぼふし)を黑々とひら

めかして、劍の舞ひをしてゐたのでありました。

このやうに、シンガポールの大きな家には、まさかりをかついだり、山刀をにぎつたりして、インド人の門番が、寢ずにたいがい一人づつゐるのであります。

正夫は、そんなことを思ひ出しながら、玄關の石段をあがらうとすると、あかあかと、ともつた二階の重病患者室から、靜かな夜氣をふるはして、日本語の唱歌が、かすかにもれて來たのでありました。

夕空晴れて　秋風ふき
月かげ落ちて　鈴蟲鳴く
思へば遠し　故郷の空
ああわが父母　いかにおはす——

その聲は力なく、今にも息のねが絶えさうな、まるで細い絲でも引くやうに聞えて來た

その聲は力なく、今にも息のねが絶えさうな、まるで細い絲でも引くやうに聞えて來たのでありました。

正夫は、はて、誰だらうと不審に思ひながら、ちよつと立ちどまつて二階を仰ぐと、それを見た門番は、

『助かるまいのう。』

と、つぶやくのでありました。

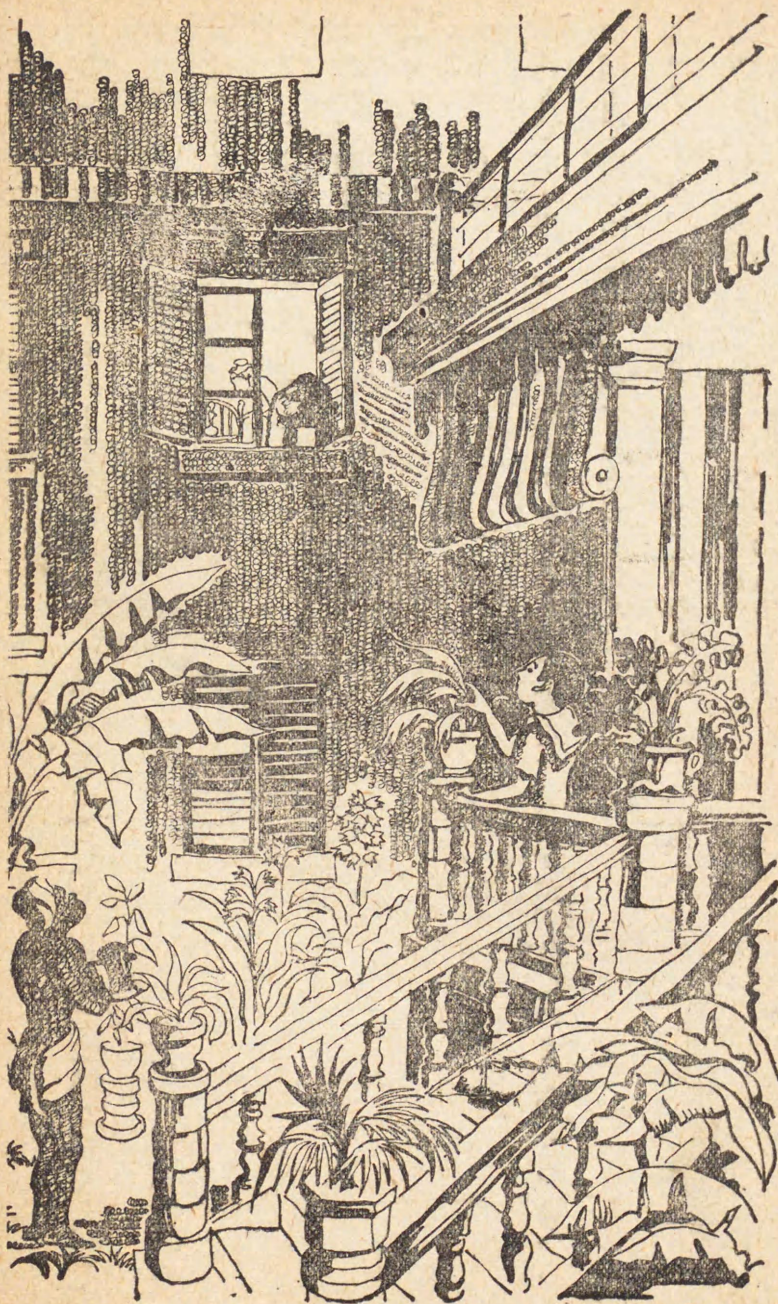
『あれ、誰なの。』

『マライ人ですよ。』

『マライ人。』

『さうです。腸チブスで、先刻かかへ込まれて來たマライ女が、危篤のまま、さつきから何回もでたらめな歌を唄つてゐるのですよ。』

『マライ女が、日本の唱歌をうたつてゐるの。』

『坊ちやん、あれは日本語なんですか。』

『ああ、國民學校で教はる、日本の唱歌なんだよ。』

『どうりで、私にはわけのわからない歌だと思つたが、なんでまた、マライ女があんな歌をうたつてゐるのだらう。』

『いくつぐらゐの人。』

『もう、四十を越してゐるでせう。十二三歳の、足の惡いマライの子供が付添ひに來てゐますよ。可哀さうに。』

正夫は、ふと何か、胸をつかれる思ひがして、あわてて家の中へ入つたのでありました。

部屋では、母が蚊取線香をたいて、正夫の服のほころびをなほしてをられました。

『お母さん、ただいま。遲くなりました。』

と、正夫が兩手をつくと、母はむづかしい顏を、はつとほころばせて、
『おゝ、心配してゐましたよ。ひどい雨で、どうしたことかと思つてゐました。』
と、胸をなでおろすやうな聲でおつしやつたのであります。
『すみませんでした。すつかり降りこめられて、なかなか歸れませんでした。』
『さあさあ、遲いから早くおやすみなさい。でも、演說會はどうでした。』
『會場に羽蟻(はあり)が一ぱいとび出して來て、中止になりました。』
『おやおや、せつかく聞きに行つたのに殘念な。では、さあさあ、おやすみなさい。』
『はい。』
庭園からは、蟲の音が降るやうにきこえて、そのひびきの中へかすかな唄聲がきこえて來るのであります。
『お母さん、マライの女の人が、日本語で唱歌をうたつてゐるの。』
『いいえ、あの方は、日本人ですよ。』

『いいえ、あの方は、日本人ですよ。』

『マライ人の漁師のお嫁さんになつてから、もう二十餘年になるさうです。日本語は、すつかり忘れてしまつたけれど、あの「ふるさと」の唱歌だけは未だに忘れないらしく、生死の境にうたつてゐるのです。』

『かはいさうですね。』

『お氣の毒に――。さぞ生れ故郷がこひしいことでせう。いま、お父さんや看護婦たちで日本の方へ頭を向けてやつたところです。』

話なかばに歌はとだえて、看護婦たちのすすり泣く聲が、階上からもれて來たのでありました。

それを聞くと、正夫の母も、ゆかたの袖口を眼にあてると、靜かに、合掌したのでありました。

6

シンガポールの町を、東へぬけた海岸に、タンジョン・カトンといふ所があります。

ここは月の名所で、火焔をまき散らしたやうな熱帯の夕焼雲が、海のうねりに照りかへして、海が燃えあがるやうに見えると、やがて、その眞紅の色も消えうせて、椰子の木かげの沖とほく、靜々とのぼる滿月の美しさは、まづシンガポール第一の風景と賞されてをります。

このタンジョン・カトン一帯は、海上から二メートル餘もつき出したやぐらを組んで、その上に椰子の葉葺きの家を建てたマライ人の漁夫の住居が多く、なかにも、モロ族といつて、投網に秀でた、南洋第一の漁業民族もたくさん住んでゐるのであります。

この人たちは、いづれも近海で、アジ、サバ、イワシなどをとつて生活をしてをりますが、日本から、糸滿人といふ、追込網をたくみに使ふ漁夫が乘りこんで來てからは、糸滿

が、日本から、糸満人といふ、追込網をたくみに使ふ漁夫が乗りこんで來てからは、糸満人に、非常なおそれを抱くやうになつたのであります。

糸満人といふのは、沖繩縣の那覇市の南方、約十二キロの所にある糸満町にうまれた人たちのことで、この町の人たちは、遠くマライ半島、スマトラ、ジヤワ、ボルネオといつた、南洋一帶の大海原に多く乗り出して、はだか一貫、さつと海中にもぐり込んでは、さんご礁のかげにかくれてゐる一匹の魚さへも逃がさず、追込網に追立てて、一網で、小舟一ぱいにあまる漁をしてしまふといふ、特別な技術を持つた、勇敢な人たちのことであります。

ある朝、マライ漁夫のアワンは、いつものやうに漁に行く仕度を、濱の小舟の中でしてゐますと、ふいに、朝の驟雨がおそつて來たのであります。

アワンは、大いそぎで、着てゐる白シヤツをよごすまいと、頭から、すつぽりぬいで、木箱の中におし込むと、箱をさかさまにして、その上に、はだかのまま、腕をくんで腰をかけてをりました。

雨は、見る見るうちに、大雷雨となつて、稻妻が、アワンの黑いからだを青く染めかへして、全身を、瀧壺の中へ、さらすやうに降りかかつて來たのでした。

アワンは、身をちぢめてその寒さのなかに、がくがくとふるへてゐました。すると、

『おーい、みんなこーい。みんなこーい。』

『驟雨だ、驟雨だあー。』

と、わいわいと聲をあげて、近所のマライ漁夫の子供や、モロ族の子供たちが、家の中から追はれて、どれもこれも、はだかで濱へ飛び出して來たのであります。

南洋の漁夫の子供たちは、海上で、いつ、どんな場合に大雷雨に出あつても、びくともしない魂を育てあげるために、物すごい雷雨のたびごとに、兩親が、子供をまつぱだかにして外へ追ひやる習慣になつてゐるのであります。子供たちは、やがて、濱に打ちあげられた海草を、手に手にふりまはすと、ときの聲をあげながら左右に分かれて、稻妻の中で激しく打ちあふ、こんぶ合戰をはじめたのでありました。

激しく打ちあふ　こんぶ合戰をはじめたのでありました。

アワンは、その聲の中に、ひときは元氣のよい、自分の子供の聲をふときいて、なほも驟雨に打たれてをりますと、一人の子供が、こんぶを頭からかぶつて、雨をさけながら、飛んで來たのでありました。

『をぢさん。』

『おお。』

『お父さんが、御用があるから來てくださいつて。』

『さうか。お父さんは、まだ漁に出かけなかつたのかね。』

『ええ、今日から、もう漁夫をやめるのですつて。ほかのをぢさんたちも、たくさん家に集つてゐます。』

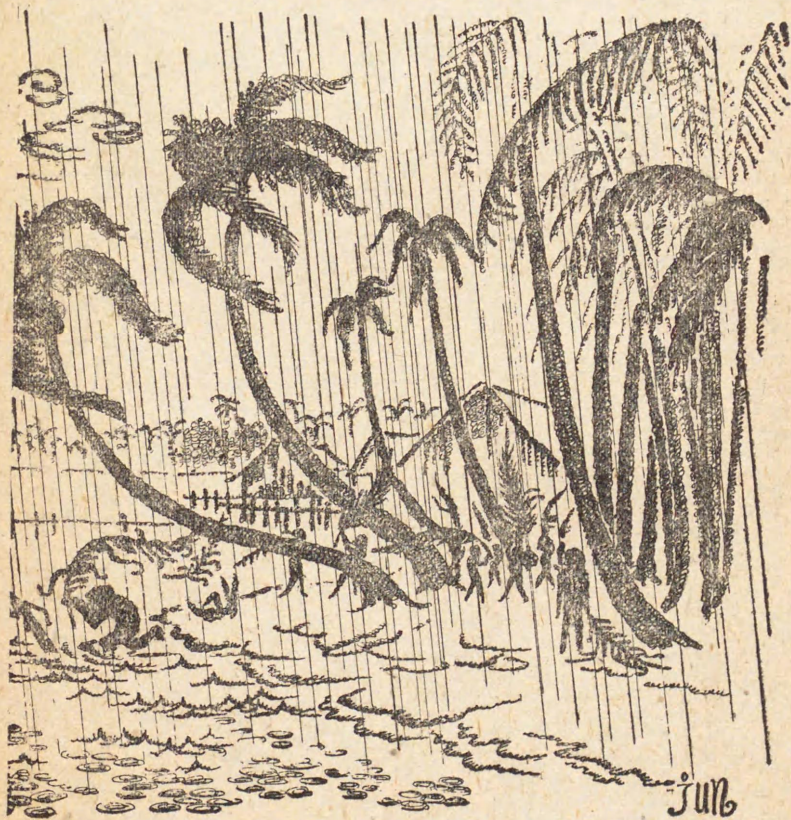
『はて、それは、どうしたといふわけだね。』

『魚がとれないから、やめるんだつて。をぢさんにも御相談があるから、すぐに來て下さいつて。』

『よしよし。今おてんとう様が出たら、すぐに行くといつておくれ。』

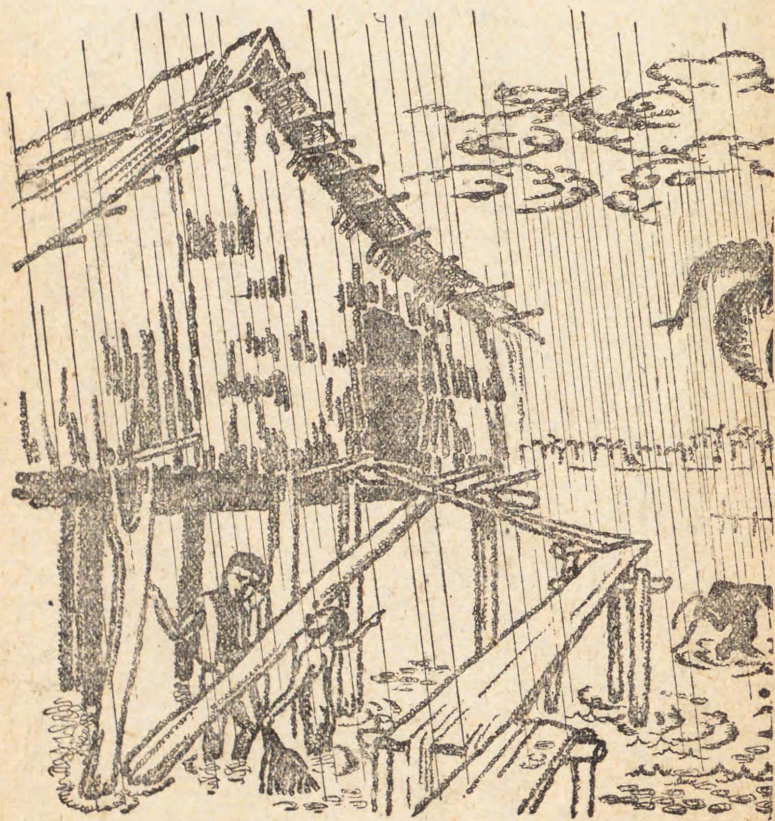
『はい。』

と、駈け去る子供は、はだかの全身にしぶきをあげて、たちまち、雨のなかへすひとられてしまつたのでありました。

やがて、十分ほどもたつと、再び、かつと照り出す陽ざしをあびて、アワンは

陽ざしをあびて、アワンは

頭からずぶぬれになつた身體をふいて、シヤツを着ると、今の驟雨で冷めたくなつた砂濱を、足のうらに心よく感じながら、すたすたと歩きはじめたのであります。

7

アワンの家から、二〇〇メートルほど離れた所に、ムダーといふ漁夫の家があ

りました。

アワンが、ムダーの家に來てみますと、朝から、何か心配事のあるらしい漁夫の顔が、二十人ほど集つて、車座になつてゐるのでした。

アワンは、何か、めんだうな事件がまき起つたなと感づきながら、足のうらの砂をはたいて、「皆さん、おはやう」と、仲間に加はつたのであります。

ムダーが、腕ぐみをほどいて、アワンの方へ向きました。

『アワン。君は、昨夜、夜釣りに行つて留守だつたので、今日の寄合ひのことをまだ話さなかつたが、實は、日本人の漁夫たちを、いつたい、どう思ふかね。』

『糸滿人のことかね。』

『さうだ。』

『シンガポールの魚は、いや、南洋ことごとくの魚は、今に一匹ものこらず、彼等に、根こそぎとりつくされてしまふことだらうよ。』

『さうだ、そのとほりだ。誰もが、それを心配してゐるので、今日ここに集つてもらつたわけだが、なんとか、よい工夫はないだらうか。もし、うまい考へでもあつたなら、われわれマライ漁夫全體のために、それを敎へてもらひたいものだが。』

『さあ、どうしたらよいものか、私にも分らない。』

『タイ國では、シャム灣の魚を、糸滿人にとりつくされるのを恐れて、とうとう追込網の使用を禁止する法律を出したさうだが、なるほど、もつともなことだと思ふが、どうだね皆さん。』

『ああ、もつともだとも。』

『もつともなことだよ。』

『この島でも、そんな規則を一つ作つてくれたら、みんなが助かるがのう。』

『そんなことをしたら最後、シンガポールを初め、南洋の住民たちは、魚を口にすることが出來なくなつてしまふではないか。われわれがとつてくるわづかな魚と、糸滿人が沖か

ら運んでくる數量とは、天地ほどのちがひがあるからなあ。』

『それなら、いつそのこと、追込網の方法を、われわれが敎へてもらつたら、どうだね。』

『だめだめ。それは、とてもだめだ。あのむづかしい方法を習つたところで、誰に、糸滿人のまねが出來るものかね。』

『いつたい、どんな方法でやつてゐるのだね。』

『まづ、ここから一〇〇浬以內の魚をとりつくした糸滿人たちは、先月まで、二〇〇浬ぐらゐの所で漁をしてゐたが、そこの海底までもとりつくしたとみえて、今では、三〇〇浬も先きの、さんご礁や、無人島の磯々の魚を狩りたててゐる。何しろ、魚が殖える數よりも、とる方がはげしいのだから、たまつたものではない。全く、おそろしいのは日本の漁夫たちだ。

その方法をしらべると、まづ二十五人か三十人が一隊となつて、半圓をゑがきながら、水中にもぐつたまま進むのだ。一人一人の間は、約二〇メートルぐらゐ離れてゐるだらう。

手には、おのおの、竹の先に、椰子の葉の、黄白色になつた新芽を扇子形にむすびつけたのを持つて、それを、海中で、突いたり、引いたりするものだから、自然に、それが、つぼんだり、開いたりするのだ。それを、ひらひらとさせて魚を追ひまくるものだから、魚は驚いて逃げまはる。また、なかには、さんご礁の間へ、かくれこむ奴もある。しかしながら、御存知のとほり、南洋の海はどこへ行つても、底まで見すかせるほどの美しさだ。逃げる魚もかくれた魚も、一尾も殘らず、たちまち狩り立てられて、潮に乘つておされて行く。すると潮下には、しつかりと追込網が張られてゐるのだ。糸滿人たちは、一〇〇〇メートルも先から、その網口へ、網口へと、隊をととのへたまま追込んでくるので、網の入口には數萬の魚が、ざあざあと身をずりよせて、ごつたがへしてゐる。しかも、そこへ近づくに從つて、半圓形の陣立てはますますかためられて、刻々にせばめられてくるので今はもう、大小色さまざまな魚は、われがちに入口から網の中へ飛びこんで行くといつたしまつなのだ。』

『なーるほど。』

『すばらしい腕前だ。』

人々は感心のあまり、うなり聲をたてたのでありました。そして、しばらくの後に、皆はうなだれて、自分たちのこれからの生活や、今までの貧しい暮しなどをあらためて見つめたのであります。

ことにムダーは、部屋の一隅に病み細つて、高熱のまま寝てゐる妻のハルコの、抜けおちたうしろ髪をながめながら、苦しさうなその息づかひを聞いてゐるうちに、日本人を妻とした、マライ人の責任といふものを、しみじみと感じて來たのでありました。

この日本婦人が、もしも日本漁夫の妻になつてゐたなら、その夫は、糸満人と同じやうに、海を堂々と征服したたくましい働きぶりで、この妻をよろこばせてゐたに相違ないのだ。ただ自分のやうなマライ人の家に來たばかりに、マライ人の髪を結ひ、マライ人の食物をたべ、ジヤワさらさを腰にまいたマライ人の服装をして、しかも貧しい生活になんの

物をたべ、ジヤワさらさを腰にまいたマライ人の服装をして、しかも貧しい生活になんの不平も不服もいはずに、マライ人の社會の一員になりすまして、朝に夕に、誠意をつくして仕へてくれたその上に、今は醫者へかける費用もなく、床の上にころがすやうにおいてあることが、たまらなくムダーの胸を打つて來たのでありました。

『ムダー、何を泣いてゐるのだ。』

アワンが、驚いた聲でたづねたのであります。

ムダーは、頬ひげのところでとまつてゐる幾すぢかの涙を、拳でこすりあげながらいつたのでした。

『みんな、きいてくれ。私は、今日かぎり、漁夫をやめることにする。』

なぜだ、なぜだと、人々はつめよつたのであります。

『やめて、どうする氣なのだ。』

『あしたから、鰐の皮をとりに行く。』

『ばかな事をいふな。お前の親戚チヤンタンは、鰐の皮をとりに行つて、虎に喰はれてし

まつたぢやないか。お前の友人ヱツトレスは、鰐の皮をとりに出かけたまま、三年たつても、未だにマライ半島からもどつて來ないではないか。しかも、この重病人と、足の惡い小さな息子とを殘して、お前は鰐の皮をとりに行つて、死なうとでもいふのか、ムダー、氣でも狂つたか。馬鹿者めがつ。』

『いいや正氣だ。これは、この間から、考へに考へ拔いていふことなんだ。私は、日本婦人を妻にしてゐる。しかし、その妻は、仰せのとほりこの重態だ。私は、二十餘年といふ長い間、これと暮して來たが、その間に、ただの一度も、日本人に負けないほどの働きぶりを、この婦人に見せたことがあるだらうか。ない、ない、夢にさへもないのだ。見せたものは、二人の子を失つた悲しみと、生活の苦しみばかりだつた。それを思ふと、私は今のうちに、どうしても、日本人を妻にした夫の立場から、りつぱな働きを妻に一ぺん見せておかなければ、申しわけがないのだ。妻もまた、さうしてもらはなければ、日本人としての立場がなくなるのではないかと思ふからだ。どうぞお願ひだ。私に新しい商賣をさせ

ての立場がなくなるのではないかと思ふからだ。どうぞお願ひだ。私に新しい商賣をさせてくれ。家を救はせてくれ。妻を救はせてくれ。』

ムダーは、自分の決心を、呼び集めた仲間に示すと、その翌日、皆がとめるのもきかずに、つひに一切の漁具を賣拂つて、日本人が經營する町の同仁病院へ妻を入院させました。そして子供をその付添ひにおいたまま、新しく求めた獵銃をにぎりしめて、一皮五圓か十圓に賣れるといふ鰐の皮を頭にゑがいて、マライ半島行の汽車にゆられて、密林の奥深く旅立つたのでありました。

その夜、ムダーの妻は、祖國日本の言葉で「ふるさと」の唱歌をうたひながら死んで行つたのであります。

8

さわやかな朝の風は、庭園に茂つたバナナの葉や、椰子の葉を、かさかさと輕く鳴らしてゐました。

て、パンとミルクの、朝の食事をとつてゐたのでした。
正夫は、その下で、夜露にぬれたねむり草を素足でいぢりながら、籐椅子によりかかつ

調理室の方からは、看護婦が洗ふらしい食器の音や、水の流れが靜かにきこえて、ベランダの下では、夜番のインド人が、相變らず小さな金盥を持ち出して、顏を洗ひ終へると疲れをなほすらしく、四五回、天に向かつて兩手をのばしたり、ちぢめたりして、程なく『坊ちゃん、さよなら。』といつて、歸つて行つたのであります。

正夫は、ふと、重病患者室を見あげると、開かれたその窓に、マライ人の少年が、一晩ぢゆう泣きはらした眼で、正夫を、じつと見つめてゐるのでありました。

正夫は、無言のまま、手をあげて、母を亡くした少年を招いてみました。

やがて、正夫と同じ年頃の、右足のすこし惡いびつこの少年が、庭へおりて來たのでした。

『さあ、ここへ掛けたまへ。君、ごはんはすんだ。』

『さあ、ここへ掛けたまへ。君、ごはんはすんだ。』

『まだです。』

『このパン、よかつたら、いつしよにたべないか。』

『ありがたう。』

『昨夜、お母さんが亡くなられたのですつてね。』

『ああ。とても、とても、いいお母さんだつたのに――。』

『お父さんは、どうしたの。まだ來られないの。』

『昨日、マライ半島へ、鰐の皮をとりに行つてしまつたのです。いつ歸つてくるかわかりません。』

『君、一人ぼつちかい。』

『ああ、もう一人ぼつちだ。でも、僕には、君と同じやうに、日本人の血が、お母さんから流れてゐるから、しつかり働くかくごです。足は、汽船の推進機ではねられたけれど、も一度海へ出て、今度は、あの波止場の、海底へもぐつて見るつもりです。』

『波止場の海底で、何をするの。』

『シンガポール港の海底には、まだ誰も手をつけたことがない一錢銅貨の大きな山が、きつと出來てゐるにちがひないのです。僕はあれをとります。』

少年は、さういつて眼をかがやかせたのであります。

そのふしぎな言葉に、正夫は籐椅子から半身を乘り出して、たづねたのでした。

『君、どうして海の底に、そんな山が出來てゐるのですか。』

『僕は汽船にはねられるまで、波止場でオラン・ラウをして働いてゐたのです。ですから港の海底に一錢銅貨の山が出來てゐることを、よく知つてゐるのです。』

オランといふのは、マライ語で人といふことであります。ラウといふのは、海といふことであります。ですから、オラン・ラウといふのは、海の人といふことになります。

この海の人といふのは、日本にはありませんが、出船入船のあわただしいシンガポールの波止場では、盛んに活躍してゐる商賣なのであります。

の波止場では、盛んに活躍してゐる商賣なのであります。

正夫は、ふと、今から五年ほど前に、はじめて見たオラン・ラウのことを思ひ出したのであります。

それは、父母にともなはれて横濱の港から、はるばるとこのシンガポール島へ汽船が入港した日の、よく晴れた朝のことでありました。

汽船がまだ波止場へつくかつかないうちに、大ぜいのはだかのマライ人たちが、それぞれ獨木舟をあやつりながら、どこからともなく汽船により集つて來たかと見るまに、數十艘の獨木舟はたちまち東西に分れて、一〇メートルほどの距離で向かひ合ふと、短い櫂をふりあげて、ゴムまりの打ち合ひをはじめたのでありました。

その有樣は、日本のお正月に、少女たちが、羽子板で羽根を送り合ふのにも似てゐて、その巧みさは、誰一人としてゴムまりを海中に打ちそんじる者もなく、南の國の碧い海上に半圓をゑがいて、くつきりと舟と舟との間を往復する數十の白いまりは、小さな鷗が幾回も飛びかふやうに美しく、正夫はもちろん、甲板のてすりから見おろしてゐた數百の船

客たちは、思はず小舟へ向かつて拍手（はくしゆ）を送つたのでありました。

やがてそれが終ると、獨木舟（くりぶね）は八方へ入り亂れて、甲板の人々に手をふりながら、

『十錢。』

『十錢。』

と、あらゆる國々の言葉で叫びつづけたのであります。なかには日本語で叫ぶ少年もをります。或は支那語で叫ぶ青年たちもをります。また太いマライ語で叫ぶ老人の群れや、英語、ドイツ語、フランス語で叫ぶオランダ・ラウもゐるのでした。

『お父さん、なんのことでせう。』

と、正夫はかたはらの父にたづねますと、折よく、こつこつと靴音も輕く通りかかつた船長さんが、にこにことしていつたのであります。

『十錢玉を一つ、海の中へ投げてごらんなさい。なかなかあざやかな腕前を見せてくれますよ。』

すよ。』

『さうですか。』

と、父は一週間ほど前にホンコンへ上陸したとき、日本の貨幣と兩換した支那の十錢銀貨を蟇口から一つ出すと、それを、寶石をとかしたやうな、南の國の碧い海に向かつて投げたのでした。

銀貨はひらひらと海面へ落ちると、やがて左右にゆれながら、ゆらゆらと海中へ沈んで行くのであります。

それを見た、近くの獨木舟にしやがんでゐた六十歲ぐらゐのマライ人が、火のついた手製の葉卷タバコをくわへたまま、いきなり海中へさかさまに躍りこむがはやいか、さつと右手をつき出して水中で銀貨を受けとめると、ぽつかりと浮きあがつて、口の中にかくした火のついた葉卷タバコを舌の先でまたおし出しながら、すぱりすぱりと煙をはいて、今つかんだ銀貨を得意さうにさしあげて、正夫たちにふつて見せたのでありました。

そのあざやかな技術に、甲板に居ならんだ船客の各國人の手から、たちまち　銀貨が雨

のやうに海中へ投げつけられたのでした。

はだかのマライ人たちは、喜びの聲をあげて舟底をけつて飛びこむと、一つ殘さず、銀貨を黑い腕に高々とさしあげて、みな潮の中からあらはれてくるのでありました。

つづいて甲板のそこここから、一錢銅貨も無數に投げられたのでありましたが、マライ人たちは、これらの銅貨にはいつさい眼もくれずに、ますます、十錢、十錢と呼び叫ぶものですから、銅貨はさびしく、赤道直下の靑い波の中にゆられながら、その底ふかく一つ二つと沈んで行くのでありました。

このマライ人たちのことを、シンガポールでは、オラン・ラウといつて、日本語になほせば、海の人と呼んでゐるのであります。

正夫は入港の日の思ひ出から、港の海底に一錢銅貨の山があるといふびつこの少年のいふわけが、大體わかつたやうに思はれたとき、少年はさらに瞳をかがやかせていふのでありました。

りました。

『オラン・ラウのまり打ちや、銀貨つかみを見たことがありますか。』

『あります。この港へついた日に、一度見ました。』

『それでは知つてゐるでせうが、私たちの仲間は誰も、銀貨ばかりを追つてゐて、一錢玉をけいべつしてつかまうとはしないのです。しかしシンガポール港は、アジヤとヨーロッパと南洋を結ぶ海の關門(くわんもん)です。南支那海から印度洋へ出る船も、印度洋から南支那海へ入る船も、或は、スマトラ、ジヤワ、ボルネオ、フイリツピン群島へ行く船も、みなここへ寄つて行くあわただしい港です。そのたびごとに、オラン・ラウへ投げられたまま沈んでしまふ一錢銅貨も、大變な數と金高にのぼるものですが、それに手をつけた者はまだ一人としてありません。ですから幾十年といふ長い間、海底に積もり積もつた一錢銅貨は、きつと大きな山を波止場の底に築いてゐるにちがひないのです。僕はそれをとります。それよりほかに、これからの自分を育てて行く方法がないのです。』

眉(まゆ)と眼をきりりつとせばめて、唇(くちびる)をぎゆつとかみしめた少年はさういつて、やや短い右

足に眼を落すと、靜かにひざのあたりをさすつてゐるのでありました。

正夫は、日本人とマライ人を兩親に持つた、今はひとりぼつちのこのびつこの少年に、何とかして、同胞としての力をかしてやりたいものであると考へたのでした。

『僕の名前は正夫といふのですが、君の名前はなんといふのですか。』

『僕はブラニイといひます。』

『ブラニイには、オラン・ラウの仕事はもう出來ないのですか。』

『とてもだめです。足を惡くしてからは、いくら全力をつくしても、たつた一枚の銀貨に飛びつくことも出來ません。皆ほかの連中にたちまちとられてしまふのです。』

『では、どんな方法で一錢玉をとりに行くのですか。』

『日が暮れてから、波止場にならぶ大小の汽船に灯がともつた頃、仲間が全部引きあげた時分を見はからつて、こつそりと一人で出かけます。』

『なぜ晝間の明るいうちに、皆にまじつてとらないのですか。』

『なぜ晝間の明るいうちに、皆にまじつてとらないのですか。』

『そんなことをしたら、オラン・ラウの恥さらしになります。甲板から投げられた銀貨が海中にゆらゆらと姿を見せながら沈んで行くところを、さつともぐつて、片手で受けとめる有樣を、水をすかして船客に見せるところが、私たちの値打なのです。それを僕一人だけが幾十尋もある海底に姿をかくしてから、浮かびあがるといふことは出來ません。そんなことをしたら、僕 人のために、あの特別な技術を見せてゐた今までの信用がなくなります。オラン・ラウ全體の評判が惡くなります。ですから、港に月がのぼつてから、ただ一人でこつそりと、人目をさけて行はなければならない仕事なのです。』

『ブラニイはその不自由な足をしてゐて、舟はこげるのですか。』

『大丈夫、こげます。』

『深い深い海の底の、銅貨の山に泳ぎつくことが出來るのですか。』

『泳ぎつく覺悟です。しかしはじめてやることですから、飛びこんでみなければ、どうなることかわかりません。』

『ご親切なあなたのお父さんが、夕方までに、僕の母を日本人墓地に葬つてくださるさうです。それをすましてから、この仕事に出かけます。』

『今夜からですか。』

『さうです、今夜から働きます。』

母を亡くして父と別れたびつこのブラニイが、月夜の海に一人のり出して、こつそりと海底深くもぐつて、手さぐりで銅貨の山を求める姿が眼にうかんだとき、正夫は、このまゝまだまつて見のがせない氣持に襲はれたのでありました。萬一ブラニイが短い足と長い足を根かぎりうごかしても底に達しなかつた場合には、その時こそ、自分が代つて飛びこんでみよう。自分は昨年おこなはれた全マライ少年水泳選手權大會には、シンガポール市長さんの手から、名譽ある二等賞の銀メダルを海岸で胸にかざられたではないか。その御禮として、今こそこの場合、かはいさうなブラニイの仕事を水泳で助けることは、自分がや

『いつ取りに行きます。』

として、今こそこの場合、かはいさうなブラニイの仕事を水泳で助けることは、自分がやらなければならない義務ではないだらうか。よし來た、もしもの場合には、全力をかたむけて岸壁の底にもぐりこんでみようと、正夫はかたく心にちかつたのでありました。

『ブラニイ、僕もいつしよに行つて、さしつかへないだらうか。』

その言葉に、ブラニイは驚いた眼を、しばらく正夫の顏に打ちつけてゐましたが、やがて首をたれていつたのであります。

『來られたら、ではお願ひします。僕は身體に細い綱をしばつて飛びこみますから、もしも附近の汽船が出帆するやうなことがあつたなら、獨木舟から綱をひつぱつて知らせて下さい。それから、舟が流れないやうに、じうぶん注意してゐてくれませんか。』

『よし、承知しました。』

このとき正夫の母の聲が、疊をしいた茶の間からきこえて來たのでありました。

『正夫、學校がおくれますよ。』

『はーい。』

と、正夫はいつたん籐椅子から飛びあがつて、ふたたびブラニイにたづねたのであります。

『どこで、幾時にあはうか。』

『夕方、君のお父さんのところへ、僕はお禮にあがります。その時に打合せをしませう。』

『では僕、學校へ行つて來ます。』

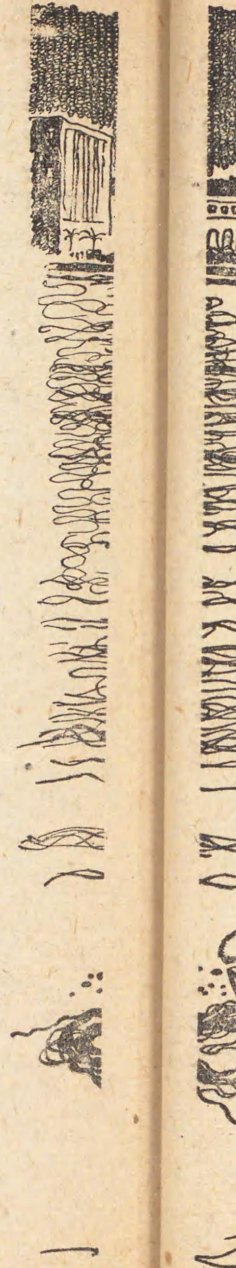
『行つていらつしやい。』

『失敬。』

正夫は二階の部屋へ鞄をとりに行く元氣な足どりで、階段をがたがたとかけあがつたのであります。

9

魚は海中に寄り集つて、沖にのぼりかけた月の美しさを眺めてをりました。

魚は海中に寄り集つて、沖にのぼりかけた月の美しさを眺めてをりました。
鳥は椰子林のねぐらにつばさをさめて、流星の多い夜空を語りあつてをりました。
ダンジョン・カトンの日暮れのことであります。

正夫は、つれて來た親友のインド人レイと、ブラニイの三人で、月光が青い晝間のやうに照りかへす椰子林の中から、獨木舟を引き出すと、三人を乘せた舟は、まもなく白銀の波をひるがへす海上へ、ひたひたと浮かび出したのであります。

ブラニイが、短い櫂を舳で風車のやうにふりまはして水をかくと、舟は靜かに走りはじめました。

レイが椰子林からかかへて來た一本の大きな椰子の葉を、舟のまんなかへ帆のやうにたてると、それにさらさらと風があたつて、舟は、はるかに防波堤が赤い灯、青い灯を見せたシンガポール港へ、波を分けて進んだのであります。

椰子林は次第に遠ざかつて、やがて繁華な建物と明るい飾窓をつらねた海岸町が、右手にあらはれました。

海をま向かひにしてずらりつとならんだ露店の灯をぬふ人の群れが、白く小さくながめられて、雑沓のひびきは波につたはつて、遠く舟にまでもきこえて來るのであります。

間もなく、三本煙突の白塗の巨大な汽船が横づけになつた波止場が近づいたのでした。

『あそこへつけよう。』

ブラニイはさういつて、舳をぐつとその方向にむけました。

『さあ、ここでいい。』

『ブラニイ、足の調子は大丈夫かい。』

『大丈夫だ、正夫。ただ底に達するまでどのくらゐの深さだか、見當がつかないだけだ。では、レイは舟が流されないやうに、この櫂でうまく潮に向かつてこいでゐて下さい。それから正夫は、この綱をしつかりにぎつて、萬一のことがあつたなら、急いで引きあげて下

さい。』
『よし。』
『よし。』
ばちやーん……と、いきなりブラニイは飛びこんだのであります。
するすると細いしゆろ縄（なは）が、海底へ、海底へと、正夫の手からのびて行くのでありました。
『レイ、舟を流されるな』
『流されない。正夫、綱（つな）をはなすな。』
『はなさない。』
二人がじつとのぞきこむ海の中には、ブラニイのあとを追つて、夜光蟲がむらさきのうづを巻きながら沈んで行くばかりです。
一分――二分――三分――

ぼつかりと、ブラニイは浮かびあがりました。

ぶるるんと、顔を一なですると

『だめだ、だめだ。深い、深い。』

と、舟にはひ上つて、がつかりとして正夫の前に腰をおろしたのであります。

『そんなに深いか。』

『深い、深い。それに足もだめだし、息もつづかなくなつてしまつた。』

ブラニイは短い右足をかかへて、しくしくと泣きはじめたのであります。

『よし、僕がやつてみよう。ブラニイ、うまく腰へ綱をしばりつけてくれたまへ。』

『ありがたう正夫。しかしあぶないからやめてくれ。あきらめて、もう歸らう。』

『レイ、とにかく僕にやらせてくれ。さあ解けないやうに、この腰へ、しつかりと綱をしばりつけてくれたまへ。』

も早さるまた一枚になつた正夫を眺めながら、水泳ぎをちつともしらないレイは、二人

の中へ口を出すことも出來ないので、ただ舟を流すまいと、夢中になつて櫂をあやつつてゐるばかりであります。

ばちやーん……と、正夫が船底を蹴つて飛びこみました。

燒けつく太陽が落ちた夜のシンガポールの海は、全身に冷く、水中からふと上をあふぐと、水面のあたりに、月光が青々ととけこんでゐるばかりであります。

正夫は下へ下へと、水を蹴り進んだのでありました。

息は次第に苦しくなつてきましたが、更に底へ底へと、手足に精根をつくしてもぐり込んだのであります。

しかし、波止場の底は思つたよりも非常に深く、もう一泳ぎ、もう一息と進みこむうちに、正夫はつひに呼吸が困難になつて、あわてて綱を引いて合圖をしました。しかしそのときには、すでに數回はげしく水をのんでゐて、やがて、ぐつたりと氣を失つたまま、舟の中へ棒杭のやうな恰好で引きづりあげられたのでありました。

の中へ棒杭のやうな恰好で引きづりあげられたのでありました。
レイとブラニイとは、腰をぬかすほどに驚いたのであります。
『しつかりしろ、正夫、正夫。』
『おーい、正夫、正夫。』
と、二人は、獨木舟の底にころがつた正夫の身體を、夢中になつてゆすぶつたのでありますが、手にふれるものは、今は聲もない友人の肉體が、ただ冷えびえと感じられて來るばかりでありました。
『どうしたらいいのだ。どうしたらいいのだ。レイ、レイ。』
『早く早く、この汽船に運びこんで手當をしなければだめだ。』
『おーい、おーい。』
と、ブラニイは、かたはらに王城のやうに浮かんだ白い巨船の船べりの厚い鐵板を、小さなこぶしで力のかぎりたたいて、はるかに灯のもれた甲板に呼びかけたのであります。
そのとき、レイが、あつと聲をあげて、そのこぶしをいきなりおさへつけたのでした。

『ブラニイ、呼んではだめだ、だめだ。』

『なぜだ、なぜだ。』

『この汽船はだめだ。』

『なぜだめだ。正夫は死んでしまふぢやないか。手をはなせ。』

『いや、呼んぢやいけない。あれを見ろ。』

レイが指さす彼方(かなた)を見ると、一萬トン近くもある汽船の横腹には、英國國旗(ユニオンジヤツク)があざやかに染めぬかれて、月光にありありと照らし出されてゐるのでありました。

『これはイギリス船だぞ。』

『ほんとだ。』

『この港の海底に、こつそりと日本人が、一人、夜中にもぐりこんでゐたことを知つたなら、イギリスは、どんな大きな問題を日本にたたきつけるかわからない。』

レイのいふとほり、全世界の國々は、いま歴史はじまつて以來の大きなこんらんのうち

レイのいふとほり、全世界の國々は、いま歴史はじまつて以來の大きなこんらんのうちにあるのでした。

ヨーロッパの天地も海も、ことごとく戰火におほはれて、ドイツ、イタリーは一體となつて、新しい歐洲をつくるために刄向かふ國々を征服して、大國ソビエート・ロシアと、イギリスに對して銃火をまじへてをります。

アジアでは、あらゆる苦難とたたかひながら、四方を敵にかこまれた日本が、東洋永遠の平和をめざして、東亞共榮圈といふ大きな希望のもとに、さへぎるもののすべてを打ちたふし、なぎたふして、進軍の歩を進めてゐるのであります。

そのさへぎるものの一つに、ほろび行く蔣介石と、あはれなその軍隊があります。

アメリカ大國があります。

また、世界の七つの海と、五大洲をほしいままにふるまつてゐたイギリス帝國があります。

『では、どうしたらいいのだ、レイ。』

『どうしたらいいのだらう、ブラニィ。』

二人は、ふたたび泣聲をあげて正夫の手足をはげしくゆすぶつたのでありますが、答へるものは、ゆれかへる獨木舟（くりぶね）が打つ波のひびきと、くだけちる南海の月かげばかりでありました。

『ブラニィ、こんなことをいつまでしてゐたら、正夫はとても助からない。早く岸へ着けよう。醫者へ駈（か）けこまなければだめだ。』

『よし。レイ、君は町に向かつて死物ぐるひで漕（こ）げ。僕は、その間に、人工呼吸をやつてみる。』

『人工呼吸――。』

『さうだ。』

『出來るのか――。』

『海で生活してゐたから出來る。』

『海で生活してゐたから出來る。』

『なぜ早くそれをやらないのだ。』

『すつかり、あわててしまつたんだ。』

『大事なときにあわてるやつがあるものか。さあ、僕はもつと力一ぱい漕ぐから、君は人工呼吸をしつかりやつてくれ。』

水泳の出來ないレイは、いつも獨木舟をあやつつて海や川で遊んだものか、その漕ぎかたは非常にうまく、舟はすいすいと白く波をけりながら走るのでした。

その間に、ブラニイは自分の左の片ひざを立てて、その上に正夫の身體をうつ伏しにさせて乘せると、その背中を強くおしながら、幾回も水をはかせたのであります。

それがすむと、今度は舟底へあふむけに寢かせて、正夫の舌を指さきでつかんで引き出すと、つづいてそれを中へ押しかへす人工呼吸の方法をとりながら、大きな聲で數をかぞへはじめたのであります。

『一、二、三、四――一、二、三、四――一、二、三、四――。』

四つ數へるたびに、正夫の舌を引き出しては押しこむしんけんなブラニイの態度を、漕ぎながら見てゐたレイは、もどかしがつて聲をかけたのであります。

『もつと早く、舌を入れたり出したりしたらどうなんだ。一、二、一、二で出來ないのか。』

『そんなことをしたつてだめだ。僕は落ちついて來たからもうあわてないぞ。』

『なぜいそぐことが、だめなのだ。』

『これは、四秒間に一回のわりで舌を引いて押しこまなければいけないのだ。さうしなければ空氣が完全に肺まで達しないのだ。いそいだところで何の役にもたたない。正夫のことは僕にまかせて、君はただ漕いでくれ。漕げばいいのだ。』

『よし、漕ぐぞ、漕ぐぞ。』

レイは、齒をくひしばつて、首を力一ぱい前にかたむけて、櫂をいそがせるのでありました。

落着きをとりもどしたブラニイは、注意ぶかく正夫の舌を引いたりおしたりすると同時

落着きをとりもどしたブラニイは、注意ぶかく正夫の舌を引いたりおしたりすると同時に、繩のさきをほどいて、それを鼻の穴にさしこんでそこを刺戟したり、冷えきつて息の絶えた顔を手のひらで磨擦したりしてゐるうちに、ふと正夫が、大きく一つ息を吸つたかと見るうちに、かすかな呼吸が自然に開始されて來たのでありました。

それをじつと見つめたブラニイは、うれしさにこんこんと流れ出る涙の顔を、レイにさしむけて叫んだのであります。

『レイ、見ろ見ろ、大丈夫だ。』

『おお、正夫、正夫。』

『さあ、すぐに心臓をととのへなければいけないのだ。それに、早く身體を溫めてやらなければだめだ。』

ブラニイはさういつて、自分の體溫を分けるために、氷のやうになつた正夫のからだをはだかでかかへたのであります。

『よし、僕もあたためてやるぞ。』

レイは櫂（かい）を艫（とも）に投げすてて、正夫の首と足にしがみつきました。

漕ぎ手を失つた舟は風と逆流（ぎやくりう）をうけて、ゆらゆら沖の方へ流されて行くのでありました。

『レイ、大變だ、舟が流されてゐる。』

『しまつた。』

レイは櫂をとると、うなり聲をあげてまた漕ぎはじめたのであります。

ブラニイはがくがくとふるへながら、次第にととのつてくる正夫の呼吸にうれし涙を止めどもなくこぼしたまま、しつかりと正夫をかかへて、次第に近づく町の灯（ひ）をじつとにらんでゐたのであります。

10

あをぞらたかく
ひのまるあげて

ああうつくしい
にほんのはたは。

あさひののぼる
いきほひみせて
ああいさましい
にほんのはたは。

自分たちが紙でつくつた日の丸の旗を手に手にふりながら、日本人國民學校の一年生が三十人ほど、同仁病院に入院してゐる同胞患者の見舞ひに來たのは、その翌日の日曜の朝のことでありました。

正夫は、玄關(げんくわん)を入つて來るその元氣な歌聲をききながら、自分の家の二階の病室の寝臺(しんだい)

に横たはつて、父の診察をうけてをりました。

『お父さん、もうすつかりよくなりましたよ。』

『さうか。正夫は、泳ぎが上手だと思つてゐたのは、お父さんのあやまりだつたかな。』

『すみませんでした。あんなに深くもぐつたのははじめてのことで、失敗しました。』

『決心して飛びこむからには、全力をつくしてやらなければいけないね。こんなに早くよくなるやうなおぼれかたでは、まだまだ努力がたりなかつた容子だな。』

『さうです、お父さん。努力がたりませんでした。もぐつて行くうちに、大きな汽船の底へからだが、だんだん吸ひつけられて行くやうな氣がしたまではおぼえてゐますが、そのあとは、わからなくなつてしまつたのです。』

『人間といふものは、決心ひとつで、どんな大きな仕事でもやりとほせるものだ。またその時には、不思議な力も出てくるものだ。正夫の場合でも、もう少ししつかりした精神を持つてゐたなら、きつと海底まで達して、その一錢玉の山とかいふ中から、一つぐらゐにぎ

持つてゐたなら、きつと海底まで達して、その一錢玉の山とかいふ中から、一つぐらゐにぎつても來ただらうし、そのうへ、いかに深くとも、おぼれもしなかつたに相違ないのだ。これをいい機會に、すぐれた、たくましい精神を養ふやうに心がけなければいけないね。』

『はい。』

『ことに海外に在る日本人は、いつも背中に祖國を背負つてゐる態度をくづしてはいけない。何事にもがん張るのだ。負けてはいけないのだ。』

『よくわかりました。』

一年生たちの歌聲が階下の病室を一まはりして、やがて二階にあがつて來たのであります。そして、白い洋裝をした、ふとつた若い女の先生を先頭にして、二列に手をつないだ男の子や女の子たちが、正夫の部屋に入つて來たのでありました。

『御病氣は、いかがですか。』

先生は正夫の眼をのぞきこみながら、たづねたのであります。

『はい、もうすつかりなほりました。』

『それは、おめでたう。なんの御病氣でしたの。』

『海でおぼれました。』

『海で――。』

と、先生が驚いてゐるのを見て、父がにこにこと、昨夜の出來事のすべてを語つたのであります。

先生は、一つひとつうなづきながら聞いてをりましたが、やがて、生徒たちに向かつて靜かに話されたのであります。

『このお方は、昨夜お友だちのお仕事を助けようとして、海でおぼれたのだ

さうです。そして、助けようと思つたお友だちに、あべこべにおぶさつてここへ來たのださうです。』
どつと、生徒たちが笑つて手をたたいたので、正夫は思はず頭をかきながら、毛布をひつかぶつたのであります。
すると、父がその毛布を、にこにこと笑ひながら、はねのぞいたのでした。
先生の言葉は、さらにつづくのでありました。

『皆さん、そんなにをかしいですか。』

『をかしい、をかしい。』

『とても、こつけいだよ。』

『元氣がないなあ。』

　小さな口々から大聲で叫ぶいろいろな言葉が、ゑんりよなく正夫の耳を打つてくるのであります。

『では、そのとき、どうしたらよかつたのでせうね。』

と、先生はつづけて質問をしたのであります。

『はい』『はい』と、そこここに指をそらした手があげられました。

『では、山本さん。』

『はい。助けようと思つたときには、自分がおぼれても、助けあげなければいけません。

『では、森田さん。』

『はい。やらうと思つたことは、自分が死んでも、やりとほしてしまはなければいけません。』

『では、石井さん。』

『はい。助ける人が、助けられる人に、おぶさつて來たのでは、何がなんだかわかりません。』

ふたたび、どつと手を打つて、おたがひに顔を見合せながら、幼い子供たちは笑ひころげたのでありました。

正夫は、もう一度頭から毛布を引つかぶらうとしましたが、毛布がうごきません。はてなと思つて見ると、毛布は父がしつかりとおさへてゐるので、しかたなく自分もいつしよに笑ひ出しながら、つい、

『こんどは、ほんとに助けるぞう。』

と、大きな聲を出してしまつたので、皆は手に手に日の丸の旗を、ばんざい、ばんざい

と、ふりあげたのでありました。

『では、お大事に。』

『さよなら、早くよくなつてね。』

『さよなら、お國のからだ。』

『さよなら、日本のからだ。』

『お大事に。』

『お大事に。』

生徒たちはかかへて來た、一束（ひとたば）のばらや、天竺（てんぢく）ぼたんなどの花を寢臺の枕元にかざると

ふたたび高らかに歌をうたひながら、隣室へつづく廊下（らうか）へ消え去つたのでありました。

みんなでべんきやう

うれしいな

こくみんがくかう
いちねんせい。

げんきでたいさう
いち、につ、さん
こくみんがくかう
いちねんせい。

11

さかまく波の大平洋上に、雪をいただく富士山を氣高く見せて、眞紅（まつか）な太陽の旗じるしをひるがへした島國、大日本帝國があるといふことは、アメリカとイギリスにとつては、目の上の瘤（こぶ）よりも不愉快きはまることなのでありました。』

この二つの國は、東洋が持つてゐる種々な寶物、それは、國家が發展して行く上にぜひ必要な物、例へば、錫とか、ゴムとか、石油、マンガン、タングステン、麻といつた物が豐富にとれるアジアの土地を多く手に入れて、アジア人種をあごの先でいつまでもこき使ひながら、その利益で自分たちの國を富ませ、その金で限りないぜいたくと、わがまま一ぱいを重ねて、晝も夜も暮して行きたいと願つてゐたのであります。

その惡魔の考へを實行するには、何としても日本がじやまになるので、これを困らせてやらうと、二つの國はしめし合せて、日本を四方からとりかこむと、貿易を絶つて、武器を備へておどかしたのであります。

ハワイ、ヒリッピン、ボルネオ、蘭印、シンガポール、ホンコン、重慶、アリユーシャン群島がこれであります。

正夫が二日ほど病室にゐる間にも、これら海賊どもの大砲は刻々に日本に向けられて、ことにシンガポールは、イギリスとアメリカとが東洋を襲ふために、しつかりと手をにぎ

ことにシンガポールは、イギリスとアメリカとが東洋を襲ふために、しつかりと手をにぎりあつた最も大切な根據地なのであります。

がちや、がちやーん――

と、いきなり、表通りから投げられた石に、正夫の家の窓ガラスが、又しても玄關の石疊に、木つ葉みぢんの音をたてたのであります。

『またか。』

と、正夫は寢臺から半身を起して見ると、部屋の窓ガラスが二枚ぽつかりと口をあいてガラスの破片は月光にかがやいたまま、毛布の上にまで飛び散つてゐるのでありました。

父が階段を大またにあがつて來たのであります。

『この部屋か。』

『さうです。』

『怪我は。』

『ありません。』

『さうか。毎日毎晩、けちな眞似をする奴らだ。』
父はさういつて、窓から表通りを見おろしたのであります。
向ひ側の籐細工屋の露路に、一人の支那人が身をかくしたまま、容子をうかがつてゐる頭だけが、折からの海風に長い髪を吹かせて見えてゐるのでありました。
『おいおい、ここは病人を收容する場所だ。けちくさい眞似をするのはよせ。話があるなら、大手を振つて玄關からあがつて來い。』
父の太い聲に追はれるやうに、支那下駄がかたかたと一散に遠ざかつて行くのを、正夫は寢臺できいてゐたのであります。
『お父さん、誰なの。』
父は部屋に投げられたこぶし大の石を拾ひながら、正夫のそばへよつて來たのでした。
『昨日は、濠洲兵が食べのこしたマングスチンが飛びこんで來たが、今日は支那人の石ころだよ。そのうちに、どかーんと、鐵砲玉がとびこんでくるかも知れないぞ。』

ろだよ。そのうちに、どかーんと、鐵砲玉がとびこんでくるかも知れないぞ。』

『何が來たつて、僕、おどろくものか。』

『さうだとも、その肚が出來てゐればまづ大丈夫だ。とにかく、ここは敵地だからな。敵地にゐればゐるだけ、日本人としての大きな態度を養ふことがかんじんだぞ。』

『はい。』

『なんでも飛びこんで來るがよい。そんなものはすべて、しつかりとした魂で、はねかへしてやるばかりだ。』

『門番はどうしたのですか。』

『あの印度人も、昨夜から姿を見せないが、たぶんイギリス人にでもそそのかされて、來なくなつたのだらう。東洋人のくせに、イギリスやアメリカなどの手先に使はれてゐるやうでは全くしやうがないな。』

『さういへば、お父さん、この頃マライ人や支那人の患者さんが、ちつとも來ませんね。』

『表通りに支那人の張り番が二人立つてゐてね。ここへ來る患者をおどかして追ひかへし

てゐるのだよ。患者(くわんじや)をなくして、この病院をつぶさうとでもいふのだらう。』
『お父さんは、日本とイギリスが、もし戰爭を始めてもここにゐるのですか。』
『斷じて歸らないね。お父さんもお母さんも、海外で骨をうづめるかくごで、日本を出て來たのだからな。』
『では、僕も歸りません。』
『いや、正夫はまづ勉強をしなければいけない。それには、日本人國民學校を卒業したなら、いつたん日本へ歸つて、上級の學校へ入學しなければいけない。そこを卒業した上でシンガポールへまた來るなり、或は、この南洋方面で活躍(くわつやく)するはうがよいのだが、正夫はいつたい何になるつもりなのだ。』
『僕は、飛行家になりたいのです。』
『飛行家になるのか。だうりで毎日模型飛行機を熱心に作つてゐると思つたが、では、少年航空兵にでもなりたいのかね。』

『いいえ、民間飛行家になるのです。』
『ほほう、民間飛行家になるのか。どんな順序にしてなるつもりだね。』
『この間、日本から來た雑誌を讀んで知つたのですが、日本の陸海軍の航空部隊は、世界一に強いのですね。』
『それは、もちろんだとも。』
『ノモンハンの大空中戰では、またたくうちに敵機を一千機以上もたたきおとしてしまつたのですつてね。』
『さうだ。そして今度の支那事變でも、敵機のすべてをたたき伏せて、大陸の大空せましとばかりに、重慶その他に巨彈の雨をあびせかけてゐるのだ。また、あの渡洋爆撃隊の勇壯無比なことはどうだ。深夜の大暴風雨を突いて、怒濤さかまく海上を飛びきつて、敵機ことごとく粉碎せずんば死すともやまずの、あの日本魂はどうだ。世界中どこを探したつて、こんなりつぱな精神を持つた軍隊は、一つだつてありやしないのだ。』

『兵隊はよせ集めだから、それだけに、お互ひの責任は、尚さら重いのだぞ。』

『ここの軍港も、要塞も、飛行場も、皆物すごいものばかりだが、兵隊はよせ集めだから

なつてをらん。とにかく、正夫もお父さんも、すばらしい國にうまれてよかつたな。それ

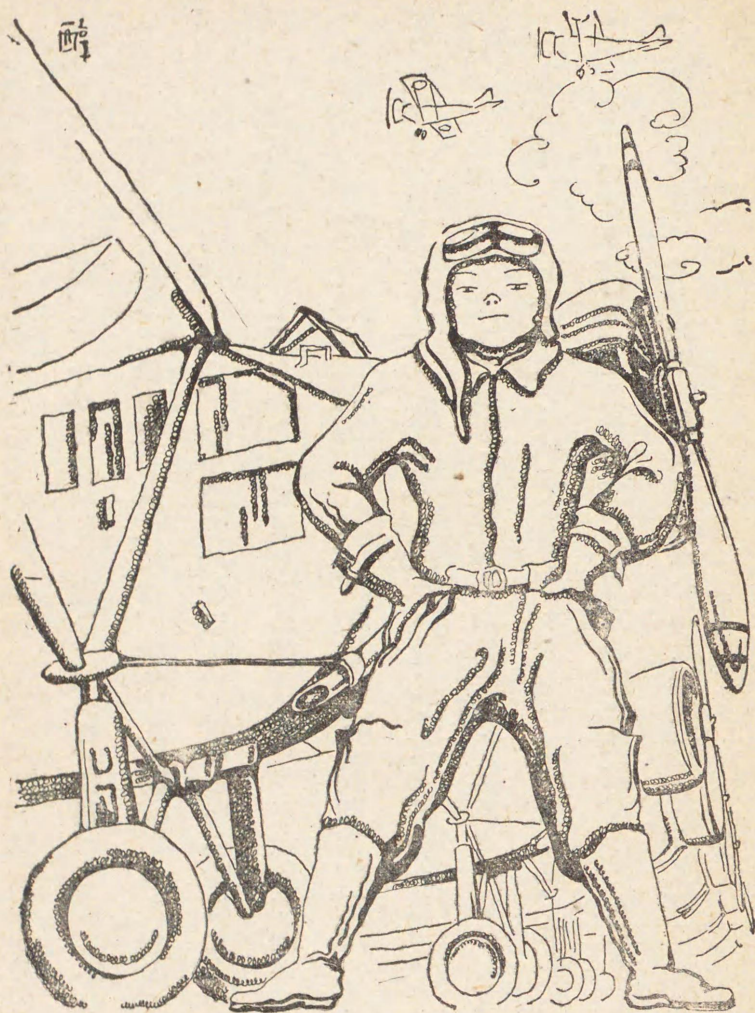
だけに、お互ひの責任は、尚さら重いのだぞ。』

『さうです。僕はこれから、なんでも一心にやるつもりです。しかしお父さん、こんなに強い陸海軍の航空部隊を持つた日本が、ドイツにも負ける、イタリヤにも負ける、アメリカにも、イギリスにも、フランスにも負けなければならないものが一つあることを、僕は知つたのです。』

『ほほう。』

『お父さんにも、わかりますか。』

『それは民間航空のことだね。』

『それは民間航空のことだね。』

『さうです、お父さん。銃後をまもる輸送機のことです。それが世界の列強國にくらべると、とても劣つてゐるのが日本なのです。しかも、民間航空といふのは

軍事航空の第二軍ともいはれるもので、長期の戰爭には、軍隊のうしろに、有力な民間飛行家をどしどし養成しておかなければ、戰ひは、つひに負けてしまふのださうです。』

『それは、正夫のいふとほりだ。航空には、戰時も平時もあつたものではない。常に備へが、かんじんなのだ。いつ、いかなる場合にも、いざといふ時に立上つて、直ちに敵を撃滅する飛行家を養成しておかなければ、その國は、いつか世界地圖からほろびてしまふといふのが、現在の世界の有樣だ。では、正夫は、その民間飛行家になるには、どこへ、どのやうにして入學をしたらよいのか、それもしらべてあるのかね。』

『はい、あります。それは東京の上野驛から常磐線の電車に乘つて、二十分ほど行くと、千葉縣の松戸驛といふところに着くさうです。その驛の近くに、中央航空機乘員養成所といふ、日本の國が力こぶを入れて立てた官立の航空學校があるのです。』

『さうか。うかつな話だが、お父さんはそんな學校が日本に出來てゐたとは知らなかつたなあ。』

なあ。』

『僕は、飛行家になる勉强をしてゐるので、しらべたから知つてゐるのです。お父さんはどうぞお醫者さんのお仕事を充分にやつて下さい。』

『さうか、よしよし。』

『その中央乘員養成所へ入學するのには、地方の養成所で、五ヶ年間の教育をまづ受けなければいけないのです。地方の養成所といふのは、仙臺と新潟と、米子、熊本、印旛の五ヶ所にあつて、國民學校の卒業生なら、誰でも學課と體格檢査に合格すれば入學できるのです。そしてここを卒業した者が、中央養成所へ入學するのです。』

『その中央養成所は、何年間で卒業できるのかね。』

『操縦科と機關科がありまして、操縦科は一年、機關科は二年で卒業します。そして、卒業生の大部分は、大日本航空會社とか、滿洲航空とか、中華航空といつた會社の、一等或ひは二等操縦士や機關士になつて、銃後の空に活躍してゐるのです。』

『なるほど。それで、月謝はどれくらゐかかるのか、わかつてゐるのかね。』

『月謝は、地方の養成所も、中央養成所も、一錢もいらないのです。さるまた一つで入學すれば、服も、食事も、寄宿舍も、いつさい國の費用でやつてくれるのです。なほその上月々四圓五十錢といふ、お小遣までも政府で下さるさうです。』

『それほどまでにしていただいては、一生懸命にやらなければ相すまない次第だな。』

『さうです。生徒は日本の民間航空を、軍事航空と同じやうに世界一のものにしなければ申しわけがないわけです。ですから、お父さん、私が日本へ歸つたなら、その養成所の試驗を受けてもいいでせう。』

『よし、正夫が希望ならば、受けてみなさい。しかし正夫、空にあこがれを持つのはよいが、海を忘れておぼれるやうではしやうがないぞ。』

『海も、大空も、忘れません。もう大丈夫です。』

『さうか。海といへば、今年もまた全マライ少年水泳選手權大會の日がせまつたが、去年のやうに、うまく二等ぐらゐとれるかな。』

『今年はぐわんばつて、一等をとるつもりです。』

のやうに、うまく二等ぐらゐとれるかな。』
『今年はぐわんばつて、一等をとるつもりです。』
『去年の一等はアメリカの少年だつたね。』
『さうです、ウヰルキンソンです。』
『とにかくこれからの少年は、海と、大空へ、どしどし乗り出して行かなければいけない。正夫も、目的に向かつて大いに勉強をしなさい。』
『ありがたう、お父さん。では、もうすつかりなほりましたから、今晩かぎりでこの部屋を退室してもいいでせう。』
『明日から、自分の部屋へもどりなさい。』
『ああよかつた。』
正夫がにつこりと仰ぐシンガポールの夜空には、今宵(こよひ)も流星が多く、さやさやと鳴る窓外の椰子(やし)の葉かげに、その一つがあざやかな尾を引いて消え失せたのであります。
父が部屋を出て行くと、入れかはりに扉の外から五十センチほどもある大きな蛾(が)が一匹

舞ひこんで來て、天井や壁に黃色い羽根をばたばたと打ちつけだしたので、そのたびに、五六匹もやもりが天井に吸ひつきながら、逃げたり近よつたりしてゐるのを、正夫は面白く見てゐますと、ふいに窓下の表通りから、ののしり合ふ人の聲がきこえて來たのでありました。

『なぜ、この病院へ入院してはいけないのだ。』

『ここは日本人が經營してゐる病院ですよ。』

『だから、なぜ入院をしてはいけないのかと聞いてゐるのだ。』

『あなたは、まさか日本人ではないでせう。』

『それがどうした。』

『どこの國の人種です。』

『無禮な口のききかたをすると承知せんぞ。私はアメリカ人だ。』

『アメリカ人なら、あなたの國が、いま日本とどんな關係にあるかが、わかるはずです。』

『アメリカ人なら、あなたの國が、いま日本とどんな關係にあるかが、わかるはずです。』

『一應お前の口から、それを說明して見ろ。』

『日本こそは、アメリカと、支那と、イギリスの三國が手を結び合つた共同の敵なのだ。』

『アメリカと日本は、まだ戰爭を開始してはをらぬ。』

『いづれは戰ふのだ。何もこんな病院へ入院しなくとも、他に白人の病院はいくらでもあるではないか。』

『だまれ。お前たちから病院の指圖(さしづ)を受けるアメリカ人ではない。見ろ、この自動軍の内には、子供が大熱で苦しんでゐるのだ。これは、私のたつた一人の愛兒なのだ。お前らに病院の指圖をする權利がどこにあるのか。』

正夫は、がばつと寢臺を飛びおりると、窓にかけよつたのであります。

玄關前の通りに、白塗りの自家用車が一臺、をりからの月光をあびて停(と)められて、そのなかに白服をつけた白人の少年が、その母親らしい美しい人に毛布でしつかりと抱かれたまま、母と車外の氣配を見つめてゐるのでした。

自動車のわきでは、運轉手臺をおりた父らしい長身のアメリカ人が、白麻の服に身なりをととのへて拳をにぎつたまま、シヤツとズボン下をはいて籐のステツキをひつつかんだ二人の支那人と向かひあつて、はげしい口論をしてゐるのであります。

その周圍を、マライ人、インド人、支那人などの群衆がぐるりととりかこんで、いづれも青白い月光にこうこうと照らし出されたまま、かたづをのんでゐるのでありました。

シンガポール軍港と要塞のサーチライトが、あわただしく、それらの人の背後から、幾十條も、東洋の天に不安な光を投げつけて、風はいつの間に絶えたのか、むし暑い夜になつたのであります。

12

『こらこら、この人だかりは何事だ。』

『退け退け、じやまだ。』

『退け退け、じやまだ。』

濠洲兵が二人、酒くさいどなり聲を群衆にあびせながら、四五人をつきとばして人中へわりこんで來たのであります。

『これは、旦那、御苦勞さまでござんす。』

と、二人の支那人は、ひよこんと、そろつて頭をさげると、その一人がくちびるをとがらせて、得意さうに告げたのであります。

『旦那、このアメリカ人は、ふとい奴です。』

『何がふといのだ。』

『自分の子供を、日本人の病院へ入院させようとしてゐるのです。』

『それが、どうしたといふのだ。』

濠洲兵の意外な返事に、支那人はあわてて眼を見合はせたのであります。

『旦那、そんなことをして、いいのですか。』

『白人がやることに對して、お前たちは何をいふところがあるのだ。』

『へい。でも、ここは日本人の病院です。』

『だから、それがどうしたといふのだ。ぐづぐづいふと、たたき斬るぞ。』

手の甲に青々と羊の首のいれずみをした一人の兵隊が、いきなり軍服の腕まくりをして一歩ふみ出したので、支那人は二人とも、ぱつと群衆の方へあとずさりをしたのであります。

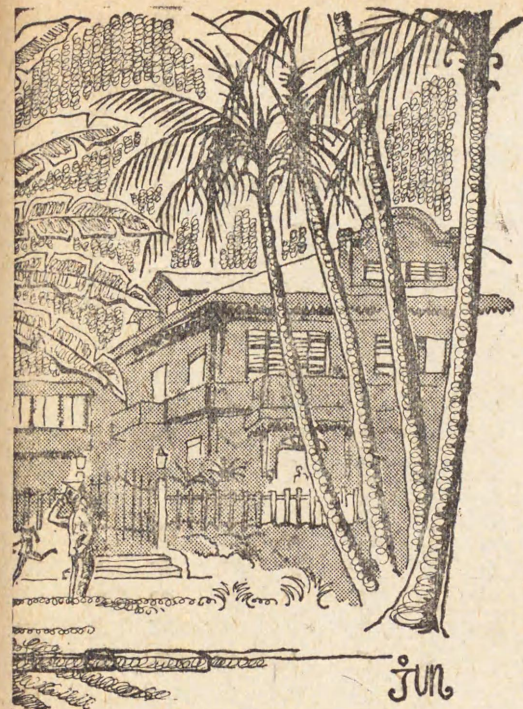
『旦那、わかりました。もうわかりました。皆さん、ちよつとごめんください。』

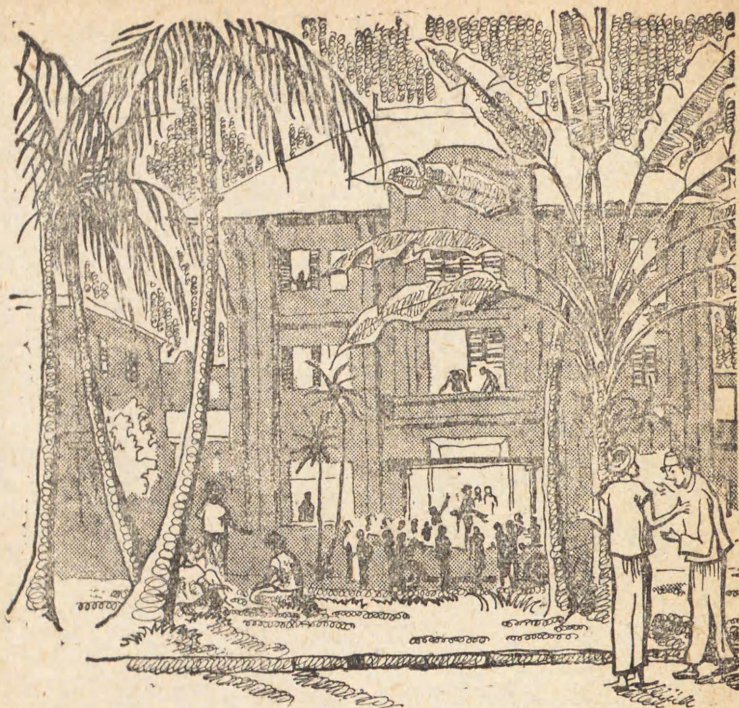
先刻のいきほひはどこへやら、支那人は人垣を尻でわけると、たちまちステッキをかかへて、その中に姿を消したのでした。

このやうにシンガポールの人々は、亂暴者の濠洲兵をまことに恐れてゐるのですが、濠洲兵にいはせれば、何かにつけてイギリス本國兵とは差別たいぐうをされるし、二言目には、「濠洲兵隊羊飼ひ、いも掘り兵隊ずうずう辯」などとからかはれるので、いつも腹を立てて勝手なふるまひをしてゐたのであります。

てて勝手なふるまひをしてゐたのであります。
『本國兵め、あまりに人をばかにするな。われわれは、お前たちイギリスの藏、シンガポールに火がつきさうだから消しに來てくれといふから、わざわざ濠洲くんだりから消しに來てやつてゐるのだ。ありがたく、禮をのべろ。』
と、どなり散らすので、インド兵とマライ兵がそれに同情して、大いにやれやれと尻押しをするものですから、濠洲兵は、シンガポール島をわがもの顔にふるまつて、肩をいからし、大手を振り、軍靴高く歩きまはつてゐるのであります。これ以上怒らせたら、何をしでかすかわかりません。支那人たちはあとも見ずに逃げ出したのであります。
『わは、は、は、は。アメリカの友人よ、あんな奴らに暇どつてゐることはないよ。東洋人を相手にするのなら、まづ、命令と、おどかしの方法で片づけることを忘れてはいかんよ。さあ、どこへでも、君の好きな所へ入院させるがよい。握手だ、握手だ。』
『ありがたう。』
と、アメリカ人は、酒くさい兵隊の息をまともに受けて、少し身をひきながら禮をいつ

たのであります。

二人の濠洲兵はその手をうかんで樂しさうに振り終へた後、自分たちの腕を大きく左右に開いて群衆を追ひ散らすと、肩をくんで歩き出したのであります。そしてどこでおぼえたのかマライの歴史詩（シンガポール大火の詩）を、マライ語で大きく唄ひながら遠ざかるそのうしろ姿が、青々と月光にぬれてよろけながら行くのを、アメリカ人は、しばらく不愉快さうに見送つてゐましたが、やがて、あわただしく、妻子をつれて同仁病院に吸ひこまれたのであります。

人影のない路上に、うるしで描いたやうな影を落した火焔木の高い梢で、

やうな影を落した火焔木の高い梢で、

ミンミン蟬が二三匹、月夜の明るさにさそはれて、ミンミンミンミンとなきはじめたのであります。

13

正夫の家に、アメリカ少年スミスが入院してから幾十日かがたちました。

ある日、正夫は、日本のおぢいさんから贈つて來た、四角な唄時計、それは愛國行進曲を、チンカンコロコロと唄ふ時計でありました。それを自分の部屋で樂しく鳴らして、はるかに遠い

祖國日本をなつかしんでゐますと、ふいに、とんとんと扉をたたく者があるのでした。

『どうぞ。』

と、聲をかけると、今は血色もましたスミスが、扉を開いてにこにこと立つてゐるのでありました。

『こんにちは。僕、五號室のスミスといふ者ですが、遊びに來ました。おじやまではないでせうか。』

と、スミスは英語でたづねたのであります。

『いいえ、どうぞおはいりください。』

と、正夫も英語で答へたのでした。

『唄時計ですね。あんまり良い音樂がきこえて來たので、つい病室からあがつて來てしまひました。』

『もう歩いてもいいのですか。』

『もう歩いてもいいのですか。』
『今日、君のお父さんから、おゆるしが出ました。』
『マラリヤにかかつたのださうですね。』
『さうです。マラリヤ病にとりつかれました。』
マラリヤ病といふのは、マラリヤ菌をもつた雌の蚊にさされて起る病氣であります。この病氣にかかると、まづ最初に寒氣がして、身體ぢゆうががたがたと三十分ぐらゐふるへて來るのであります。
つづいて四十度ぐらゐの熱が、三時間ほどつづくのであります。
そして最後に、身體ぢゆうべつとりと四十分ぐらゐ汗をかいてをさまるのです。
この狀態が、三日目か四日目ごとに、必ずおそつてくるのが、マラリヤ病であります。
『君、マラリヤは、蚊にさされない用心をすれば大丈夫ですよ。マラリヤ菌のある蚊は、お尻を立ててとまつてゐるからすぐにわかりますよ。』
『僕は、それをちつとも知らなかつたのです。』

『シンガポールへは、いつごろ來たのですか。』
『來たばかしで、病氣にとりつかれたのです。』
『君は、マライ語をしやべれないのですか。』
『まだ出來ません。』
『ここには、數十ケ國の人がたくさんゐるので、自分の國の言葉を使つても、他國の人には通じません。ですから僕たちは皆マライ語を話してゐます。マライ語を知らないと、友だちは一人も出來ませんよ。』
『ありがたう、僕も大いに勉强をします。』
『もう熱は出ませんか。』
『すつかりなほりました。こんな病氣になつたのも、みんなあのお化けのしわざです。』
『お化け。君、お化けですか。』
『さうです。お化けのために、すつかり蚊がふえてしまつたのです。』

『さうです。お化けのために、すつかり蚊がふえてしまつたのです。』

『君、お化けがどこにゐたのですか。』

『お化けは、僕の部屋でコーヒーをのんでゐました。』

正夫は、ちよつと驚いたのであります。

お化けなどは、世の中にゐるわけがないし、しかもそれがコーヒーをのんでゐたといふのですから、思はず身を乗り出したのであります。

『君、それはほんたうですか。』

『ほんたうですとも。さじでコーヒー茶碗(ちやわん)のふちをたたきながら、コーヒーをのんでゐたのです。』

『そして、お化けはどうしました。』

『僕がころしてしまひました。』

『ころした。』

『さうです。ころしました。』

『えらいなあ、君は。』

『それがために、とうとうマラリヤ病にかかつてしまつたのです。』

『どうしてです。』

『ある晩のことです。それは、父がニューヨークの本店からここの銀行支店に轉任してから三日目のことです。僕は父につれられて、物めづらしい南國の風景を見て歩きました。

明るい支那人街、靜かなマライ人町、暗い椰子並木、ぼだい樹の丘。そして海岸町の涼しい映畫館を見物して家にもどつて來たのです。

すると、灯を消して出たまつ暗い僕の部屋で、チロリン、チロリンと、何かかすかな音がひびいてゐるのです。僕は、なんだらうと思つて、ぱつと電燈をともしたのです。そのとき、はつと驚いてしまつたのです。君は何がゐたと思ひますか。』

『お化けですか。』

『さうです。お化けがゐたのです。からだは見えないのですが、僕が映畫館へ行くとき、

『さうです。お化けがゐたのです。からだは見えないのですが、僕が映畫館へ行くとき、飲みほして机の上に乘せておいたコーヒー茶碗の中で、さじが、ひとりでに動いてゐるのです。』
『さじがですか。』
『さうです。さじがひとりでに動いてゐるのです。』
『ふしぎだなあ。』
『しかも、さじは茶碗のふちをたたきながら、チロリン、チロリンと氣味わるく踊りををどつてゐるのです。』
『ほう、氣持ちがわるいなあ。』
『そのさじの向かうには、大きな窓が夜空に開かれて、赤道直下の紫の星が、いちめんにかがやき渡つてゐるのです。しかもそのとき、さつと青く燃えるやうな尾を引いて、流星の一つが茶碗のかげに消えうせたのです。』
『君は話が上手だなあ。少し氣味がわるいなあ。』

『僕は科學を信じてゐます。アメリカにもシンガポールにも、お化けなどはゐないことを知つてゐますから、そつと茶碗に近づいたのです。でも、萬一のことがあるといけないと思つたので、扉の入口にあつた蠅たたきを、しつかりと右手でにぎりしめて近よつたのです。たかがしれたコーヒー茶碗の中にひそんでゐるくらゐのお化けですから、恐れるには及びません。僕は茶碗の上からいきなり首をつき出して、中をのぞきこみました。その拍子に、チヤリンとさじをはねとばして、ぱつと逃げ出したものがあるので、僕は夢中でそいつを蠅たたきでつづけざまになぐりつけました。すると、お化けは鼠のやうななき聲をチーチーとあげて死んでしまひました。』

『あ、わかつた。お化けは、やもりでしたな。』

『さうです、やもりであつたのです。やもりがコーヒー茶碗の中に入つて、底にのこつてゐたお砂糖をなめてゐたのです。』

『なあんだ。ずゐぶん驚かせるなあ。』

『それから僕は天井にはひまはつてゐたやもりを、七八匹づつ毎晩たたき落したものだか

『なあんだ。ずゐぶん驚かせるなあ。』

『それから僕は天井にはひまはつてゐたやもりを、七八匹づつ毎晩たたき落したものだから、僕の部屋には、とうとうやもりは一匹もゐなくなつてしまつたのです。』

『君、やもりは天井や壁をはひまはつて、蚊をとつてたべてゐるのですよ。』

『さうでした。僕はつひに、たくさんにふえた蚊にさされて、マラリヤ病になつてしまつたのです。これ卽ちお化けのしわざです。』

『そのお化けなら、毎晩僕の部屋にもたくさんあらはれますよ。』

と、正夫は天井を仰いだので、二人は聲高く笑つたのでした。

『お化けの話はそれでよくわかりましたが、スミス君、君はどうして僕の家、日本人の病院をえらんで入院をしたのですか。』

と、正夫は、この間から疑問に思つてゐたことをたづねたのであります。

『父は、私にいつも教へてくれます。世界で一番すぐれた人間は、日本人であると。日本人は、一人のこらず自分の身をすてて、祖國を愛する魂をいだいてゐます。國を愛すとい

ふことほど人間として、美しく、氣高く、すぐれたものはないのだから、お前も日本人の魂(たましひ)を育てあげろとよくいはれます。』

『アメリカ人は、國を愛さないのですか。』

『父は涙を流して私に語ることがあります。アメリカ人は、自分を愛することだけを知つてゐて、國を愛す人はまことに少いと。』

『そんなことでは、いつか國は亡(ほろ)びてしまふではありませんか。』

『さうです。僕の國アメリカは、近いうちに一ぺん亡びるのです。今更、どうにもならないのださうです。そして、僕たち現代のアメリカ少年の手によつて、ほんたうのアメリカが今後幾十年かの後に立ちあがつて來るわけです。それにはアメリカの全少年が、まづすつぱだかになつて、日本の少年から、いろいろなことを天よりも高く學びとらなければならないのです。幸ひに君と知り合ひになつたので、僕は今日から、君の全部を吸ひとる決心です。』

正夫は、はつと身をととのへたのであります。

そして籐椅子から立ちあがると、壁にかざられた天子様の御眞影をおごそかに拝して、はるかに遠い三千浬、海の彼方にある祖國に感謝すると同時に、日本少年として生まれた自分に、今更に責任を深く感じたのであります。

スミスは、じつとその様子を見つめてゐましたが、やがて自分も正夫と同じやうに、靜かに大日本帝國の天子様を拝したのであります。

見よ東海の空あけて
旭日たかくかがやけば
天地のせいきはつらつと
希望はをどるおほやしま……

『この曲は、日本の愛國行進曲です。』

と、正夫は、ふたたび唄時計を鳴らしたのであります。

『ああ、じつにいい曲ですね。僕は、病氣がなほつたら彈かうと思つて、病室に手風琴を持つて來てゐます。今それをさげて來ますから、どうぞその曲をおぼえさせて下さい。』

『では、僕もハーモニカで合奏しよう。とにかくここは暑いから、庭のぼたい樹の下へでも行きませう。』

と、二人はやがておひ茂るぼたい樹のかげに籐椅子をならべて、唄時計をかけると、ハーモニカと手風琴を鳴らしたのであります。

シンガポールの午後の日ざかりは、天地ことごとくが輝きわたつて、はるかに白い雲をぽつかりと一つ浮かべた空の下に、海からの風はそよそよと庭の草々をなでて通りすぎるのでありました。

靜かに裏門が開かれて、このときびつこのブラニイがはいつて來ながら叫んだのであり

靜かに裏門が開かれて、このときびつこのブラニイがはいつて來ながら叫んだのであります。

『おーい正夫。僕はお別れに來たよ。』

正夫はハーモニカの手をとめて、招いたのであります。

『どうしてだい、ブラニイ。』

『お父さんのあとを追つて、僕もマライ半島へ行くことにしたのだよ。』

『鰐の皮をとりにかい。』

『ああ、鰐の皮をとりに行くのだ。永い間海に馴れたお父さんが、西も東も分らない密林に踏みこんで、鰐を探してゐる姿をじつと考へると、とても心配で心配で、僕はこのままシンガポールで、だまつて暮してゐるわけにはいかないのだよ、正夫。』

『ほんたうだ　ブラニイ。』

『明日、半島へ出發するよ。かたみにおいて行く品もないので、こんなものだけれど持つて來たよ。』

と、ブラニイがさし出すものを見れば、多くのマライの子供たちが鼻の先へあてて吹き鳴らしてゐる小さな竹の笛で、ブラニイがいつも上手に吹くマライの鼻笛でありました。

『ありがたう。これはとてもいい君のかたみだ。では僕は、君にこれを贈らう。』

と、正夫は、ハーモニカをさし出したのであります。

『君、こんな上等なものをもらつても、いいのかい。』

『ああ、いいとも、ついでにこの唄時計の、日本の愛國行進曲も、そのハーモニカでおぼえて行かないか。』

『ああ、では歌もついでにお土産にいただいて行かう。』

正夫がかける唄時計を、ブラニイとスミスは、樂器の中へしみこませるやうに幾回も鳴らしたのであります。

このとき、どこからか突然、猛獸の叫びが二聲、たくましくとどろいて來たのでありました。

した。

うをおーん――うをおーん――

太くけはしいその叫びは、あたりの空氣をぴりぴりとふるはせて、三人は冷水をあびたやうに、全身の毛を逆立たせたのであります。

なんだらうと、正夫とスミスが顏を見合せたとき、いきなりブラニイが顏色をかへて、

『虎だ、虎だあ。』

と、立上つたので、正夫とスミスも、思はず飛びあがつて身がまへたのであります。

マライ半島からつづく表通りのあたりから、大ぜいの人の聲と、再び猛獸のたけり狂ふ叫びがきこえたのでありました。

うをおーん――うをおーん――

正夫とブラニイは、庭の椰子の木の頂上にたちまちのぼりあがつて、石べいの外をながめると、マライ半島へつづく大通りを十數人のはだかのインド人が、虎をとじこめた丸太づくりのをりを大八車に積みこんで、よいさ、よいさと、ひつぱつてくるのが見えたので

ありました。

『すごいなあ、ブラニィ。虎をつかまへて來たんだ。』

『行つて見ろ、行つて見ろ。』

正夫とブラニィは、すばやく椰子の木からおりて、スミスをさそふと、表通りへ飛び出したのであります。

一疋の虎が、天地にとどろくほどのさけびをあげて、をりを突きやぶるやうにあばれ狂ひながら、いま病院の前を引かれて通るところでした。

インド人たちは、まつ黑いはだかの全身から流れ落ちる汗を日にかがやかせて、火焰木や棉の大木が枝を入りまじへて影をおとした路に、なほも、よいさ、よいさと、景氣よく聲をあはせて車を引つぱつて行くのであります。

『すごいなあ――。』

『こはいなあ――。』

『こはいなあ――。』

うをおーん――うをおーん――

正夫とブラニイは、たけり狂ふ猛虎のいきほひに、思はずしつかりと手をにぎり合つて見てゐると、ふいに二人の名前を呼ぶものがあるのでした。

『おーい正夫、おーいブラニイ、ここだ、ここだ。』

誰かと見れば、やせた背の高いインド人たちの列のなかに、小さなレイがまじつて手をふつてゐるのでした。

『おお、レイ、どこからとつて來たのだあ。』

と、正夫は大聲でたづねたのであります。

『マライ半島で、三日がかりでとつて來たのだ。物すごいだらう。』

『すごいなあ。』

『そばへよると、子供なんかあの爪で、まつ二つに引きさかれてしまふぞう。』

レイは自分が子供であることも忘れて、意氣やうやうとさけんでゐるのであります。

『レイ。その虎、どこへつれて行くんだ。』

『今、シンガポールぢゆうを引きまはして來たんだ。これから動物屋へつれて行くんだ。いつしよに來ないか。』

『動物屋。』

正夫は聞いたこともない言葉に、ふとブラニィの顏を見つめたのでした。

『ブラニィ、動物屋つてなんだらう。』

『あれえ、正夫は動物屋を知らなかつたのか。』

『ああ、知らない。』

『動物屋は、向かうの山を越した椰子林の中にあるんだよ。動物屋には、世界ぢゆうの動物園や曲馬團に賣る猛獸がいつぱいゐるんだ。マライ半島や、ボルネオの山々でつかまへた虎も、豹も、毒蛇も、うようよとゐるんだ。行つて見ようか。』

『よし、行つて見よう。でも、君はマライ半島へ行く支度をしなくてもいいのかい。』

『よし、行つて見よう。でも、君はマライ半島へ行く支度をしなくてもいいのかい。』

『支度なんか何もありやしない。荷物も何もみんな、お父さんが賣りはらつて行つてしまつたんだもの。』

『おーい、レイ。いつしよに行くぞう。』

二人は見物人にまじつて、虎のをりを追ふと、スミスもつづいて走つたのであります。レイが顔のあせを手のひらでこすりながら、列のなかから拔け出て來ました。

『あの虎は、僕や僕のお父さんたちがつかまへたのだぞ。』

『どうやつてつかまへたの。』

『月夜のマライ半島でいけどりにしたのだ。猛獸といふものは、みんな夜になると、沼へ水をのみに來るものなんだ。虎だつてもちろんやつて來る。僕たちは虎の脚あとから、虎の通りみちを見つけ出して、大木の上へやぐらを組んだのだ。そして下へ、山羊ををとりにしたをりをこしらへておいたのだ。すると、四五日前のとても月のきれいな晩だつた。一疋の虎が、とうとう山羊のにほひをかぎつけてやつて來たのだ。虎が近づくと、山羊は

もうすつかりおびえきつて、をりのすみにふるへあがつたきり、啼聲も出せないのだ。虎は、いういうをりを一まはりすると、いきなり山羊に飛びかかつた。そのしゆんかん、やぐらの上から綱で引つぱつてゐたをりの戸をたたき落して、あの虎をつかまへてしまつたんだ。どうだ、おどろいたらう。』

『うん、えらい、えらい。』

と、正夫はレイの汗だらけになつた黒い肩をたたきながら、山路をのぼつたのでありま す。

14

動物屋は、ゴム山を越した人家のまれな草原にあつて、ココ椰子の林にかこまれてゐました。近づくにつれて、數十疋の猛獸のさけびがあたりの靜けさにこだまして一そうものすごく、さらにその聲にたけりたつたマライの虎が、をりにぶつかりながらほえ狂ふので、

すごく、さらにその聲にたけりたつたマライの虎が、をりにぶつかりながらほえ狂ふので、インド人たちはその恐ろしさに身をちぢめながらそれでもかけ聲だけは大きくそろへて、えいさ、えいさと、動物屋へくり込んだのであります。

動物屋の道路の兩側には、百に近い丸太づくりのをりや鳥かごなどがいちめんにならべられて　その中で象、虎、豹、ライオン、犀、山猫、狼などが、赤道直下の炎天をかつとにらんで、ほえまはつてゐるのでありました。

正夫たちは、大ぜいの見物人、支那人や、マライ人や、タイ國人や、ビルマ人や歐米人などにまじつて、それらのをりから少しはなれて眺めながら歩いたのであります。

ボルネオ産の豹は、らんらんと光るまなこで正夫たちをにらみすゑて、今にもをりを蹴やぶつて飛びかかるいきほひを示してゐます。

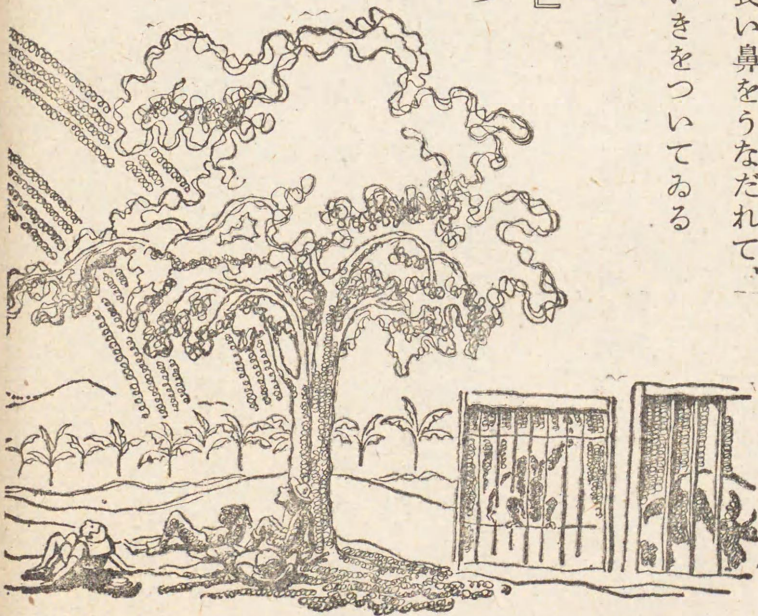
マライの密林でつかまつた犀は、一本角の頭をふり立てて、すきがあつたらのがれ出さうと、をりの四方を突きまくつてゐるのです。

ビルマのうはばみは、むらさき色に光る三角形のせなかに波をうたせてとぐろをまいて

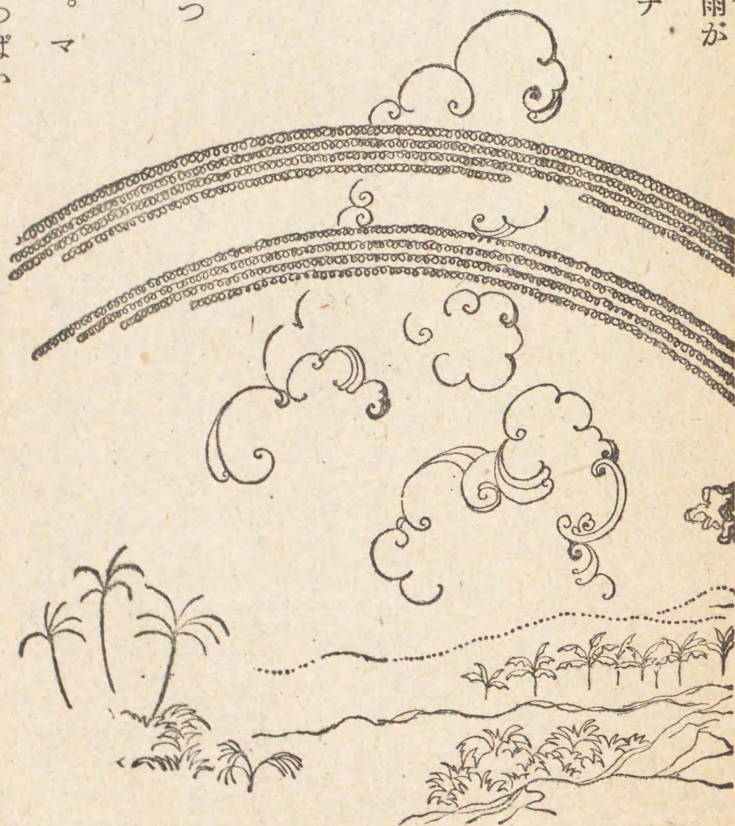
ゐますし、夢をたべるといはれてゐる貘は長い鼻をうなだれて、默々とをりの中に立ちどまつたまま、ためいきをついてゐるのでした。

『ああ、僕はすつかりくたびれてしまつた。』

といふ英語の聲に、正夫は、はつと氣がついてふりむくと、スミスが病氣の青い顏をして、足をひきづつてゐるのでした。

正夫とスミスと、レイとブラニイの四人は、手長猿のをりを前にしたぼたい樹のかげで休むことにしました。皆は足を投げ出して、兩腕を頭の下に組んであふむけになつて空

を眺めると、山の向かうに驟雨があつたらしく、はるかなバナナ林の上空に美しく二重の虹がかかつてゐるのでした。正夫はそれを眺めながら、レイにいつたのであります。

『レイ。ブラニイはお父さんのあとを追つて、明日からマライ半島へ鰐の皮をとりに行つてしまふのだとさ。』

『さうか、氣をつけて行けよ。マライの森にはまだまだ虎がいつぱい

ゐるからな、ブラニイ。』
『ありがたう。鰐の皮がたくさんとれたなら、正夫にもレイにも、おみやげに一枚づつ持つて、一ぺんシンガポールへ遊びに來るよ。』
『ああ、歸つて來たまへ。そして、もしとまる所がなければ、僕の家の病院へ幾日でもとまつて遊んで行かないか。君のお母さんが、なくなられたあの部屋も、今あいてゐるよ。』
『ああ、その時にはお父さんと二人で、あの部屋へ一晩とまらせてもらはう。』
『いいとも、いいとも。だけど、君は足がわるいのだから、虎や、鰐に追はれないやうに氣をつけ給へ。』
『ああ、大丈夫だ。鐵砲は持つて行くし、それに今度は、お父さんがいつもそばについてゐてくれるから安心だよ。』
『オラン・ラウの人たちにも、お別れをして來たのかい。』
『ああ、今朝みんなが海のお守りやら、山のお守りやら、せんべつの品などを持つて來て

『ああ、今朝みんなが海のお守りやら、山のお守りやら、せんべつの品などを持つて來てくれたよ。あ、さうだ、僕、正夫にいふのをすつかり忘れてゐたが、今年の全マライ少年水泳選手權大會は、とりやめになつたのだとさ。』

ブラニイの意外な言葉に、正夫はびつくりしてたづねたのでした。

『なぜだらう。』

ブラニイは、聲を落して語るのでした。

『海には、すつかり機雷がしかけてあるし、海岸にはトーチカと、鐵條網が犬の子も通れないほど張りまはされてゐるし、とてもそんな、のんきな大會などをやる場所はどこにもないと、兵隊や市役所の人たちがいつてゐるのだとさ。イギリス人たちは、いつ攻めてくるかわからない日本軍が、とてもこはくてたまらないらしいのだよ、正夫。』

『それはイギリスが、いぢのわるいことをするから、日本を恐れてゐるのだ。でも殘念だなあ。今年こそはどうしても一等をとつてやらうと思つてゐたのに。』

同胞のことごとくがいぢめつくされてゐるこの英領シンガポールの海岸に、今年こそは

高々と一等の日章旗をひるがへして、各國人の眼に日本少年の意氣を示してやらうとちかつてゐた希望が、いきなりたち切られたので、しゆんかん、正夫は齒をくひしばつたのであります。

このとき、レイも聲をひそめて、右から正夫の横腹をげんこつで突きながらたづねたのでした。

『正夫、なぜ日本軍は早く攻めよせて來ないのだらう。インド人はその日を、いつだらういつだらうと、皆が待つてゐるのに。』

ブラニイが、左からも正夫の腰を突きます。

『正夫、君は、マライ人の全部が信じてゐる、マライの傳説を知つてゐるか。それは近い將來に黄色い皮膚を持つた神の兵隊が、とつぜん東方からあらはれて、ごうまん無禮な英米人どもをこのマライ全土から追つぱらつてしまふといふことなのだ。この傳説を、マライ人のすべてが昔から信じ、期待してゐるのだ。神の兵隊とは誰だ。日本だ、日本だぞ、

イ人のすべてが昔から信じ、期待してゐるのだ。神の兵隊とは誰だ。日本だ、日本だぞ、
正夫。』
『レイ、ブラニイ、僕の國の人たちは、がまんが出來るまではいつもがまんをしてゐるのだ。しかし、かんにん袋の緒を切つたら最後だぞ。相手の何もかもたたきのめして、二度とは立ちあがれないほどにしてくれるから、今に見てゐろ。』
『日本は強いと聞いてゐるが、大丈夫か、正夫。』
『レイ、心配するな。』
『英米人とたたかつて、ほんたうに勝てるか。』
『ブラニイ、信頼しろよ。日本は君のお母さんの國だぞ。勝つとも、勝つとも。日本の陸軍は英米人のやうに、月給をもらつて遊びながら樂にごはんがたべられるから兵隊になるのではないのだ。また日本の海軍も、軍艦で世界見物をしようと思つて水兵になるのではないのだ。日本人は、兵隊も銃後の國民も、一人一人が日本の國と、アジアを背負つて立つ覺悟がしつかりと出來てゐるから、英米なんぞの國が、たばになつて來たつて負けやし

ないのだ。僕一人だつて、英米の兵隊なんぞ、いつでも組み伏せて見せるよ。』

『ほんたうか正夫。では、英米の爆撃機が、いま君の頭上から爆彈を落さうとしたらどうする。君は鐵砲を持つてゐないから困るだらう。』

『困るものか。石を投げつけて、英米機ぐらゐたたき落してやる。』

『ようし、石を投げつけるのなら、僕らも手傳ふぞ、なあブラニイ。』

『手傳ふとも。ああ、早く來い來い、正夫の國の兵隊、神の國の兵隊よ。』

話なかばに「どいた、どいた」といふ聲がきこえて來たので、正夫たちは半身を起すと、その前を四人のインド人が、大きな朱ぬりの鳥かごをかついで通りかかるところで、中には一羽の白くじやくが、目のさめるやうな美しい羽を廣々とひろげてゐるのでありました。

『をぢさん、どこへつれて行くの。』

と、正夫が聞くと、

『うん、支那の動物園に買はれたのだ。』

『うん、支那の動物園に買はれたのだ。』

と、答へながら、すたすたとかついで行くのでありました。

くじやくは、まつ白い羽をますます大きくひろげたまま、黒いはだかのインド人にかつがれて、椰子林の路を遠ざかつて行くのを、正夫たち四人は、美しく、かはいさうに見送つてゐたのであります。

『さあ、もう歸らうよ。』

と、レイが立ちあがつたとき、動物屋へまぎれこんで來た一匹の黑犬が、猛獸の聲にすつかりおびえきつた尻尾を股のあひだにまきこんで、類人猿のをりのかげから夢中で走り出て來たかと見るまに、いきなりレイの右足にかみついたのであります。

あまりにふいの出來事で、レイが悲鳴をあげてその顏を張りたほすと、黑犬は狂犬のやうに牙を向き出して、ふたたび、今立ちあがらうとしてゐた病後のスミスの頭上めがけて飛びかかつて來たのであります。

をりから一陣の冷風が、さつと周圍の椰子林に渡ると、にはかに山を越して來た驟雨が

動物屋の猛獸のをりと、狂犬に襲はれた四人をとりかこんで　ぽたりぽたりと、ガラス玉のやうな雨をたたきつけて來たのであります。

おたがひが自分を大事と逃げまはれば、誰かが疵を負ふに相違ありません。

正夫とレイとブラニイの三人は、とつさに一團となつて病後のスミスをうしろにまもると、力一ぱいのこぶしと、す足をふりあげて狂犬に立ちむかつたのであります。

をりからの豪雨は、雨と雨とが天空でかち合ふとどろきをあげながら、動物屋の草原に地ひびをたてて增しつのつて來ると、そのひびきはあたりの椰子林とゴム山にぐわうぐわうとこだまして、をりの猛獸たちは、その自然のたくましい風景に本性をそそのかされたのか、虎は虎、豹は豹、野象は野象のたけり聲を一段と加へて、豪雨とたたかひはじめたのであります。

狂犬は篠つく雨をつきやぶつて、血にうゑたやうな舌と牙とをむき出しに、又してもスミス目がけておそひかかつたので、いきなり正夫の右腕が、全身の力でそのあごをなぐり

ミス目がけておそひかかつたので、いきなり正夫の右腕が、全身の力でそのあごをなぐりかへしました。
黒犬はしぶきをあげて空中で一廻轉(くわいてん)すると、うしろの類人猿のをりにどすんとたたきつけられたのであります。
その背すぢを、類人猿ががつくりとをりの中から引つかむと、犬は悲鳴をしぼりあげて一片の背すぢの肉を類人猿の手の中に殘したまま、矢のやうに雨の中へ消え去つたのでありました。
しかし三人はなほも身がまへてゐましたが、やがて雨は瀧のやうなうしろすがたを陽(ひ)にかがやかせて、バナナ林をぬらしながら通りすぎたのであります。
『レイ、いたむだらう。』
と、正夫は、足の傷口をのぞいたのであります。
『うん、すこしいたむが、なんでもないよ。』
『すぐに僕の家へ行つて手當してもらはう。』

『大丈夫だよ正夫。もうすつかり雨に洗はれてしまつたもの。』
『でも狂犬病になると大變だから。』
『へいき、へいき、犬なんかに僕は負けないよ。あの虎でさへも、とつて來たのだもの。』
と、レイは赤くなつた傷をたたいて笑ふのでした。
スミスは、ずぶぬれになつた上衣をぬぐと、皆の手をにぎつて、サンキユウ、サンキユウといひながら、胸のポケットからハンケチをとり出して、雨にたたかれたレイの傷口を注意ぶかくしばりつけたのであります。

15

マライ半島行の列車は陽にかがやきながら、薪をたくむらさきの煙をあげて、椰子林の中をひた走つてゐました。
赤道直下は、りつぱな晴天の朝であります。

赤道直下は、りつぱな晴天の朝であります。

客車の内には、ジャワ人、アンナン人、スマトラ人などの國違ひの人々が、その國々の服装をして、自分の國々の言葉で話しあつて混雑してゐました。

その一隅に、正夫はレイとならび、スミスはスミスのお父さんにもたれて、四人は向ひ合つて腰をおろしてゐたのであります。

スミスが全快したお祝ひやら、スミスを狂犬からすくつてくれたお禮などを兼ねて、彼のお父さんが三人の少年をつれて、バトパハといふマライ半島の小さな町へ、鰐狩りに行くのでありました。

車内には散らかつたバナナの皮の匂ひや、黒い肌、黄色い肌のにほひにまじつて、口中からはき出されるカレーのにほひや、にんにくのにほひが滿ちて、人々は一様にひたいから流れ出る汗をふいてゐるのでした。

そのなかでスミスのお父さんが、ふと正夫にたづねたのであります。

『正夫君、君はこの東洋のシンガポールが、いつ頃からイギリスの島になつたか、それを

しらべたことがありますか。』

『はい、しらべました。』

『それはえらいな。』

『自分が住んでゐる所ですから、その土地の歴史や地理を知つてゐなければいけないと思つたからです。』

『さうです。それくらゐの心がけがなければ、アジアの人から尊敬されてゐる日本少年としての資格はありません。スミスはシンガポールへ來ると、すぐに病氣になつてしまつたので、まだシンガポールのことをよく知らないやうですから、一つ話してやつてくれませんか。』

正夫は自分がしらべたことや、父母からきいたことなどをどんな順序で話したらよいかを、靜かに考へてから口を開いたのであります。

『シンガポール島は面積およそ五七〇平方キロで、周圍は七十二哩といひますから日本で

『シンガポール島は面積およそ五七〇平方キロで、周圍は七十二哩といひますから日本でいへば佐渡ケ島か琵琶湖ぐらゐの大きさです。

このアジアの小さな島シンガポールが、いつ、どうして遠いヨーロッパのイギリスのものになつたかといひますと、今から百二十二年前、日本ではちやうど仁孝天皇の御代に、イギリスのスタンフオード・ラツフルスといふ役人が、その當時の島の持主であつたマライ島のジヨホールの王樣から、六十五萬ドルで買ひとつたものなのです。

その頃のシンガポールの人口は、たつた百五十人ほどで、それも椰子の密林から沖をとほる舟をうかがつてゐた海賊どもの住家であつた恐ろしい島で、ラツフルスが書いたものを父から讀んでもらひますと、こんなふうに書いてあるさうです。

（海岸いつたいは人の骨や、しやりかうべが散らかつてゐて、足のふみ場もないほどである。）

これは海賊どもに襲はれた、あはれな人たちの最期のすがたであつたのだらうと私は思ひます。

その海賊の島シンガポールが、今では人口七十一萬、しかも東洋と、西洋と、南洋の交叉點といつてもよいくらゐな、イギリスにとつては重要な場所になつて、東洋第一の都會とも、いはれる港になつてしまつたのです。

シンガポールとは、土地の言葉でシンガプラといつて、ライオンの島といふことなのです。ですからシンガポール市のマーク、紋章は、一本の椰子の木の下に、一頭の獅子が尻尾をSの字形に卷きあげてゐるところの圖なのです。』

『產物は。』

と、すかさずスミスが問ひました。

『ゴムです。しかし南洋一帶からとれる、ゴムでも、錫でも、石油、マンガン、その他あらゆる物產の集散地になつてゐるのがシンガポールです。』

『ありがたう。大體のことがよくわかりました。』

列車は、なほも密林の奥へ奥へとつき進んで、やがてクラアンといふ停車場へつきまし

列車は、なほも密林の奥へ奥へとつき進んで、やがてクラアンといふ停車場へつきました。

四人はここで汽車をおりて、自動車で密林の中の一本道をバトパハ町へ向かつたのであります。

16

バトパハ川の上流は大森林でおほはれて、正夫たちを乗せた小さな發動機船は、ポンポンと煙を輪に吹きながら、その中をさかのぼつて行きました。のぼるにつれて、樹木のすべては大建築の柱のやうにどつしりと太くそびえて、數十メートルの頭上で枝と枝とを入交へると、太陽の光りをさへぎつたまま、そこから葛かづらの類を網のやうにたらして、晝なほ暗く靜まりかへつてゐるのでした。ことに兩岸におひ茂つた紅樹の枝は、鈴なりの果實をつけて、その果實のことごとくは枝についたまま芽をふいて、根をのばしてゐるといふ、赤道直下のたくましい成長ぶりを示してゐるのであります。

その上を野猿の群がキキ、キキと叫びながら、枝から枝へとびうつるたびに、數十種の木々の花粉が、白く或ひは黄色くちらちらと粉はみがきのやうに、船の中へ散りかかつて來るのを、皆はうつとりとながめながら川上へのぼつたのであります。

ケンコン、ホロロン……

ケンコン、ホロロン……

どこからか、するどい鳥のなきごゑがあたりの密林にこだまして、川は音もなくひつそりと流れてゐます。

そのとき、ふいにレイが銃をとつて叫んだのであります。

『ゐたゐた、鰐だ、鰐だ。』

正夫もスミスも、スミスのお父さんも、はつと銃をかまへてレイが指す方向を見つめると、左のどろ岸に大小數十疋の鰐が、朽ちたふれた巨木のかげに、うようよと背中をほしてゐるのでした。

てゐるのでした。

しかもそのうちの一疋の大鰐は、のつそりのつそりと、船をにらみながら川の方へ歩みよつて來るので、はじめてまつ正面から鰐を見た一同は大あわてにあわてて、いきなり、ドドン、パンパンと一せいに火ぶたをきつたのであります。

『しまつたあ。』

『耳を撃て耳を。』

『急所は耳だ、耳だ。』

『だめだ、だめだ。大きな奴は散彈ではだめだ。實彈で撃て撃て。』

川幅はせまく、鰐は一樣に首をあげて向かつて來るので、立ちあがる者、彈をつめかへる者、マライ語、英語、日本語の叫びで、船内は大さわぎであります。

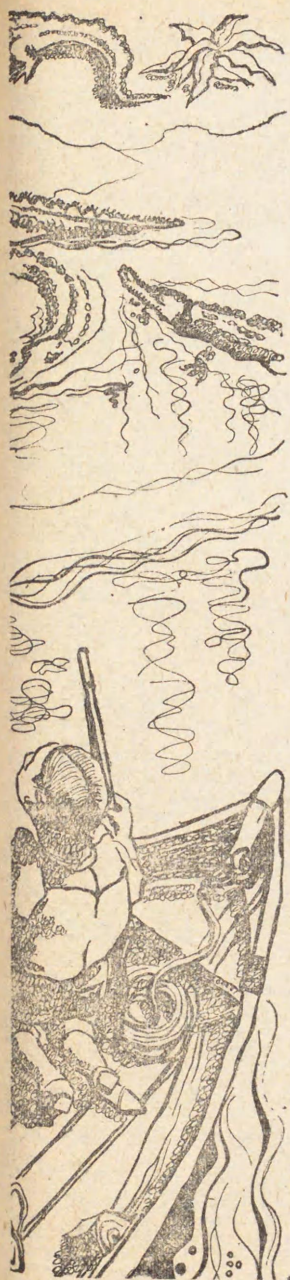
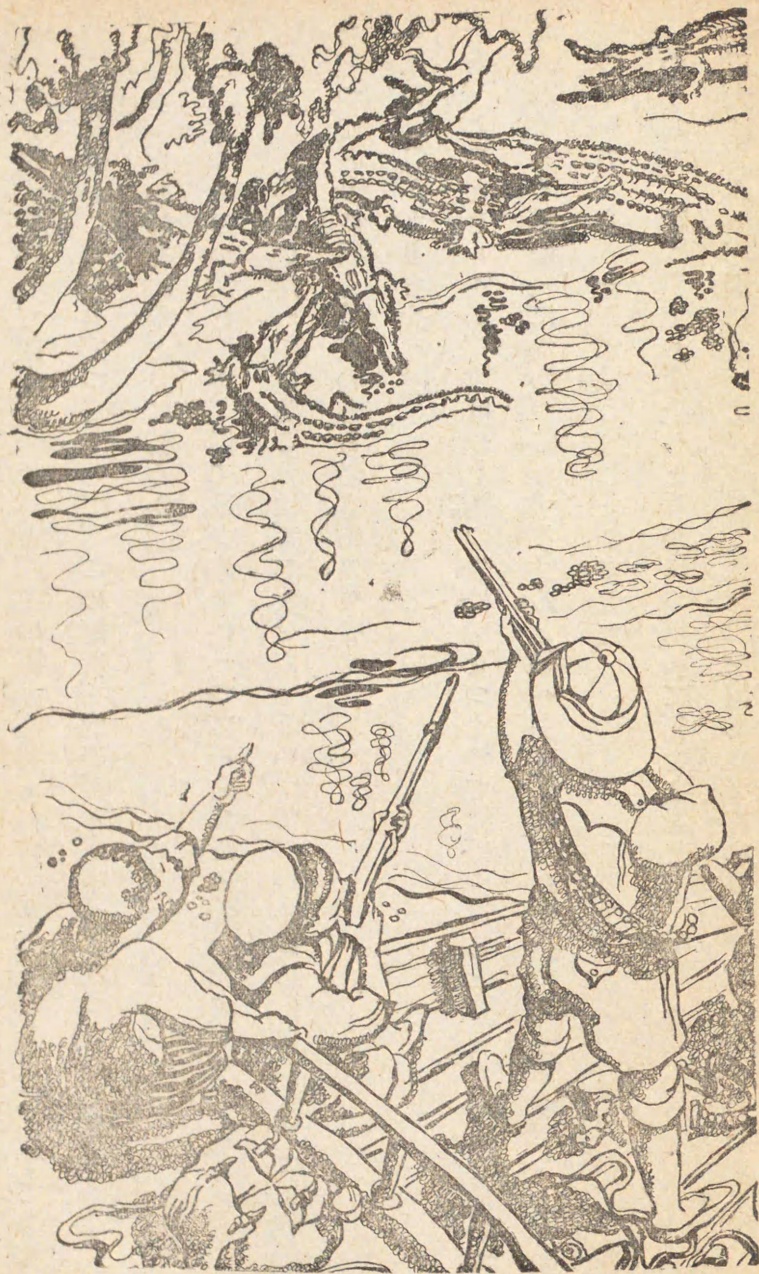
正夫は、はずむ心をおさへて、右足をしつかりと腰の下にしくと、左足の片ひざを立ててそこに銃をかまへ、ズドンと一發ねらひをつけてひきがねを引いたのであります。

ぱつと、一疋の小鰐が泥土を尻尾で蹴あげて、一メートルもはね上つたかと見るまに、

まつ白い腹を見せて、ぴしやりつとひつくりかへつたのでした。

つづいてレイが打ちこんだ一彈も、他の小鰐をあふむけに撃ちたふしたのであります。

ほかの鰐どもは、この有様にわれがちに水中にもぐりこむところを、スミスのお父さんが撃つた彈は大鰐の前あしにあたつたので、鰐は強い尾ではねまはると泥を八方にはねとばしながら、これもたちまち川底へにげこんだのでありました。

皆の白服も、レイのシヤツ一枚のすがたも、そのために、頭から足のつまさきまで泥まみれであります。そのとき、誰かが、も一度あわててにごつた川の中へ一發うちこんだの

で、四人は大笑ひして顏を見合せると、その眼も、鼻も、すつかり泥だらけになつてゐるので、皆はおこつたり笑つたりして、この鰐(わに)め、鰐め、と水中へどなつたのであります。

『さて、あの鰐を誰がとりに行くか。』

と、スミスのお父さんが、岸にひつくりかへつてゐる二疋(ひき)の鰐を指さしました。

船を、どろ深い岸へつけることはできません。といつて、いま鰐の群れがにげこんだ川を渡つてとりに行く勇氣のある者もありません。

『はい、私がとりませう。』

と、このときレイが、すばやく綱(つな)の先に輪をつくつて投げつけると、それが上を向いてたふれてゐる鰐の足にかかつて、ずるずると船へ引きよせられたのであります。

つづいて、もう一疋がはこばれたのでした。

かうして、船は川上へ川上へと靜かにのぼつて行きました。

正夫は、ふと、別れたブラニイのことを思ひ出したのであります。

正夫は、ふと、別れたブラニイのことを思ひ出したのであります。

『レイ。ブラニイはお父さんといつしよに、このマライ半島のどこで鰐をさがしてゐるのだらうね。』

『ああ、ほんたうだ。この鰐をブラニイにくれてやつたら、どんなに喜ぶだらう。』

『ここは、鰐の多い川ださうだから、もしかすると、どこかでブラニイにあへるかも知れないぞ。』

『それではこの鰐の皮をはいで、おみやげにこしらへておかうよ。』

『さうだ、それがいい。』

スミスのお父さんたちも、正夫からかはいさうなブラニイの話をきいて、さつそく鰐の皮をはぐことにきめたのでありました。

レイが、腰にしばりつけた黒い山刀を引き抜いて、鰐の腹にあてました。

するすると皮はむかれて、にはとりのやうな黄色いあぶらをもつたまつ白な肉が、あざやかに走る山刀の下からあらはれて來たのであります。

川は、ひとところ急に大きくひらけて、兩岸には繪具箱から飛び出したやうな小鳥が、色とりどり、聲さまざまに鳴きかはして、マライ半島のま晝は大昔のやうな靜けさであります。皆は耳をかたむけて腕をくむと、眼をうつとりとさせて自然の美しさに心を打たれてゐたのでした。

『さあ、あそこの岸へつけて、一休みしようではないか。』

と、スミスのお父さんがいつて、船は川の流れについて曲つたとき、冷えた密林の中へどこからか、ぐわうぐわうといふ異樣なひびきにまじつて、さつと熱風が吹きこんで來たのでありました。

『なんだらう、この風は。』

『なんだらう、あの物音は。』

と、皆は岸へつくと、ねむり草が一面にはびこつた丘を、不安な思ひにかられてかけのぼつたのであります。

そして頂上についたとき、四人はあつと聲をあげたまま、見る見るうちに顔色をかへて、全身をがくがくとふるはせたのでした。

眼下(かんか)の大森林からまきおこつた山火事が、見わたすかぎり天に火焔(ほのほ)を吹きあげて、恐ろしい勢ひでせまつてくるのでありました。

17

日一日と、イギリスやアメリカにとつて恐ろしく感じられて來るのは、日本でありました。

全世界に、いま日の出のやうないきほひで、國の光りをかがやかせてきた日本を眺めたとき、イギリスとアメリカとは、青くふるへるひたひをつき合せて、幾回も相談を重ねたのであります。何としても、今のうちに日本をたたきつぶしておかなければ、東洋人のために、一億の日本人が立ちあがる日がくるにちがひない。その場合吾々は、永い年月の間

東洋からうばつてゐたいろいろな寶を殘して、船に帆あげて本國へにげかへるやうなことにぶつかるかもしれない。これは大變なことである。今のうちに日本をいぢめつくして、手も足も出ないやうにしてくれようと、この兩國はしめし合せて、わが國が必要とする鐵やゴムや、その他のすべての物をおさへて、ぐづぐづ申すならこれだぞとばかりに、武器をならべておどかしたのであります。

靜かな英領マライの密林にも、ざんがうは掘られました。鐵條網はめぐらされて、トーチカはつくられました。

飛行場からは絶えず發着する戰鬪機が、ぐわうぐわうと、つばさをひるがへしてゐました。その炎天の下で演習のために撃ち鳴らす砲兵隊の大砲のひびきは、晝も夜もいんいんとこだまして、あたりの椰子林を震はせてゐました。歩兵部隊はそのどよめきの中を、濕地帶から濕地帶をぬつて突撃をくりかへしながら、赤道直下の住民たちにイギリスのすばらしさを示してゐたのであります。

らしさを示してゐたのであります。

『日本兵などは、一歩たりともマライの地にはよせつけない。』

『これだけの備へがあれば、まづ充分である。』

兵隊たちは、汗とほこりによごれた軍服をバナナ林の幹にひつかけて、演習づかれの身體をしめつぽいしだ類に投げかけたのです。

そのとき一陣の熱風が、ぐわうぐわうといふひびきをともなつて、吹きまくつて來たので、兵隊たちは、はつと天をあふぐと、その顔に黑けむりが火焔をまきあげておそひかかつて來たのでした。

『なんだ、なんだ、これは。わあ、火事だ、火事だあ、山火事だあ。』

『山火事だぞ、山火事だぞう。』

あまりにもふいの出來事に、色を失つた兵隊たちは大砲も軍服も放り出したまま、トーチカににげこむ者、火焔に巻かれる者、川にとびこむ者などが叫びをあげて八方に亂れちる有様が、正夫たちがかけのぼつた丘から眞下に眺められたとき、スミスのお父さんは病

後のスミスの手をひつつかむが早いか、これも腰を拔かすやうな叫びを一聲あげると、丘をかけおりたのでありました。

『みんな、にげるんだあ。』

正夫とレイは、むちゆうで手を引きあつてそのあとから走ると、野猿の群れが一團となつて悲鳴をあげながら、頭上の枝から枝を煙に追はれてにげてくるのでありました。

それと同時に、晝なほ暗い密林の葉かげにひそんでゐた、大小數萬の蟲けらが一樣にとび立つて、かすみのやうににげる中を四人は、左右の手でそれをたたきはらひながら、一氣に發動機船まで走りつくと、川上の火はすでに川を越して、火玉となつた木の葉が兩岸から頭上に降りかかつて來るのでありました。

『船に火がつくぞう。』

『服をぬげえ。水びたしにしてたたき消すんだ。』

『シヤツもぬいで振りまはせえ。』

『シャツもぬいで振りまはせえ。』

正夫たちは服とシャツをぬぐと川につけて、上半身をまつぱだかにしたままそれを振りかざして、船内に散りかかる火の粉とたたかひはじめたのであります。そのうちに、火は丘にもえひろがつて、その向からうで兵舍の火藥でも爆發するのか物すごいとどろきが、天地をゆすぶりかへしはじめました。

『とてもだめだ。船をすてて森から森へにげるんだあ。』

今は全力をつくして、聲もなく火の粉とたたかつてゐる少年たちに、スミスのお父さんは氣狂ひのやうな聲をしぼりあげると、船は川下へ矢のやうにつつ走つて、たたきつけるほどのいきほひで左岸にぶつかつたのであります。

四人はそのいきほひで船底にひつくりかへると、無我夢中ではねおきて船からとびおるが早いか、密林の中へにげこんだのでした。

『レイ、大變だあ、鰐（わに）の皮を忘れた。』

と、正夫が足をとめたのであります。

『さうだ。ブラニイにやる皮だ。』

レイはあわてて船に引きかへしながら、なほも叫んだのでした。

『正夫、リユクサツクと鐵砲を持つたかあ。』

『あ、しまつた。』

船は艫の方から、すでに大蛇の舌のやうな火焰を、チロチロと這はせてゐるのでした。

二人はそれをとび越えて乘りうつると、レイは汗みどろのせなかに二枚の鰐の皮をしよつて船からとび出して來たのでした。つづいて正夫がリユクサツクと銃をひつかついで船べりからとびおりると、二人は、ふたたび森ににげこんだのであります。

太陽は天をおほふ黑煙のために白くかすんで、その中を蝙蝠と蝶の大群が熱風にまかれながら、正夫たちを追ひこして行つたのでした。

スミスとスミスのお父さんは、どこへにげこんだのか、密林のために、もうわかりません。

ふと氣がつくと、今度は正夫のすがたが見えないので、レイは青くなつて五十メートルほども引きかへすと、地にはつた蔦かづらに足をからませた正夫が、しげみの中にもがきまはつてゐるのでありました。

『正夫、正夫、大丈夫かあ。』

『大丈夫だ。足と手がからまつてゐるんだ。』

『ようし、こいつめ。』

レイは腰の山刀を引きぬくと、針金のやうな藤づるをたたき切つたのであります。

『正夫、スミスが見えないのだ。』

『お父さんといつしよだから大丈夫だらう。かうなつたら二人でどこまでもにげるんだ。』

『さうだ。にげなきやだめだあ。こんどは首をしめられるから氣をつけろ。』

『あ、ほんたうだ。』

―無數の葛類がどの枝からも綱のやうにたれさがつて、火焰はぐわうぐわうとうしろにせ

まつてゐるのでした。

このとき、とつぜん地ひびきといつしよに、みしみしと樹木の折りたふされる音がしたので、ひよいと正夫が振りむくと、大きなけだものの皮膚が木の間がくれに、ちらりちらりと見えて、何かたくましいうなり聲がおしよせてくるのでありました。

『レイ、何かうしろから出て來たぞ。』

『なんだ、なんだ、正夫。』

『猛獸だあ。』

『うわあ――。』

死物ぐるひで走りぬいた二人の行く手に、どろんとにごつた廣い川が、水をたたへてあらはれたのであります。

『レイ、とびこんで、向かう岸までおよぐんだ。』

正夫は叫びながら、川岸に折り重なつて倒れてゐる朽ちた大木をけると、とくいの面か

正夫は叫びながら、川岸に折り重なつて倒れてゐる朽ちた大木をけると、とくいの面か

ぶりでおよぎはじめたのであります。

遠くの山々は海のやうに晴れわたつてゐるのに、頭上には天に立ちのぼる火焔と黒煙が、うづをまきながらむくむくと入道雲となつてゐます。

鸚鵡の列がするどい聲をそろへて、その雲を横切り、川を越してのがれて行きました。

どこでどうぬげたのか、正夫の兩足には靴がなく、ひりひりと足の裏が痛んで、せなかには、びつしよりとぬれたリユクサツクと鐵砲が、くひつくやうに乘つてゐて、向かう岸は次第に近づいてくるのでありました。

『レイ、もう大丈夫だ。でも向かう岸に火がついたなら、この川のまん中でもぐつてゐれば助かるぞ。』

『――。』

『もう大丈夫だよ。』

『――。』

『レイ、レイ、ぐわんばるんだぞ、しつかり。』

と、どなりつけるやうにふりむくと、レイのすがたはなく、紅樹（マングローブ）の實が二つ三つ、ひつそりとうしろにゆれてゐるばかりであります。

『レイ、レイ、レイ。』

棒立ちになつた正夫は、やにはに水中にもぐりこむと、兩手を振りまはしてレイを求めたのですが、手にふれるものは紅樹（マングローブ）の長くのびた根が冷え冷えと指にまつはるばかりで、親友のすがたはありません。

『レイ、レイ、レイ。』

ふたたび浮きあがつて、もしやと、はるかな火焔の下に眼をやると、今は絶望の兩手を頭上にかかげたレイが、ひよろひよろと水ぎはをかけまはつてゐる姿が、眼に入つたのでありました。

ああ、レイはおよぎを知らなかつたのだと、正夫は胸がにえかへる思ひで、水をけり

ああ、レイはおよぎを知らなかつたのだと、正夫は胸がにえかへる思ひで、水をけり水をかき、夢中でおよぎかへしたのであります。

『今行くぞう、今行くぞう、レイ。』

をりから火に追はれた野象の群が、二頭、三頭、五頭と、親象は子象をかばひながら、レイのうしろから、びんらう樹をけたふしてあらはれたのであります。

『ああ、象が出たあ。』

正夫が叫ぶその聲がきこえたのか、それとも象の足音に驚いたのか、レイはふりかへるなり一頭の大象をまともに見つめたまま、いきなり頭をかかへると、水ぎはにどつとうち倒れたのであります。

のつそり、のつそりと、親象は二頭の子象をしたがへて、レイの身近にせまつて來たのでした。

ばうぜんとした正夫は、氣を失ふやうに水中に沈むと、ぶくぶくと二三回水をのんだので、あわてて氣をとりなほして浮かびあがると、レイの小さな身體は大象の鼻のさきにくる

くるとまきあげられて、象はそのまま川を渡つてくるのでありました。

常夏の國の天候は、にはかに變りやすく、をりから竹を引きさくやうなとどろきが、椰子林の上空に走つたかと見るまに、川上の黑煙の中に大雷雨がおそつて來ました。

レイの後に、えんえんと天をこがして燃えさかる火焰は、たちまちおしよせた大瀧のやうな雨におされて横にひろがると、火ぐるみの龍が火玉をとつてあばれまはるやうに、暗

い密林中に燃えひろがつたのであります。その火焔がふたたび密林でいきほひを増すと、豪雨を龍巻のやうに吹きあげたので、焔はどこまでも天高く、深紅の色にそめかへりながら、今度はさらにはげしく雷鳴をともなつて、二度三度おそひかかるので、火焔はうづをまきながら地にはひ、また吹きあがるのでありました。

マライの天地は、自然のたくましいたたかひの中にぐわうぐわうととどろきかへつて、かべのやうに閉ざした豪雨のために、もはや象も、レイのすがたも、見ることはできません。正夫の周圍にあるものは、全身を水中におしつけようとする銀板のやうな重い雨と、顔面を打ちかへす水しぶきで、その向かうに、たくましいうなりをあげた、まつ赤なひろがりがただかすんでゐるばかりであります。

『レーイ、レーイ――。』

正夫は水火のたたかひに負けまいと、聲をしぼりあげて、そのとどろきと、まつ赤なひろがりの中に水をけつたのであります。

ずどーん――

またも爆發する火藥が、雷雨のなかにひびきわたると、火柱となつた樹木が正夫の前後に、雨を切つて降りかかつて來たのでした。

進むも、しりぞくも、もはや正夫には動きがとれないのであります。

火柱となつた樹木は、しきりに豪雨をつきやぶつて、飛びかかつてくるので、幾回も水中にもぐりこんで避けてゐるうちに、やにはに針でついたほどの青空があらはれたかと見るまに、たちまち豪雨を引きさくやうな晴天に變つたのであります。

見たこともない燒野原がふいに眼の前にあらはれて、千古からの密林は、川上から丘一たいにかけて、今は黑こげの幹を數本、棒ぐひのやうにつつ立たせたまま、白煙の中に、

音もなくをさまりかへつてゐるのでありました。

正夫はその煙の中を、狂ふやうな眼(まな)ざしでさがし求めたのですが、レイのすがたを見ることはできません。ふとふりむくと、いつのまに渡りきつたものか、四五頭の大象が二頭の小象をかこんで、しかもそのうちの一頭はレイを背にまきあげたまま、對岸の紅樹(マングローブ)のかげを、のつそり、のつそりと歩いてゐるのでありました。

レイのはだかの手足が、その背にあふむけになつたまま陽(ひ)にかがやいて、肩にしばつた鰐(わに)の皮がほどけて、象の大きな耳のわきにだらりつとゆれてゐるのを見ると、正夫はまた全力をつくしておよぎかへしたのであります。

象の群れは、茂りに茂つたパンの大木の下まで來ると輪になつて、しばらく小象を鼻の先でなでまはしてゐましたが、やがてレイを乘せた象は、鼻の先に高々とレイをまきあげると、靜かに川岸におろしたのであります。そして水中に長い鼻をつつこむと、その先からレイの全身に水を吹きかけたのですが、レイは、死んだやうに動きません。

象は、鼻の先を地につけると、二三回ごろごろとレイをころがしたのであります。

鸚鵡の列がするどい聲をかけあつて、川をわたり、廣い燒原を越して歸つて行くその向かうに、あざやかな色で、浮き出すやうにもう虹がかかつたのでした。

正夫は息をころしたまま、岸近くまでおよぎついた水面に顔を出して、じつとレイを見まもつてゐると、レイの手足が、かすかに動きはじめたのでありました。

象は、しばらくそれをながめてから、心地よささうに鼻と耳を、虹に向かつて一と振りすると、小象を中にして、一列にうしろの密林へすがたを消したのでありました。

よたよたと半身をおこしたレイは、ぼんやりと口をひらいたまま、うつろな眼つきで遠くの方をながめてゐるところを、岸にはひあがつた正夫が、その背中をはげしくたたいて叫んだのであります。

『レイ、レイ、しつかりしろ。僕だ、僕だよ。』

『おお正夫か。』

『おお正夫か。』

『象が、象が、君を助けてくれたのだよ。』

『僕は、象にふみつぶされてしまつたんだ。』

『何をいつてゐるんだ。レイ、君は生きてゐるんだ。象が君を背中に乗せて、向から岸からここまでにげてくれたのだよ。』

『僕は生きてゐるのか。』

『さうだ。けがもしてゐないのだ。』

『山火事は、どうしたらう。』

『消えたよ。あのとほりだ。』

と、正夫が指さす向から岸には、まだ白煙がこげくさいゴム樹の臭ひを、しきりにただよはせてゐるのでありました。

『スミスたちは、どうしたらうね、レイ。』

『さうだ。さがしに行かなければいけない。』

『立てるかい。』

『ああ、大丈夫だとも。』

と、立ちあがらうとするレイの手を正夫がつかむと、大變な熱で、レイは、へたへたとそのますわりこんでしまつたのであります。

『レイ、とてもひどい熱だ。』

『すこし、氣持ちがわるいんだ。』

『よし、ここで寢てゐたまへ。どしどし水で冷やしてやる。』

レイは、パンの木かげにあふむけにひつくりかへると、熱にうるんだ眼で、たわわに實つた大きなパンの實を力なくながめたまま、かさかさと風にひるがへる葉づれの音をきいてゐたのでした。

正夫は腰のタオルを川にひたして、幾回もレイの頭を冷やしたのですが、熱はとてもさがりさうもありません。どうしたらよいのかと思ふと、ただただ、聲のかぎりに天に向か

がりさうもありません。どうしたらよいのかと思ふと、ただただ、聲のかぎりに天に向かつて、スミス親子の名を呼んだのでありました。

『おーい。スミス――スミス――。』

しかしその聲は、川の面に遠くひつそりとひびきかへるばかりで、スミス親子の返事はありません。

『レイ、苦しいだらう。』

『心配するな正夫。ここへ穴を掘つて、僕をうめてくれないか。』

『なぜだ。』

『熱のあるときは、土にうづまつて首だけ出してゐればなほつてしまふものだ。』

『そんなことをして、いいのか。』

『いいとも。』

『鰐(わに)が、ここまであがつて來ないだらうか。』

『こんな乾(かわ)いたところへ、やつて來るものか。鰐はじめじめとした場所へ、あがつて來る

ものだ。』

土の中に人間をうめて、この高熱がほんたうになほるものだらうか。それよりもはやく人を呼んで手當をしなければならないと、正夫は考へたのであります。

『さうだ、レイ、ちよつと待つててくれ。向かう岸までおよいで、僕はイギリスの兵隊を呼んでくる。』

『正夫、待つてくれ。昔々から、インド人が、イギリス人に救はれたためしは、一ぺんだつてありやしない。それに君は日本人ぢやないか。こんな密林で君を見つけたら、兵隊たちは何をするかわかりやしない。スパイ扱ひにしてしまふ。』

『ああ、それもさうだ。』

と、正夫は腕をくんだのであります。

いま祖國では、來栖大使をアメリカに渡らせて、東洋平和のために、靜かに話をすすめてゐるのであります。しかし、アメリカはイギリスとともに、日本を見くびつて、がうま

てゐるのであります。しかし、アメリカはイギリスとともに、日本を見くびつて、がうまん無禮きはまる問題をつきつけてゐるので、禮儀ただしい日本が、こらへにこらへてゐた堪忍袋の緒を切つたら最後、戦ひはただちに開始されることは明らかなことであります。

正夫は、つひに方法もないので、レイの腰から山刀をはづすと、およぎつかれた腕に力をこめて、羊歯と、ねむり草が一面にはびこつた赤土を、一心に掘りはじめたのでありました。

レイが、ひよろひよろと立ちあがつて、土をはこび出したので、正夫は驚いてどなつたのであります。

『レイ、君は寝てゐるんだ。』

『僕のためにしてくれることを、僕がだまつて見てゐられるか。』

『君を早くなほすために僕は掘つてゐるのだ。動いたら熱があがるぢやないか。』

『君だつて、ずゐぶんつかれてゐるだらう。』

『つかれてなんかゐるものか。寝てゐろ、寝てゐろ。』

『そんなことできるもんか。』

『何を。』
『何を。』
『寢てゐるんだ。』
『できない。』
二人は、しばらくにらみ合つてゐるうちに、レイはぽろぽろと涙を流したのであります。
『正夫、ありがたう。僕はこんなに、こんなに泣けてくる。』
『つかれてなんかゐるものか。つかれてなんかゐるものか。』
穴はしだいに大きくなり、正夫のはく息が靜かな大氣のなかに、はーはーときこえるのでありました。

18

熱帶(ねつたい)の夕方は、たちまち夜になつてしまふ。

熱帯の夕方は、たちまち夜になつてしまふ。

密林に、まつすぐ、太陽が落ちたかと見るまに、冷え冷えとした風が、さつと渡ると、もう空一面は、むらさきの大星小星にかざられてゐるのでした。

數百萬の螢は、川の面に長々と枝葉をのばした大木の一枝一枝に、ぎつしりとむらがつて、川上へ、川下へと、見わたすかぎりえんえんと青白い光を明滅させて、正夫は、その下でレイの看護につとめたのであります。

レイは、土から首を出したまま、こんこんとねむりつづけて、螢が明滅するたびに、その首は、ときに青く、ときに黒く風の中にさらされてゐるのを、正夫は、しきりにいたはつたのでありますが、とても熱はさがりさうもありません。

ああこの親友を、どんな方法でシンガポールまでつれて帰つたらよいのだらう。それよりも、いつたいバトパハ町はどの方向であらうかとあふぐ空に、南十字星がひとときは輝きを増してゐるばかりであります。

正夫は、レイの前にすわりこむと、その足首にこほろぎがはひあがつて、きりきりきり

きりと鳴きはじめたのであります。

それにつれられて、前後左右から、ころころ、ちろちろと地蟲の音がわきあがつてくると、正夫はさびしさにたへかねて、シンガポールの明るいわが家を思ひ出したのでありました。

そこには夕飯をたのしくすませた兩親が、さわやかな夜の茶の間で、日本のお茶をやさしくくみかはしながら、自分のうはさ話をつづけてゐる靜かな有様が、眼に浮かんで來たのでした。

『正夫にも、鰐が、うまく撃てましたでせうか。』

『さあ、あいつは、水におぼれた者におぶさつて歸つて來るやうな臆病者だから、とても撃てまい。それに、はじめて鰐を見るのだから、恐ろしくて、ふるへあがつてゐることだらう。』

『まさか、そんなこともありませんでせうが。』

『まさか、そんなこともありませんでせうが。』
『いや、それにちがひない。私なら、どんな大きな鰐が來やうとも、ただの一發で、ずどんとしとめて見せるのだがね。』
『おやおや、またお父さんのごじまんがはじまりましたこと。でも正夫は、もう夕飯をすませたでせうね。』
『それはすんだらう。たぶんバトバハ町の小さなホテルで、スミスさんたちと元氣よく、今日の手がら話や失敗談をくりかへしながら、今頃は、すきつ腹にどつさり、ごちそうをいただいてゐるかも知れない。』
ああそんな會話さへも、正夫の耳にはきこえてくるのでありました。
しかし、見わたせば、どこまでも青白く川をそめかへした螢の大群がつづくばかりで、うしろには、巨木が怪物のやうな黒い幹をならべて、頭上から手をかざすやうに、ぶきみな枝をさしのべてゐるのです。
夜ぜみの聲が、ミンミンと、ジイジイと、その闇(やみ)の密林から、一せいにわきあがつて來

ると、對岸の燒けあとに殘つた、棒ぐひのやうな椰子の横に、細い月が浮かんだのであります。

正夫は、しみじみとした心で、かたはらの熊笹の葉を四五枚ちぎると、それで笹舟をつくつたのであります。そして、川岸にほしならべたリユクサツクの品々のなかから、手帳を引きさくと、それに幾枚も、かたかなで走り書きをしたのでありました。

コノ川上デ　コドモガ二人　ミチニマヨツテヰマス　ダレカキテクダサイ。

かな文字は、青白い螢の光にそまりながら、笹舟にゆられて、ゆらゆらと川下へと流れて行くのでありました。

正夫は、たよりなく思つて、ふとレイの名を呼ぶと、レイは力なく眼をひらいたのでした。

『レイ。今夜ひと晩ここで暮らさう。あしたはスミスのお父さんか、それとも、だれかが

助けに來てくれるよ。氣分はどうだい。』

『氣持ちがわるい。』

『こまつたなあ。ごらんよ、二日月が出たよ。』

『ああ月が出たね。とても頭が重いよ。穴から出よう。』

と、レイは肩の土をゆりうごかして手を出したので、正夫が引つぱりあげると、いつのまにかその全身は氷のやうに冷えきつてゐるのでありました。

レイは、どろだらけのまま、しばらく心を失つたやうにつつ立つてゐましたが、いきなり、鰐(わに)の皮を引つかつぐと、ひよろ、ひよろと、密林の方へ歩き出したのであります。

正夫は、おどろいて叫んだのでした。

『レイ、どこへ行くんだ。』

『さあ、早く行かうよ、正夫。』

『どこへ、どこへだ。』

『どこへ、どこへだ。』

『僕の家は、この森の中にあるよ。』

『レイ、何をいつてるのだ。』

『あの夜ぜみの聲は、僕がうまれたセイロン島の家できく夜ぜみの聲にそつくりだよ。ああ、ものすごく鳴いてゐるな。あの家には、僕のおばあさんがゐる。おぢいさんがゐる。正夫、さあ早く來ないか。みんなが、ごちそうをつくつて待つてゐるよ。』

『レイ、どうしたんだ君、しつかりしてくれ。』

『いそげや、いそげ。』

『レイ、レイ。』

川岸の螢の光はとどかず、密林はまつくらやみであります。

その中を、レイは、ひよろ、ひよろと入つて行くので、正夫はうしろから全力をつくして羽交(はがひ)じめにしたのですが、レイもまた死物狂ひで進まうとするのであります。

やみの中で、もみ合ふ二人に、ほうほうと鳴きかはす梟(ふくろふ)の聲と、がさがさと何かが歩き

まはる氣配がそこここに滿ちて、ふみしめる足の裏には、べつとりと積もり積もつた落葉がからむのでありました。

正夫は、レイを引きづるやうに川べりまでつれもどると、レイは眼をつりあげて、齒ぐきをかつとひらいて、正夫に組みついてくるのでありました。

またもはげしいもみ合ひが川岸で行はれてゐるうちに、レイはいきなり自分ののどを兩手でかかへると、水だ、水だとさけんで、正夫のうしろにころがつてゐる水筒を、つづけざまに指さしたのであります。

正夫はしつかりとおさへつけてゐたレイの腰から腕をはなして、あわてて水筒の口をあけて飲ませようとすると、うばふやうにそれをとりあげたレイは、水筒の底を天にふりかぶるが早いか、流れ出る水をグビグビとあほつたかと見るまに、かつと噴水のやうにはき出してもがきまはつたのであります。

『苦しい、苦しい、のどが苦しい。』

『苦しい、苦しい、のどが苦しい。』

まゆをつりあげて、レイはしばらく水筒をじつとにらみすゑてゐましたが、またも、水水、と泣聲をしぼりあげて吸ひつくやうに水筒にかぢりつくと、ふたたび悲鳴をあげて水をふき出したのであります。その有様は、正夫が前々から父にきいてゐた恐水病といふおそろしい病氣にそつくりなので正夫は、今さらにびつくり仰天して、レイの身體にとりすがつたのでありました。

『レイ、しつかりしてくれ。しつかりしてくれ。』

恐水病といふのは、氣ちがひ犬にかまれるとその毒がしだいに全身にまはつて、のどがはげしくかわききるので、水を飲まうとしても咽喉がけいれんをおこして、どうしても水を飲むことができず、つひに一命をうしなつてしまふといふおそろしい病氣です。

いま見るレイの有様は、まさにそのとほりで、正夫の胸にいきなりよみがへつてきたのは、動物屋の原で大雷雨の日におそはれた猛犬のことでありました。

ああ、あのときに早く、レイの手當を父にうければよかつたがと、今はくちびるをかん

で悔(く)ひがすでにおそく、ただくるひまはるレイのうしろから、又も力のかぎりだきしめて大空をあふぐばかりであります。

二日月は眼にいたいほど細く浮かんで、流星が二つ三つ、むらさきの矢を射るやうに密林の中へ消えたのでした。そこには數知れないほどの夜ぜみの聲が、なほもミンミン、ジイジイとみちてゐるのであります。

ひつそりと立ちならんだ川岸の巨木(きよぼく)は、數千萬匹の螢のため、光の大木をならべたやうに、はるかな闇(やみ)の中にまで、青白くはてもなくつづいて、川魚がその光に銀の腹を見せながら、ぴしりつ、ぴしりつとはねあがるたびに、夜光蟲が青々とうづをまくのもひときはさびしく、正夫は全くとはうに暮れたのでありました。

ああ、蟬(せみ)は蟬どうし、さそひ合せて歌つてゐる。

ああ、螢は螢どうし、うつくしく熱帶の夜をかざり合つてゐる。

ああ、夜光蟲は夜光蟲どうし、水中にたはむれながら輪に舞つてゐる。

ああ、夜光蟲は夜光蟲どうし、水中にたはむれながら輪に舞つてゐる。

ああ、僕はどうしたらこの親友をすくひ出すことができるだらうかと、正夫が眼をうちつけるレイのせなかには、二疋の鰐の皮さへもが、いたはり合ふやうにかさなり垂れてゐることが、ひしひしと胸を打つてくるのでありました。

『水だあ、水だあ――。』

レイはまたしてもあばれ出すと、正夫の手をふりきつて、こんどは川岸からをどりこむや、がむしやらに水をすくつて口の中にたたきこんだのですが、そのたびに悲鳴をあげてくるひながら進むので、闇の流れはみだれて、夜光蟲がもえあがる燐のやうにかがやくのでありました。

『レイ、レイ、あぶない、あぶない。』

深みへ深みへと進むレイのうしろから、正夫も泣聲をあげてとびかかると、はずみをくつて、二人は流れのなかにざんぶと打ちたふれたのであります。

19

椰子は密林の夜風に鳴つてをりました。

その下に、椰子の葉葺の小屋が、やぐらづくりの丸太の上に、一つ小さく建てられてありました。

内にはうす暗いランプが黒々と油煙をはきながらつるされて、その下に、二人の親子がはだかのまま、しんみりと燒魚を前にして、手づかみで夕飯をたべてゐるのでした。

マライ半島へ鰐の皮をとりに行つたブラニイのお父さんと、ブラニイであります。

『ブラニイ、今日はすつかりえものをにがしてしまつたなあ。』

『だつてお父さん、あの大火事だもの。鰐だつてみんな底へにげこんで吸ひついたきり、出て來やしない。』

『全くすごい火事だつた。黒こげになつた烏や梟の子が、幾つも幾つも、眼の前にふきと

『全くすごい火事だつた。黒こげになつた烏や梟の子が、幾つも幾つも、眼の前にふきとんで來たにはおどろいた。』

『どかん、どかんと、大きな音がしたのは、あれ、なんでせう。』

『あれか、あれはたぶん、この川下でいつも演習してゐるイギリス兵も火に追はれて、火藥なんかが破裂した音だらう。』

『戰爭は、はじまるのかしら、お父さん。』

『はじまる。はじまるとも。今に東の方からきつと神の兵隊が來る。そして英米人なんぞこのマライ半島から、一人のこらずたたき出してしまふにちがひないのだ。』

『神の兵隊といふのは、みんながいふとほり、たしかに日本兵だらうか。』

『さうだ。マライ人の誰もがさう信じてゐる。』

『いつごろ來るだらう。』

『昔からの言ひ傳へでは、今年中に來ることになつてゐる。』

『今年中に――。』

『さうだ。』

『でも今年は、あと三月ぐらゐで終りますよ。』

『しかし、今年中にかならず來る。お父さんたちはお祖父さんの時代から、胸の中でこの年の來るのを待ちかぞへてゐたのだ。』

さういつたきりブラニィのお父さんは何か思ひにふけるらしく、じつと眼をとぢたまま御飯をかんでゐるのでした。ブラニィもまた、この大密林いつたいが戰場と化す日のものすごさを想像して、魚の骨を力一ぱいつついてゐるのでありました。

『そのときには、ブラニィ、お前は神の兵隊のために、少しでも役に立つしごとをしなければいけない。死んだお母さんにむくゆるために。私も、身をすてて働く。』

マッチ箱のやうな小屋をつつんで、戸外には地蟲の聲がリンリンとみちてゐます。その時、はたと一時に蟲の音がとだえたかと思ふと、ふいに、人の足音がひたひたと近よつて來たのでした。

來たのでした。

二人は思はず、いきの音をころして耳をそば立てたのであります。

『なんでせう、お父さん。』

『こんな場所へ人が來るわけはないが。』

ミシミシと丸太づくりのはしごが鳴つて、

『こんばんは。もしもし、こんばんは。』

と、英語の聲がのぼつて來たのでした。

いきなり入口のむしろ戸があけられて、見れば、肩もズボンもどろまみれにちぎれた白服を身につけた白人の男が一人、鐵砲を杖に子供を背負つてあらはれたのであります。

『誰です、あなたは。』

と、ブラニイの父は、けはしくたづねたのであります。

『山火事に追はれて、道にまよつた者です。この子がすつかりつかれきつてゐるので、一晩とめてくれませんか。それに子供がまだ二人行方不明になつてゐるので、私はこれから

すぐにさがしに行かねばなりません。』
『とにかくおはいりなさい。』
『ありがたう。』
白人はたふれるやうに背なかの子供をおろすと、ぐつたりとしたその子と、ブラニイの眼とがふとかち合つたせつな、二人は思はず聲をあげたのでありました。
『おお、ブラニイぢやないか。』
『おお、スミスぢやないか。』
ことの意外さに、父親たちは眼をまるくしてたづねたのであります。
『お前たちは知り合ひなのか。』
『さうです、お父さん。』
と、ブラニイはスミスのそばに走りよつていたはると、正夫の家で二人は知り合つて動物屋へ行つたことや、そこでスミスが狂犬におそはれて、正夫やレイといつしよにふせい

物屋へ行つたことや、そこでスミスが狂犬におそはれて、正夫やレイといつしよにふせいだことなどを語つたのでありました。

スミスの父はあらためてブラニイに禮をのべると、今その正夫とレイが山火事に追はれたまま、行方不明になつたことを告げたので、ブラニイは血相をかへて立ちあがつたのであります。そして、びつこの足をのばして、かべにさげられたカンテラをはづしながら叫んだのでした。

『お父さん、僕さがしに行つてくる。正夫もレイも、虎か野象にくはれてしまふ。』

『よし、私も行く。スミスさんたちは、しばらくここで休んでゐてください。』

『とんでもない。私は先頭に立つて行く責任を感じてゐるのです。』

カンテラが二つともされて、その光の中で四人は丸木ばしごをおりると、前の川べりに出たのであります。

ブラニイの父は、振りかへつてたづねました。

『スミスさん。見うしなつたといふのは、どの方面です。』

『それが、むちやくちやに逃げまはつたので、今ではさつぱり見當がつきません。だいたい山火事はどの方向でした。』
『このまつ正面に、三ツ星さまがかがやいてゐるでせう。あの下あたりいつたいの森林です。』
『では、ここからもうすこし左の方にあたるかも知れません。』
『さうですか。たぶん森にはもうゐまい。ゐたらおしまひです。この川べりを鉦をたたきながらさがしてみませう。ブラニイ、ドラを持つて來なさい。』
『はい。』
と、ブラニイは家の方にかけながら言つたのであります。
『さうだ、正夫にもらつたハーモニカで、あの曲を吹き立ててみよう。』
まもなく打ち鳴らされたドラの音は、靜かな川のおもてに遠く遠くひびきかへるのでありました。

りました。

ゴゴゴーン　ゴンゴンゴーン……
ゴゴゴーン　ゴンゴンゴーン……

鉦のあひまにブラニイとスミス少年とが、聲をからして星空に名を呼びつづけるのであります。

『おーい、正夫やーい、正夫やーい。』
『おーい、レイやーい、レイやーい。』

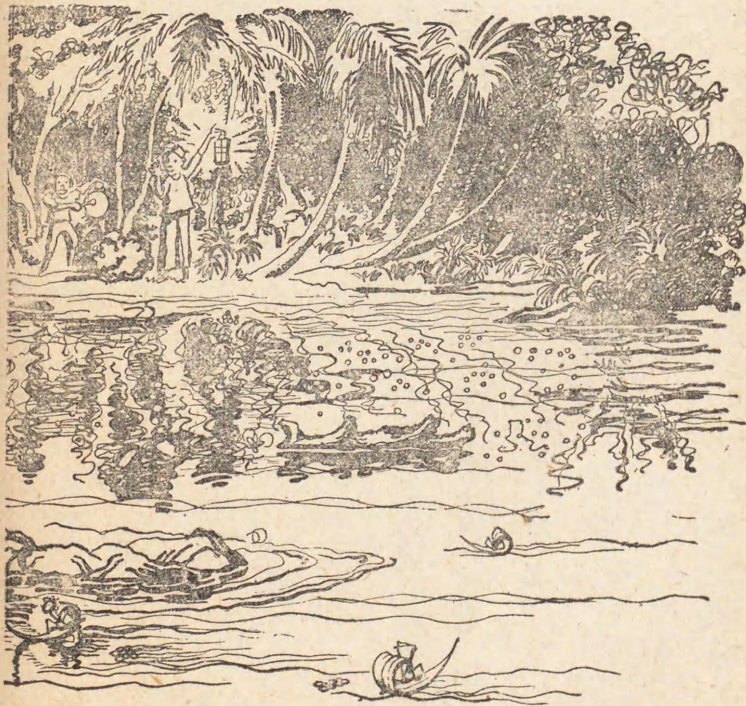
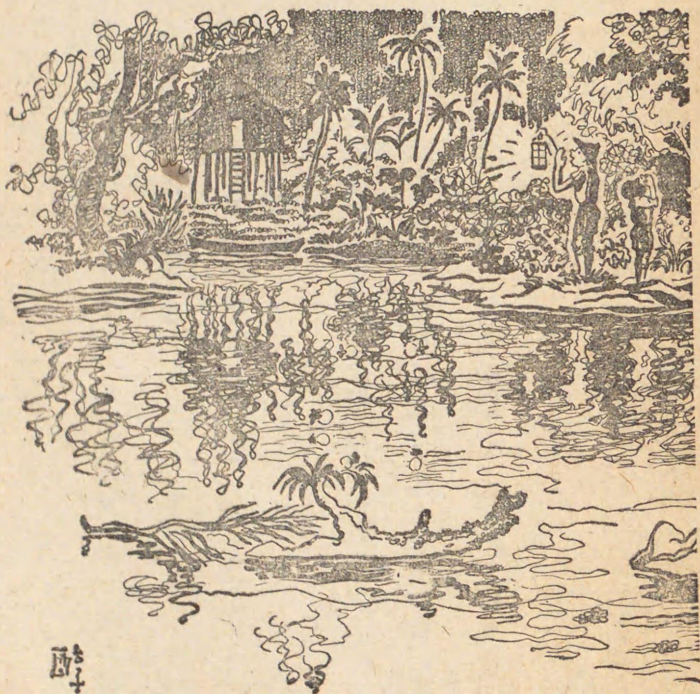
夜のとばりが深まるとともに、密林にはあやしげな鳥とけだものがのさばり出したものか、夜ぜみの聲もいつか消えて、川べりには、しんしんと冷えきつた風が流れると、進む四人の足もとから、寶石(はうせき)を散らすやうに無數の螢がまひあがつたのでありました。

『正夫やーい、正夫やーい。』
『レイやーい、レイやーい。』

スミスの父は四方の闇(やみ)に向かつて、カンテラの光をぐるりぐるりと輪にまはしながら、

がさごそと羊齒るゐをふみしめて行くと、ブラニイの父は、はるかに鉦のひびきがきえて行くたびに何か答へはないものかと、耳をすませながら進むのでありました。

　をりからの風に、ふと、皆は何かきこえて來たやうな氣がしたので、足をとめました。すると、また何の聲かきこえて來たのでした。

　はてなと、胸をときめかして四人が、顔を見合せると、さらにすきとほる聲がかすかに遠くからひびいて

ほる聲がかすかに遠くからひびいて來たのでありました。
このとき首をつき出して、かたづをのんでゐたブラニイが、いきなり不自由な足で地をけつてをどりあがつたのであります。
『ゐた、ゐた。正夫だ、正夫だ。あれは僕がかたみにおいて來た笛だ。鼻笛の音だ。』
と、ブラニイは正夫の名を呼びながら、思はず四五メートルも走ると、つかんでゐたハーモニカに氣がついて立ちどまるや、力いつぱい吹きた

てたのであります。その曲はシンガポールで別れるときに、正夫からハーモニカとともにもらつて來た、あの愛國行進曲でありました。
吹き終へると、一しゆん靜けさを增したやみをぬつて、やがて川上から、同じ曲の笛のひびきが返されて來たので、ふたたびあたりの森に鉦(かね)は高らかにこだまして、カンテラの灯(ひ)がはげしく振られると、息をはづませて正夫とレイの名を呼ぶ聲が、川上へ川上へといそいだのであります。
かんらんの太い枝は入りくみながら流れをおほつて、その下に橫たはる岩の上に、レイを藤づるで背負つた正夫が銃をにぎりしめて、八方、猛獸の眼に氣をくばりながら、鼻笛を吹いてゐるすがたが、靑白く螢に照らし出されて發見されたのは、それから程もないことでありました。
正夫は安心のためにぶつ倒れさうになる心をしつかりと持ちなほして、一部しじゆうを語ると、今はこんこんとねむりつづけてゐるレイが、皆の手で正夫の背からおろされたの

語ると、今はこんこんとねむりつづけてゐるレイが、皆の手で正夫の背からおろされたのであります。

呼べど叫べど、もはやレイの答へはなく、人々の聲が闇にこだまするばかりであります。

そのなかで正夫は二疋の鰐の皮を指して、ブラニイに告げたのでありました。

『レイは、君にもしあへたなら、この鰐の皮をおみやげにあげるのだと、今朝から大事に背負ひつづけてゐたのだよ。さあ、受けとつてくれたまへ。』

にはかにすすり泣く聲がそここにおこつて、ブラニイが横たはつたレイにとりすがつたのであります。

『僕は、僕は、君に鰐の皮をおくる約束をしたのに、君からもらはうとは思はなかつた。レイ、レイ、ありがたう、ありがたう。たしかにもらつたよ、もらつたよ。』

川風に、しだいに冷えきつてゆくレイの手をにぎりしめて、スミスも叫ぶのでありました。

『レイ、レイ、君は僕の身がはりになつて犬のために倒れたのだ。僕はどうしたら君にむ

くゆることができるのだ。レイ、しつかりしてくれ。それを教へてくれ。もう一度生きかへつてくれ。レイよ、レイよ。』

二日月も沈んだ星空に、螢の大群が一文字に川を渡つて行く下で、少年たちの泣聲がしだいに高まつて來るのでありました。

20

正夫は親友レイの葬式を送つてから、しばらくはさびしさにたへられない思ひで暮らしてゐましたが、そのあひだにも戰亂の砲火はいよいよ歐洲全土をおほひつくして、今は東洋の天地にもけはしい風雲がうごきはじめたかと見るまに、つひにイギリスは、にせ紳士の面をぬぎ捨てて、かくし持つたけだものの心をむき出しにあらはすと、日本人よ、お前たちは敵國人であるから思ひしるがよいとさけんで、シンガポールをはじめマライ各地に住む邦人を、めちやくちやにいぢめにかかつたのであります。

住む邦人を、めちやくちやにいぢめにかかつたのであります。

祖國をはなれて三千海里、燒けつく熱帶の土地に同胞が、努力と奮闘と、ふき出すあせの玉からきづきあげたすべての商店も、會社、銀行、鑛山、ゴム園も、今はかたくとびらが閉ざされて、そのかげで、無念の齒ぎしりをかんでこぶしを振りあげた日本人が、今に見てゐろと胸の血潮をわきたたせてゐるなかに、正夫の一家もあつたのであります。

をりから、同胞は、もはや一刻もこの地にとどまることなく、直ちに本船で歸國すべしとの命令を持つた引揚船（扶桑丸）が、港外七十マイルにわたつてめぐらされた、敷設水雷をたくみにわけて、日本からシンガポール港に入港したのでありました。

『お父さん、僕たちも歸るのですか。』

と、正夫はたづねたのであります。

『もうかうなつては、一たん歸るより方法はあるまい。』

と、正夫一家をはじめマライ、シンガポールに住む日本人は、敵國人からはづかしめをうけるよりは、むしろいさぎよく、すべての物をすてて、日本人の態度を持ちつづけたま

ま祖國のふところに歸らうと、身のまはり品をわづか一個の手荷物にくくりあげて、乘船のしたくをととのへたのであります。

　しかしイギリスは扶桑丸を岸壁によせつけようとはしないで、物すごい要塞のまつただ中にとめおいたまま、水も石炭も積むことをゆるさず、多くの憲兵と巡査とを船内にとまりこませると、そのまま三日も四日も陸上との交通を斷つてしまつたのでありました。

　あまりの仕打ちに、煮えかへる思ひを持ちつづけた正夫の父は、よし、ここが日本人の肚の見せどころだと、ある夜親しい人々を招いて「シンガポールさよなら俳句會」を、今は患者一人とてもない、がらんとした病院の日本間の一室で、開催したのでありました。

　集まる者は、俳句ずきの田中ゴム園長さん、三星會社支店長さん、寫眞機屋の村川さん雜貨商の玉川さんなど二十餘人が輪になつて、たたみの上にいうとあぐらをかいて俳句をつくる有樣は、今日の今日まで數十年かかつて積みあげた物を、ことごとく今失つて歸國する人たちばかりの會とは思へないほど、すみきつたものがありました。

歸國する人たちばかりの會とは思へないほど、すみきつたものがありました。
灯『なるほど、一年中變化のないことちがつて、四季のある日本はなつかしいですな。
『こちら向け我もさびしき秋の暮、といふ芭蕉の句がありましたな。』
『內地は、もう秋風のたつ頃でせうな。』
ともせと言ひつつ出るや秋の暮。これはたしか蕪村の句でしたな。』
『秋の句には、どれもしみじみとしたものがうたはれてゐますね。秋さびしあみがさ着たる人の影。いよいよ私たちもここ數日のうちに、あみ笠をかぶつた旅人となりますかな。』
『なんの、なんの、近いうちにまた大手を振つて日本から乘りこんで來ますわい。』
『全く、白人どもに負けてゐては御先祖樣に申しわけがたちませんや。秋晴れや日本の富士を見にかへる。この氣持ちで、はつらつと船に乘りますか。』
『これはいい。さんせい、さんせい。しかし、いよいよ戰ひがはじまりますかな。』
『からなつたら、やるかもしれませんぞ。そのときには、お互ひに醫學博士や支店長の肩書をなげすてて、銃をとつてこのシンガポールへ、一番乘りをしなければ、內地の人に申

しわけがたちませんな。』
『もちろんですとも。大いにやりますぞ。』
『やりますとも。』
『正夫、どうだな、お前も今夜の仲間にはいれるだけの落ちつきを持つてゐるかね。』
『お父さん、僕だつて大丈夫です。』
『さうか、よしよし。それではお前が作つてゐるといふ少年俳句といふものを、今夜皆さんにお見せしないかね。』
『だつて、まだ、下手なんです。』
『下手でもかまはん、かまはん。シンガポールよ、さよなら俳句會だ。記念に一つ讀んでごらん。』
正夫は、自分の部屋から赤い手帳を持つて來たのであります。
『では、僕讀みます。この頃は毎日日本のことばかりを思ひ出してゐるので、俳句も內地

のことばかりなのです。』

『けつこう、けつこう。』

やがて正夫は一句づつ讀みはじめたのでありました。

（福引の凧(たこ)を大きく背負(しよ)ひかへる。）

（正月のおびのがまぐち取りいだす。）

（ジヤンケンのはさみをくぐり散るさくら。）

（春雨のマントにおたふくかぜかくす。）

（母が見てゐる運動會のつなを引く。）

（サーカスの天幕(てんと)のすみにラムネ呼ぶ。）

（卒業の寫眞のなかの櫻かな。）

（となり町にはいるまんどん振りかざす。）

（母の友來るや彼岸(ひがん)の包みさげ。）

（十五夜の町へたばこを買はさるる。）
（マスクした先生と知りあわてたり。）
（喧嘩瘤夜寒むの夜具に覆ひかくす。）

『なるほど、なるほど。』
『子供には、子供の俳句があるものですなあ。』
と、人々は感心しながら、會は夜がふけるとともに、ますます盛んになつて行くのでありました。

しかしこの間にも引揚船扶桑丸は、海上鐵條網のまん中に引きとめられて、東口砲臺の根元にぐわんばつてゐる掃海艇のサーチライトをまともにあびせかけられたまま、度を越したイギリス人どもの監視ぶりに、うらみをのんで靜かに錨をおろしてゐたのであります。
『がまんせい、がまんせい。マライ在留邦人五百餘名に、祖國の土を無事にふませなけれ

ばならない重い責任があるのだ。皆、がまんせい、がまんせい。』
石橋船長と、中島事務長が、日頃のやさしい顔に悲憤の涙をおさへてなだめまはると、全船員は甲板からサーチライトをにらみかへして、口々にさけんだのであります。
『船にゐてさへもこのつらさだ。陸にゐる人たちよ、あなたがたは、どんなにつらい思ひをしのんでをられるのか。おーい、おーい、ぐわんばつてくれ。たのむ、たのむ。』
日本からは、イギリスの引揚船「安徽號」が、事もなく英人を乘せて出帆したのに對して、扶桑丸は停船すでに七日となつても、未だに岸壁へつけないのであります。
さすがにシンガポール鶴見領事は、かんにん袋のをを切つて、この横暴さは何事であるかと、決死のかくごでイギリスにつめよつたのであります。
イギリスも、今は安徽號が無事に出帆したと聞いては、これ以上にわけもなく引揚船をおさへておくことはできないので、岸壁に着くことも、炭水、食料を積むこともゆるしたので、扶桑丸はふたたび危險な海上鐵條網のあひだを通りぬけて、西端第二十號棧橋に横

づけになつたのでありました。

『しかし、乘船は明日、即ち十月一日、明後日二日は午前六時に岸壁をはなれて、沖合に停船すべし。』

ああ、何といふむごい命令であらう。この犬畜生めらと、今は船員たちのいかり燃え立つた大きな眼が、相手を張り倒さんいきほひで見おろす棧橋には、相變らずどこもかしこも軍需品の山で、その向かうには稅關と移民局の建物とがをりからの日ざしに、かつと照りかがやいて、あたり一帶には急に兵隊、巡査などの警戒が、嚴重になつてゐるのでありました。そして、又しても二十名ばかりの兵隊が、むちを持つて、船內警戒に名をかりて乘りこんで來たのであります。

21

十月一日。待ちに待つた乘船日であります。空にはまだ星がまたたいてゐて、五百五十

二人の引揚げ邦人は、まだ夜の明けきらないうちから、ぞくぞくと棧橋につめかけてきたのであります。正夫も父母にともなはれて來ると、待ちかまへてゐたイギリス官憲は、すべての邦人に對して、捕虜か罪人のやうな取扱ひを開始したのでした。

三十三度の炎天の下に列となつた中から、六七歳の男の子と、水色の服をつけた婦人があわただしくかつぎ出されたのであります。

『水だ水だ、水はないか水は――。』

列の一個所がみだれて四五人のさけびがあがると、眼の青い兵隊はそれを見ながら、せせら笑つて答へたのでした。

『水か。』

『さうです。』

『水はある。』

『すみません、日射病で倒れたのです。のませてやつてください。』

『水はな、船に有りあまるほど與へておいたから、乘船したらゆつくりと飮ませてやるがよい。』

『な、なんだと。』

いきなりヘルメット帽子をはづすと、その下から品の良い青年の顔があらはれて、とつさに、にぎりこぶしをひるがへさうとしたので、周圍の同胞が涙の聲でその腕をおさへつけたのであります。

『がまん、がまん、がまんするんだ。がまんしてくれ。』

『わかりました、わかりました。すみません、皆さん。こいつら、今に見てゐろ、軍刀を振りかざして、きつとここへ乘りこんで來てくれるぞ。』

その聲が終らないうちに、前列にゐた七十歳をすぎた老婆が、つかれた身をもたせてゐた籐の杖を、ふいに他の兵隊がさつとうばひとつたので、老人はよろよろとつんのめつて、赤土みちにあごをついて倒れたのであります。

あつと、血相をかへた口ひげのある紳士が、す早く老人をだきおこして自分の肩に背負ふと、やにはにその兵隊へつかみかかる勢ひを示したので、老婆は背中から必死にその肩をおさへつけて叫んだのでありました。

『息子、早まるな。皆様のごめいわくになる道理がわからぬか。ばか者めが。』

『は、はい。』

と、いかりにふるへて、波をうつ白い麻服の大きな肩を、なほもしつかりと引きよせる老婆の細い手首も、くやしさのあまりがくがくとふるへてゐるのを見たとき、正夫もそのまはりにゐた数十人の頬にもとめどなく涙がつたはつて、ああこれが永年住みなれたシンガポールを引揚げる、われわれ五百五十二人の日本人の姿であるのかと、皆はぬれた眼を力のかぎり見合せて、血のたぎるくちびるを堅くかんだのであります。

やがて、乗船検査は開始されました。

検査は一人づつ監視人がついて、屋内に呼び入れられたのでありますが、邦人には紙一

枚さへも持たせず、荷物はすべてマライ人とインド人に運ばせて、長い臺の上に乘せさせると、そこにずらりとならんだ二十餘人のイギリス檢査官は、邦人が祖國へかへる心をこめた荷づくり品のことごとくを、ずたずたに切り開き、あるひは引きさいて、檢査をはじめたのであります。

『この品は何だ。』

『それは石鹼です。』

『中をしらべる。文書か金でも入つてゐるかも知れぬから。』

石鹼は、たちまち二つに斷たれてしまつたのであります。

『次ぎのこれは何だ。』

『妻のおびであります。』

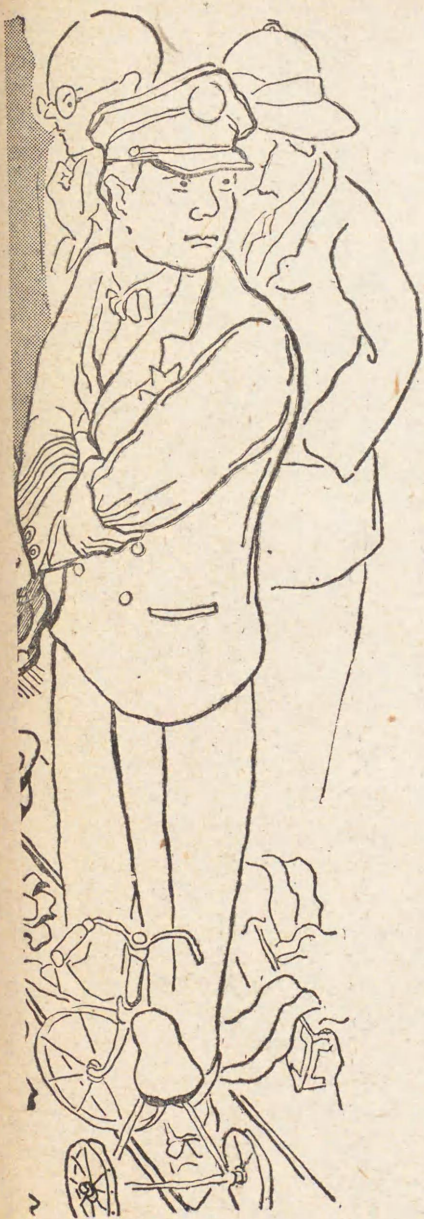
『これもあやしい。中をしらべろ。』

浮草模樣のおびは、むざんにも芯を引き出されて、投げかへされたのであります。

『次ぎの品。これは何だ。』
『子供のお人形であります。』
『これもしらべろ。』
ぽきんと、するどい音がしたかと見るまに、振袖すがたの大きな日本人形は、そのあどけない首を失つてゐたのでありました。
きやつと、聲をあげて檢査官の太い手にむしやぶりつく少女のうしろから、その父親の殺氣だつた聲が、イギリス人を張り倒すやうにあびせかけられたのであります。
『お前たちはそんなことをして、子を持つ父親といへるのかつ。』
『だまれ。ぐづぐづいふと乘船を許さぬぞ。』
新しい品はタオル一枚、靴下一足さへも沒收されて、三輪車のタイヤははづされ、靴底は全部引きはがされて、五百餘人の乘船が終つたのは夜の十時でありました。
人々はあまりのくやしさに船室へ去らうともせず、甲板に立ちつくしたまま、今に見ろ

今に見てゐろと、星空をあふいで悲憤の涙をぬぐつてゐるところへ、船長さんも來て泣き船員さんも來て泣いてゐるのであります。

やがて船長さんは、胸を張つて叫んだのでありました。

『皆さん、これが假面をとりはづしたイギリスの正體であります。われわれは、イギリスのごときものに負けてゐる民族ではありません。やがては、ふたたび大手を振つて、このシ

ンガポールへ日本人が乘りこんで來る日のために、今こそ祖國へもどつてからの新たなる奮鬪努力を、あらためてちかひ合はうではありませんか。』

『さうだ、さうだ。』

『もう泣くな、泣くな。』

と、はげみ合ふ聲がわきおこつたとき、事務長さんが船室からあらはれて、何か船長さんに話したかと見ると、船長さんの顏が急にほころびて、にこにこと皆に告げたのでありました。

『ただ今、三等船客の濱川ふじさんが、玉のやうな男の赤ちやんをおうみになりました。母子ともに至つて御健康であります。』

ああ午前七時から、赤道直下の燒けつく太陽にじりじりとさらされたまま、やうやく午後の十時に乘船出來た安心のために、にはかにお產がはじまつたのでありませう。しかしまづはめでたい、めでたいと、人々の顏に一樣に喜びの色があらはれたのでありました。

まづはめでたい、めでたいと、人々の顔に一様に喜びの色があらはれたのであります。

船は翌朝六時に岸壁をはなれて、ふたたび沖合に錨をおろすと、その夜、船を訪れた鶴見總領事は、引揚邦人に向かつてこれまでの幾多の忍耐勞苦をなぐさめ、更に前途をはげましては、共に目がしらをぬぐひながらお別れの挨拶を交したのであります。そして船上からおごそかに東方を遙拜し、君が代を合唱すれば、その聲は、機雷、鐵條網をめぐつて渦をまくシンガポール港外の波音をたたき消して、夜の海上に、淸く、力強く、更にたくましく日本人の聲をとどろかせたのであります。

明ければ三日、船は午前七時に針路を日本にさし向けて出帆すると、イギリスの假裝巡洋艦と驅逐艦とが前後左右につきまとつてくるうちに、とつぜん、雲間から爆擊機があらはれたかと見るまに、マストすれすれにせまつて、右舷に四五發の白煙彈を投下して、爆擊演習をはじめたのであります。

何を負けるかと、折から甲板で離れ去るシンガポールをながめてゐた正夫たち少年の一團は、爆擊機のとどろくその下でマツトを敷きつめて土俵をつくると、元氣な角力大會を

やりだしたのであります。

『はつけよいや、のこつた、のこつた。』

『負けるな、負けるな。』

『負けてたまるか。』

敵機にとり組むいきほひで、マットの上に、全力をかたむけてはだかで組合ふ數十人の少年をかこんで、今はわあわあと喜びさわぐ全船の男、女、老人、子供たちの眼には、もはやイギリスの軍艦も爆撃機もなく、船は南支那海を一路、日本へ日本へと波をけり進んでゐるのでありました。

22

昭和十六年十二月八日。

まだ明けきらないま夜中のシンガポールは、全島におひしげつた樹木と、蟲の音を海の

まだ明けきらないま夜中のシンガポールは、全島におひしげつた樹木と、蟲の音を海の微風にそよがせて、ひつそりと月光にかがやいてゐるのでありました。

町も人も、深いねむりにおちてゐる午前二時頃、けたたましい電話の呼鈴に夢をやぶられたシンガポール防空局長は、受話器をはづすと、いきなり耳を打つて來た大事件に、色を失つたのであります。

『ただいま、午前一時二十分頃、日本軍がコタパル及びその北方附近の海上から上陸作戦を決行して、目下コタパル飛行場めざして前進中であります。我陸軍はこれと交戰中にして、我空軍もまた敵船舶を攻撃してをります。なほバンコック沖に、敵艦船十隻が出現いたしました。』

ふいを打たれて、腰を拔かすほどにおどろいた防空局長は、軍服に手をとほすのもうはのそらで、防空局を總動員すると、直ちに空襲サイレンを全市内に高鳴らせたのであります。

しかし市民の支那人、マライ人、インド人などの大部分は、またいつもの防空訓練かと

つぶやいたまま、寝がへりをうつただけで、燈火は煌々と窓にも街路にもかがやいて、その下を防空團員が聲をからしながら、鐵かぶとで飛びまはつてゐるのでありました。

をりから、十日の月明りに銀翼をつらねた日本海軍爆撃隊は、だうだうとシンガポール上空をおほひつくすと、たちまち、全彈を要所要所にたたきつけて、南國の地軸をゆるがしたかと見るまに、ここに大東亞戰爭は開始されたのであります。

午前六時、シンガポール放送局は、やうやくこの驚くニユースを全市民にしどろもどろの聲で告げたのでした。

(日本軍は、今朝、香港、マライ、フイリツピン、ハワイを同時に攻撃し、わがシンガポール及びマニラ、ホノルルは一せいに爆撃されました。)

人口七十四萬、日の出と同時にかつと照りつける熱帶の町、シンガポールのそここここに一團となつた各國人は、このすばらしい日本の作戰にただばうぜんとして、たうてい信じることの出來ない胸を語りあつてゐるうちに、マライ半島コタパル附近に上陸した日本軍

は、敵陣から打ち出す四十餘門の野砲、はくげき砲にさらされて、決死の突撃をくりかへしてゐたのであります。

進め、進めと、全軍肉彈となつて突つこむ波うちぎはの、向かう十メートルのところには、がんじやうな鐵條網が、屋根型、輪型などにえんえんとめぐらされて、地雷は敷かれさんご樹と椰子林にかくされた敵のトーチカ陣から、一せいに集中射撃をあびせかけてくると、夜あけの空に爆音をとどろかして、十數機の敵機が地上すれすれに機關銃でおそひかかつて來たのであります。

頭上には敵機、前方にはトーチカ、うしろには、無念にも味方の一船が、敵機の爆彈に火焰を吹きあげて海面を眞紅に染めながら、しかもかたむく船上では、白はちまきの高射砲兵が敵機に打ちつづけてゐる有樣が、めらめらと燃えあがる焰のなかに仁王のやうに見えて、突撃隊は續々と海中にとびこみながら、銃劍をひらめかしては、岸に突貫の聲をあげておよぎよつてくるのであります。

しかし敵の砲火はますます物すごく、今はじりじりと砂をほつて前進することさへもゆるしません。
『隊長殿、このままでは味方の全滅であります。正面のトーチカ攻撃に、私たちをぜひやらせてください。』
と、このとき隊長のそばににぢりよつた四人の兵隊が、身を伏せたまま叫んだのであります。
ああ、このすさまじくほえ狂ふ銃火の中を、どのやうにして行くつもりなのか、今まで幾回となくくりかへした決死隊員のうちに、一人でも生きてもどつた者があるであらうかと、同じく地に伏した隊長は、その兵たちを見つめたのであります。
しかし、敵陣は、どんな場合でも、必ず乗りとらなければなりません。
『よし、お前たち、も一度やつて見ろ。行け。』
『はい。』

と、答へた兵隊は、齒をくひしばつて左右に二人づつ分れると、爪ははがれて海水のしみこむ指さきで、じりじり、じりじりと、ふたたび砂地を掘つて敵陣に向かつたのであります。

敵はそれを見つけたのか、一きはほえるやうに銃火をその方向にあびせかけると、四人のすがたは、もはや砲煙と砂けむりにとざされて隊長の目には見ることも出來ません。すると、なんといふことであらう。狂ふやうに火をはいてゐた正面の二つのトーチカが、しばらくののちに、ふいに、はたと、とめられたのであります。

それ、今だと、どつとときの聲をあげて、胸を射ぬかれた兵も立ちあがつて、銃劍を振りかざして敵陣にをどりこんで見れば、四人の兵隊は、おのおの自分の首を敵のトーチカに力一ぱい突つこんで、銃眼をしつかりと頭でふたをしたまま息がたえてゐるのでありました。

夜は、ほのぼのと明けはなれたのであります。

激戰ののちにコタパル飛行場を占領した日本軍の一隊は、そのまま東海岸を南に下つて路もない密林と、潮の引いた海岸を、イギリスが難攻不落とほこるシンガポール大要塞めざして進撃すると、他の一隊は、猛獸、毒蛇に滿ちたマライ半島を横ぎつて、西海岸に到着くこれまたシンガポールへ、シンガポールへと、軍靴の音も高らかに進撃をつづけたのであります。

23

マライ半島をしだいに北から追はれて來たイギリス軍は、バトパハ町のトーチカ内にごつたがへして、日本軍の砲聲は日に日に、いんいんと近づいて來たのであります。

もはやブラニイ親子は、鰐の皮などをとつてゐるわけにはいきません。マライ人たちが昔から傳說で待ちに待つてゐた神の國の兵隊が、しかも今はブラニイ親子の妻の國の兵隊となり、母の國の兵隊となつて、東洋の天地にがうまん無禮きはまりなくふるまつてゐた

イギリス人を一人のこらずたたきふせて、怒濤のやうに大密林から攻めよせて來たのであります。

『さあブラニイ、お前とお父さんとがお役に立つ時が今こそ來たのだ。お前も私も日本語が話せる。さあ、神の國の兵隊の先頭に立つて、通譯となつて進むのだ。』

『お父さん。もしもお母さんが今生きてをられたなら、日本軍を見て、どんなにお喜びになられることでせう。』

『さうだ、二人で、お母さんの分まで働きぬくのだ。私はこの日が來ることを信じて、イギリス軍のトーチカがどこと、どこにあるかを、ことごとくしらべつくしてここに書きあげておいたのだ。これを日本軍に渡す。』

『お父さん、ありがたう。』

『さあ、行かう。』

ブラニイは、母がいつも大切にしてゐた黒いうるしぬりの日本の小箱から、日の丸の旗

をなつかしくとり出すと、それをていねいにポケットにしまつたのであります。そして父と獨木舟にとび乘ると、日本軍が攻めよせてくる大砲のとどろきをたよりに、椰子林の中へ力一ぱいこぎ出したのであります。

　空は砲煙におほはれて、南北の陣地から打ち出す砲聲に、密林の木々はぐわうぐわうとどよめき、こだまして、その中の流れはあわただしく波立つてゐるのでした。と、ふいに、

『誰か。』

と、するどいマライ語が二人にあびせかけられたのであります。

　はつと、ブラニイ親子は腕をつかみ合つてあたりを見まはしたのですが、兩岸には立木のやうにしげりしげつた羊齒が一めんにせまつてゐるばかりで、人かげは見えません。

と、ふたたび「誰か」と、こんどは小さく日本語がかけられたのであります。

　とつさに、ブラニイはポケットから日章旗を振りかざして「日本人だ」とさけぶと、目の前の、羊齒のかげから、日本兵が一人むつくりと立ちあがつて、小手をかざしてまねい

たのであります。

24

シンガポール攻撃にあたつた大日本帝國軍人は、指揮官から兵隊にいたるまで、その軍服はずたずたに木々に引きさかれて、血にそまり、晝なほ暗く天をとざして立ちならぶ巨木のかげを手さぐりで進めば、くもの巣のやうに張りめぐらされた葛かづらは身にからまり、老ひくちてつもりつもつた枝葉に足をうばはれて、思はずつんのめれば、その上から血にうゑた山ひるが無數に振りかかる大密林を、汗とほこりにまみれて進軍すること一千一百キロ。

ある時は、じりじりと照りつける百三十餘度の熱帶の日ざしに、鐵兜をこがし、目はくらみ、をりから一天にはかにかき曇つたかと見るうちに、どうどうと落ちかかる大雷雨に身はたたかれて、さつと晴れ上れば、空いつぱいにかかる虹をあふいで、胸までぬかる大

濕地帶をふみこえ、ふみこえ、前進また前進をつづけたのであります。

その間にイギリスがほこる第一防禦線ジットラ要塞をおとし入れてペナン島を占領し、つづいてイポーを攻略し、またクワンタンの敵をたたき伏せ、スリムの大せんめつ戰に凱歌をあげ、ゲマスをうばひ、マラツカを占領し、バトパハの戰ひと、東西から勝ちぬいた皇軍が、泥まみれ、ひげづらとなつて、炎々と燃えあがるマライ半島の最南端、ジョホール・バルに突入したのは、コタパルに上陸してからここに五十五日目のことでありました。

兵隊も、馬も、犬も、また戰車も、トラックも、大砲も、自轉車部隊も、ことごとくマライの赤土に全身をよごしぬいて、なほさつそうと日章旗をひるがへしてくる列の中に、ブラニイ親子も汗とほこりまみれになつて、日の丸の腕章を振りながら兵隊とならんで來たのであります。

對岸のシンガポールには、日本軍の爆撃をうけたセレター軍港の重油タンクが、空一めんに黒煙をまきあげて、太陽は光を失つたままかすんでをります。

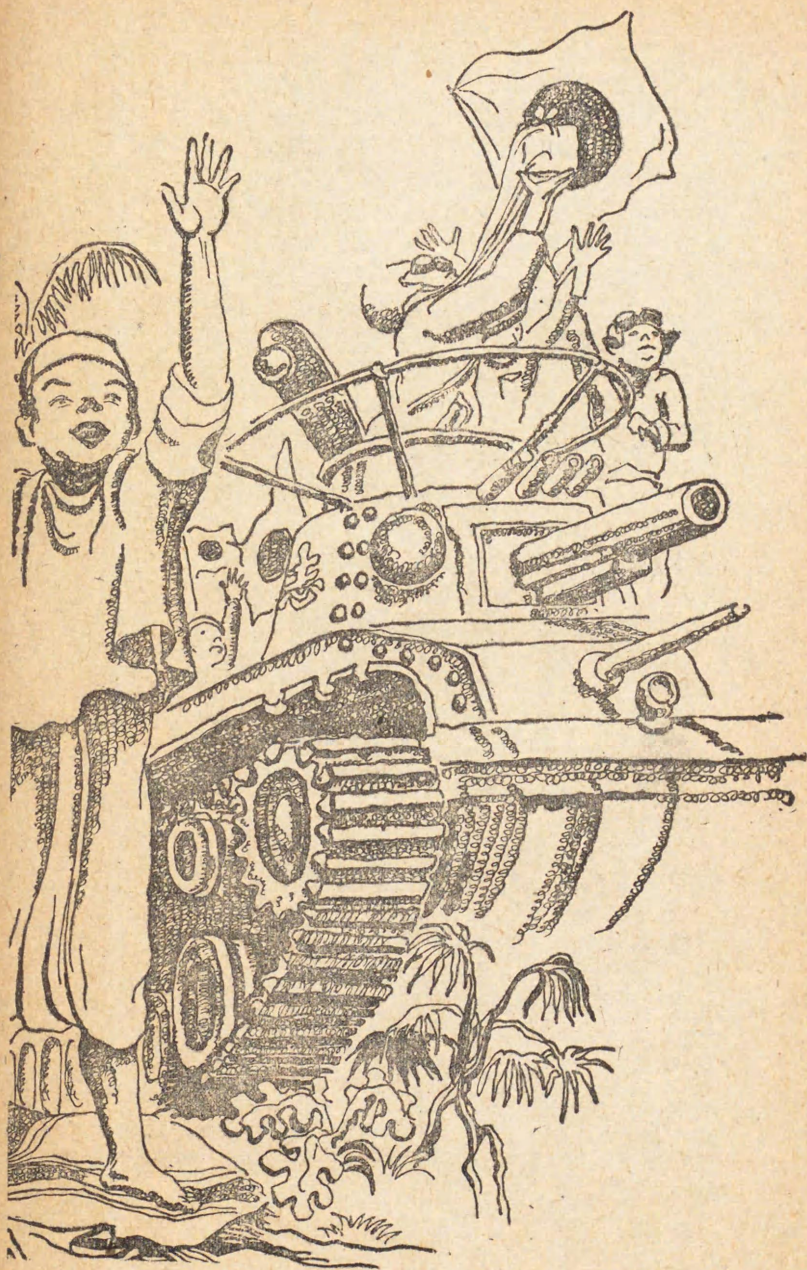
『お父さん、兵隊さんたちが、皆泣いてゐる。』
ブラニイの聲に、お父さんもあわてて眺めたのでした。
兵士たちは、おのおの背嚢から戰友の遺骨をとり出して、シンガポールに向かつて高々とさしあげると、皆涙をながして物をいつてゐるのでありました。
『おい、きさま、あれが見えるか。あれがシンガポールだぞ。おまへが死ぬまで口にしてゐたシンガポールだぞ。見えるか、見えるか。もう一とふんばりして、あの土をお前にふませてやるから、待つてろ、な、待つてろ。』
ヅシーン、ダダアン——
と、近くでまたも敵彈が落下して、土煙があがるその上を、友軍の爆撃機が入道雲をついて、大編隊でしきりなくシンガポールへシンガポールへと飛びつづき、飛びかへりしては巨彈の雨を降らせてゐるのであります。
『やるぞ。』

『やるぞ。』

と、どの兵隊もまつ黒な顔をぎらぎらと光らせて、今か今かと突撃命令を待ちながらにらみつける敵陣地には、またも火の手がひろがつて、椰子林が燃えあがる、兵舍が吹き飛ぶ。無電塔は天空高く飛びちつて、敵味方の砲聲はぐわうぐわうと天地をゆるがしてゐるのであります。

九日午前零時、つひにシンガポール島敵前上陸は敢行されたのであります。暗夜の中を靜々と進む數十隻の舟艇は、ジヨホール海峽をうづめて、今こそ、最後のとどめを刺さうと、ふるひ立つた將兵を乘せて、まつしぐらにシンガポール島めざして突入したのであります。

十餘萬の敵軍は、それ、この時だとばかりに、すべての砲門を一せいに開いて猛然と打ちかかつて來たので、シンガポール島の岸は、にはかにわきあがる白雲のやうな砲煙におほはれて、そこから砲彈、銃彈、手榴彈がすきまなくあびせかけられると、つひに敵は、重油を海に流しこんで、その中へ燒夷彈を死にものぐるひで投げつけたのであります。

重油を海に流しこんで、その中へ燒夷彈を死にものぐるひで投げつけたのであります。
海はたちまち地獄繪のやうに燃えあがると、日本軍の舟艇は火だるまとなつて、そのまま火の中を、あとから、あとからと海峽をうづめつくして突擊してくるのでありました。
『突つこめ、突つこめ。死ぬまで突つこめ。』
『敵は一兵も殘すな。』
『さあこい、さあこい。』
と、火と燃える舟を岸にたたきつけて、飛びこんでくる勇士たちの足の下に、ああ、五十五日間、命をかけてマライの大密林を進擊して來た敵の牙城シンガポールの大地が、友軍の砲火に熱しきつて燃えあがつてゐるのであります。
『おお、分隊長どの。足下はシンガポールの土でありますか。』
『さうだ　シンガポールだ、シンガポールだ。おい、背中のきさま。着いたぞ。着いたのだぞ。』

背囊の中の遺骨をゆすぶりながら突つこむ兵士たちの目の前に、シュル、シュル、シュルと、敵前上陸成功信號燈が、火焔と星かげのみなぎる大空に打ちあげられました。
激戰、死鬪をくりかへすこと一週間、つひに昭和十七年二月十五日、敵將はその司令部の鐵塔高く白旗をかかげて、無條件降伏を申し出たのであります。
『天皇陛下、ばんざーい。』
『大日本帝國、ばんざーい。』
ゴム林から、ざんがうから、大砲のかげから、とどろくその聲はシンガポール全島をゆるがして、兵隊たちはずだずだにちぎれた軍服の袖で嬉し涙をぬぐひながら、南國の晴天高く、氣球に結ばれてひるがへつた大日章旗をあふいだのであります。
昭和十七年二月十七日、イギリス領シンガポール島は、ここに大日本帝國の領土昭南島と呼ばれることに大本營から定められました。
もはや東洋人をくひ物にしてゐた、イギリスの根據地ではありません。

もはや東洋人をくひ物にしてゐた、イギリスの根據地ではありません。

日一日と目ざましく復興する昭南島には、爆撃、砲彈で破壞された市街を、イギリス兵の俘虜(ふりよ)どもがなまつ白い全身を汗まみれにして、取りかたづけに使はれてゐますし、その横を日の丸の旗をかかげたマライ半島行の汽車が、誇らかに汽笛を高鳴らせて、ごうごうと通りすぎると、槌(つち)、かんなのひびきにまじつて、大路小路から日本語を習ふ東洋各國民の聲が、明るくきこえて來るのであります。

そのある街の四つかどに、堅く閉ざされた正夫の病院を見あげて、語り合つてゐる二人は、ブラニィ親子でありました。

『ブラニイ、町も人の心も一變して、昔のシンガポールの面影(おもかげ)は、どこかへ吹きとんでしまつたではないか。』

『さうです。これが本當の、アジア人のアジアの姿ですね。お父さん。』

『さうとも。しつかりと働かねばなるまい。もはや私たちは、昔のマライ人ではないぞ。』

『さうです。昔のマライ人ではないぞ。しかし正夫はどこにゐるのだらうか。イギリス兵

にインドへ連れて行かれたのだらうか。それとも、日本へ無事に歸つたのだらうか。』
『心配するなブラニイ。どこにゐたつて、正夫君は日本の力で、又ここへすぐにもどつて來るよ。その時にはこの日本の腕章を、につこりとお見せしようではないか。さあお母さんのお墓へ急がう。』
しみじみと親子が見なほす同仁病院の入口に、何か白い紙きれが赤れんぐわの重しを乘せて、扉の下で風にゆれてゐるのに、ブラニイはふと氣がついたのであります。
『おや、お父さん、あの紙きれはなんでせう。』
『どれどれ、なるほど。』
と、手にとりあげて見ると、どこで習つたのか誰に書いてもらつたのか、下手な日本文字でスミスの手紙が、正夫あてに置かれてあるのでした。
（正夫くん。君と僕とは、今お互ひに敵國どうしであります。
父は日本へ向かつて銃をとるために、本日アメリカへ歸國します。それで僕もいつし

よに歸ります。この戰ひは、アメリカも日本も共に國をかけての戰ひでありますから
このゝち何百年つゞくかわかりません。しかし、戰爭が終りしだい、私たちスミス一家は、日本に歸化して、日本人になる決心をしてゐるのです。
全世界に、日本人ほどすぐれた國民はないことを知つてゐる私たちは、いづれ日本人となつてスミス一族をあなたのお國に榮えさすつもりでをります。
私たちはその祖先となるのでありますから、今後ますます、すべてのことに努力をつくして、すばらしい日本人として、魂を子孫に永久に傳へる覺悟です。
では、日本軍がマライ半島から、たくましくつなみのやうに攻めよせてくるので、今晩、汽船に乘つてシンガポールをさよならします。
僕も今のところアメリカの少國民でありますから、君には負けません。祖國に力を合せて、敵國日本を倒すために戰はなければなりません。さよなら。』
『なまいきなことをいふな。』

『お前らに負けてたまるか。』

と、ブラニイ親子は手紙をにらみつけてから、街角の國旗掲揚塔にはためく日章旗を、今さらに力強くあふいで日本人墓地に急いだのであります。墓地には、正夫の父が建ててくれた母の墓標が、ひつそりと虫の音につつまれてをりました。

ブラニイはその前にいきなりぬかづくと、土に口をあてて叫んだのであります。

『お母さん、お母さん。ここはもはやイギリスの土地ではありません。お母さんが死ぬまで戀しがつてをられた日本の土地です。お母さん、お母さんは祖國の土に眠つてをられるのです。』

二人が、しみじみと墓標をなでさすつてゐたちやうどその頃、日本から昭南島へ向かつた一軍用船がありました。その甲板で、正夫は兩親にかこまれて、元氣よく語つてゐたのであります。

『お父さん、僕たちは今、日本から、日本へ航海をするのですね。』

『さうだ。シンガポールなどはすでにほろびて無い。かがやく昭南島が行手にあるばかりだ。』

『昭南島にもそのうちに航空學校が出來るでせうか。』

『いづれは出來るにちがひない。』

『その時には、僕を入學させて下さいね。』

『よしよし、それは正夫のながい間の希望だから、しつかりとやるがよい。』

『インド人、マライ人、支那人の生徒たちにまじつて、僕は日本人としてりつぱな、飛行士になつてみせるぞ。』

『うむ、やれ、やれ。この大東亞戰爭は何十年つづくかわからないし、米英も死物狂ひだ。たとへ敵機が、雨の如く爆彈を投げ落とさうとも、その下で、お父さんは、七十歳になつても、八十歳になつても戰ふぞ。擊ちてし止まむ。擊ちてし止まむだ。』

『僕だつて、敵をたたきのめして、倘その上、手足をもぎとつて、二度とは立ちあがれな

いやうにしなければ、戰ひをやめないぞ。』

『正夫。その心を命のある限り持て。あいつらは、文明人をよそほひながら、じつは人間の皮をかぶつた野獸だ。野獸と戰ふには、少しでも情け容赦を見せたなら、この戰ひは負けるぞ。いいか。』

『はい。僕は、今こそ敵國人と見たなら、たとへあの親友スミスであらうが、一人のこらずたたきのめしてやるつもりです。』

『その言葉こそ、全日本の少國民が、天にこぶしを突きあげて叫ぶべき言葉だ。敵米英は百年も二百年も前から、東洋人に對して、そのやうな手段をとつて來たのだ。今こそ、敵國人は一人のこらず、たたきのめす時が來たのだ。正夫、お父さんとともに、お母さんとともに、力一ぱい戰はうな。』

『はい戰ひます。』

正夫がにつこりと眺める南支那海の波の色は、空よりも美しくかがやきわたつてゐます

が、海上監視員は敵水潜艦に目をくばりながら、船は刻一刻、昭南島めざして波をけたてゐるのでありました。

（をはり）

あとがき

――少國民諸君へ――

この「昭南島」は、ある少國民雜誌へ「シンガポール」といふ題で、十五ケ月間連載したものです。

私がこれを書きはじめたのは、大東亞戰爭が起る半年以上も前のことで、その頃、私は全身の血をたぎらせて、にくい米英と心の中で戰ひながら、この物語りを書いてゐました。そして、いま日本が世界のどんな立場にあるか、また、日本に對して、米英どもがどんなことをたくらんでゐるかを、この中にわかりやすく書き入れて、一刻も早く、諸君が私とともに、腹の中で、まづ米英と戰つてくれるやうにと力をそそいだのであります。

ところが、我が國は、それまで押さへに押さへてゐた堪忍袋(かんにんぶくろ)のをを、つひに斷ち切つてその米英どもに宣戰布告すると同時に、いきなり眞珠灣の敵をたたき伏せて、皇軍をマラ

イ半島に上陸させるが早いか、イギリスが誇るシンガポールなどは、難定のとほり占領してしまつたのであります。ですから、その時雜誌に連載中の九ケ月目からは、「シンガポール」といふ題も「昭南島」と輝しく改めて、今またこの本の題ともしたわけです。

私は戰ふ日本の童話作家の一人として、兵隊さんだけに手柄をたてさせておくわけにはいきません。やはり諸君と同じやうに、種々なことに力をつくして、敵に二度とは立ち上れないほどの打擊を與へるまで、これからも力一ぱいペンをとつて戰つて行く覺悟です。

諸君も、兵隊さんや僕などに、決して負けないでぐわん張つて下さい。物すごい戰ひはさあこれからです。

昭和十八年初夏

東京市本郷區本郷五丁目四五

土家由岐雄

昭和十八年六月十五日印刷
昭和十八年六月二十日發行
（八、〇〇〇部）

（出文協承認 あ480458號）

定價㊝二圓二十錢
特別行爲税相當額 六錢
合計 二圓二十六錢
送料二十錢

（少國民小說）昭南島

著者 土家由岐雄（つちやゆきを）

發行者 東京市淺草區小島町一ノ二七 齊藤嘉久

印刷者 東京市神田區錦町二ノ五 小端勳

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

發行所 東京市淺草區小島町一ノ二七 株式會社 金の星社
（會員番號一〇七五一八）
電話淺草(84)五二六九番
振替東京六四六七八番